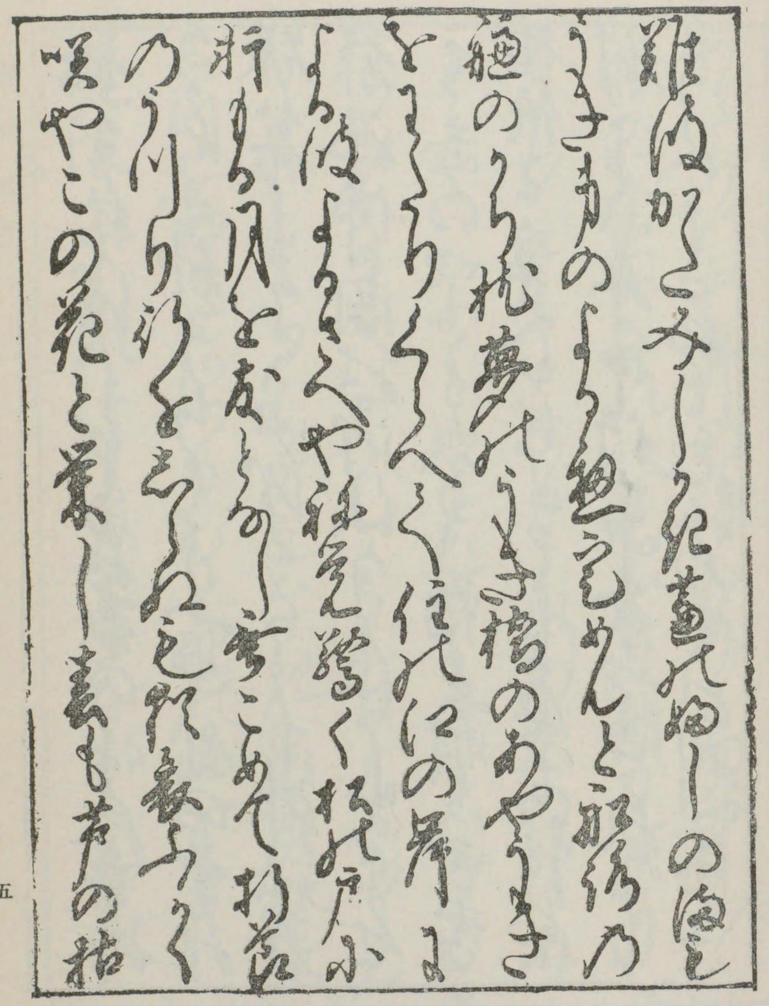
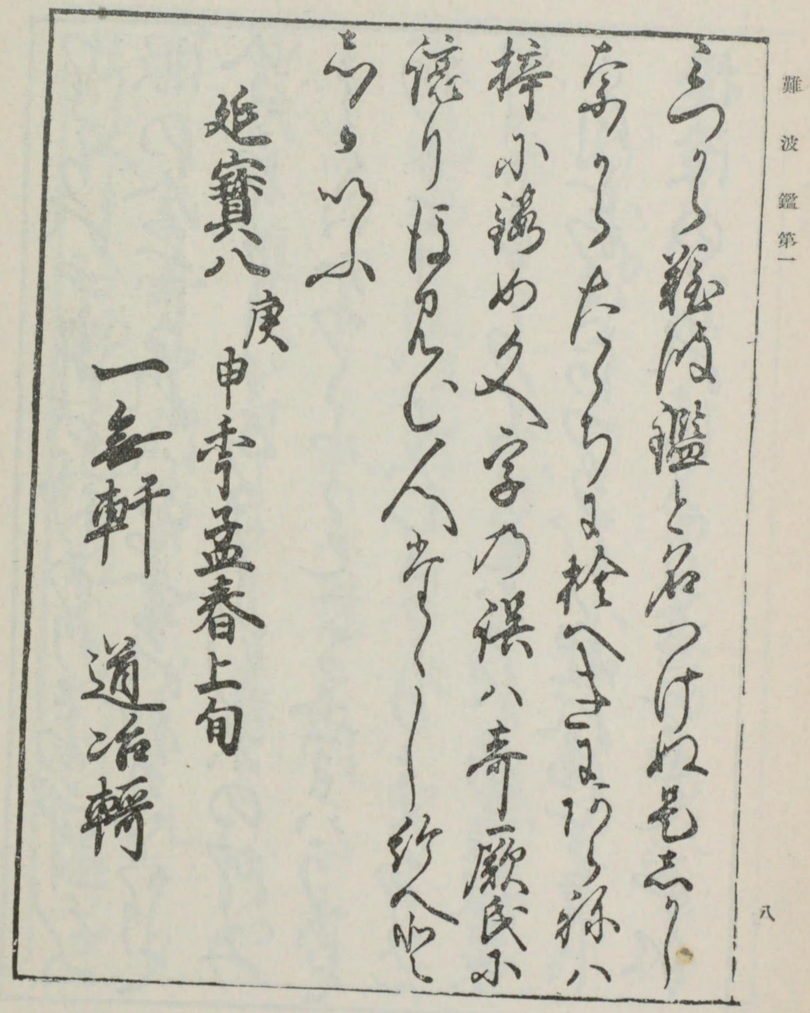
書肆收得時享和元年辛酉仲夏杏花園書于難波南本町客舍』との朱書がございます。享和元年と（我が二四六一）（西暦一八〇一）いへば、その七月十一日に小澤蘆庵が京都に歿し、九月廿九日に本居宣長が伊勢で故人となつた年で、當時、我が蜀山は銅坐の役人として浪速の客舍にゐたのでした。その蜀山の手澤の存する此の『難波鑑』が、今次、本叢書の底本とならうとは、蜀山みづからも期待してゐなかつたでせう。

一　『難波鑑』も『蘆分船』と同じく六冊いづれも題簽の文字を異にしてゐます。前々ページの『なには鑑』の四字は、原本卷四の題簽の文字を用ゐたのであります。





延寶八庚申季孟春上旬

一無軒　道治輝

難波鑑第一

目録

氷様　幷若水
門松　幷炭藁竹薮朶ゆづり葉傍縄の事
聖徳太子御精進供
毬打玉　幷胡鬼板破魔弓はねつく事
道頓堀初芝居
大融寺富之祈　幷卯杖
住吉御弓
正月と云事
住吉明神御供　幷内侍所御供　附住吉橘木
餅鏡居事
屠蘇白散
住吉白馬神事　附七草
神宮寺薬師講　附富士が事
東土場左義長　附萬歳

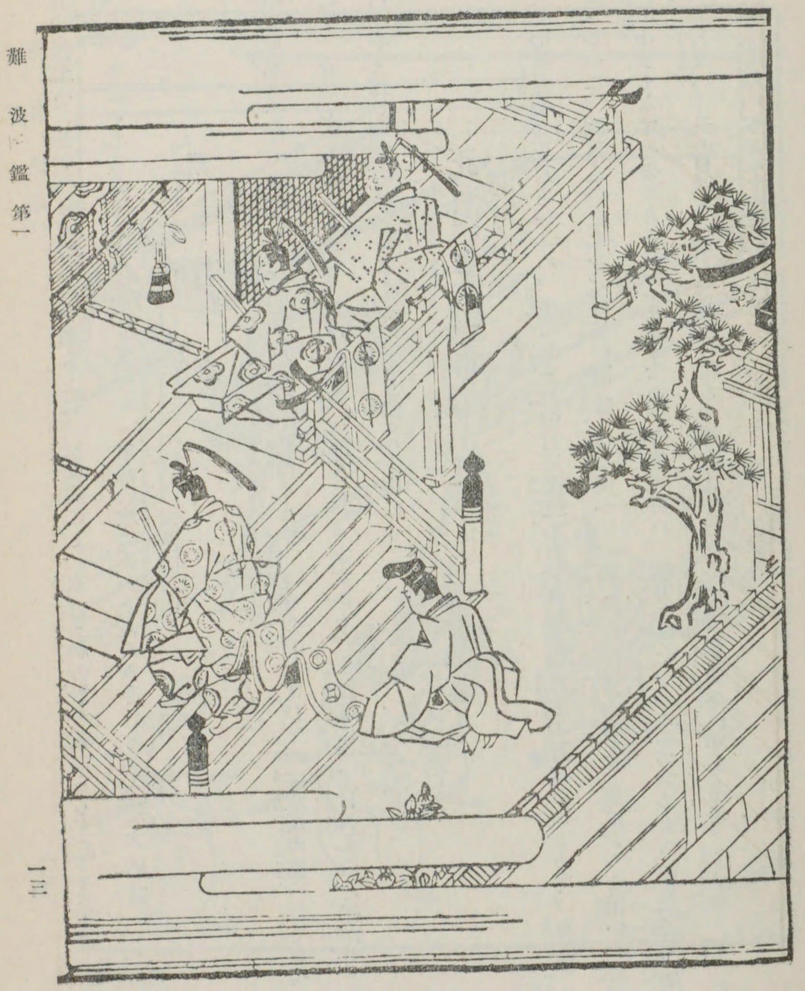
住吉粥之御供

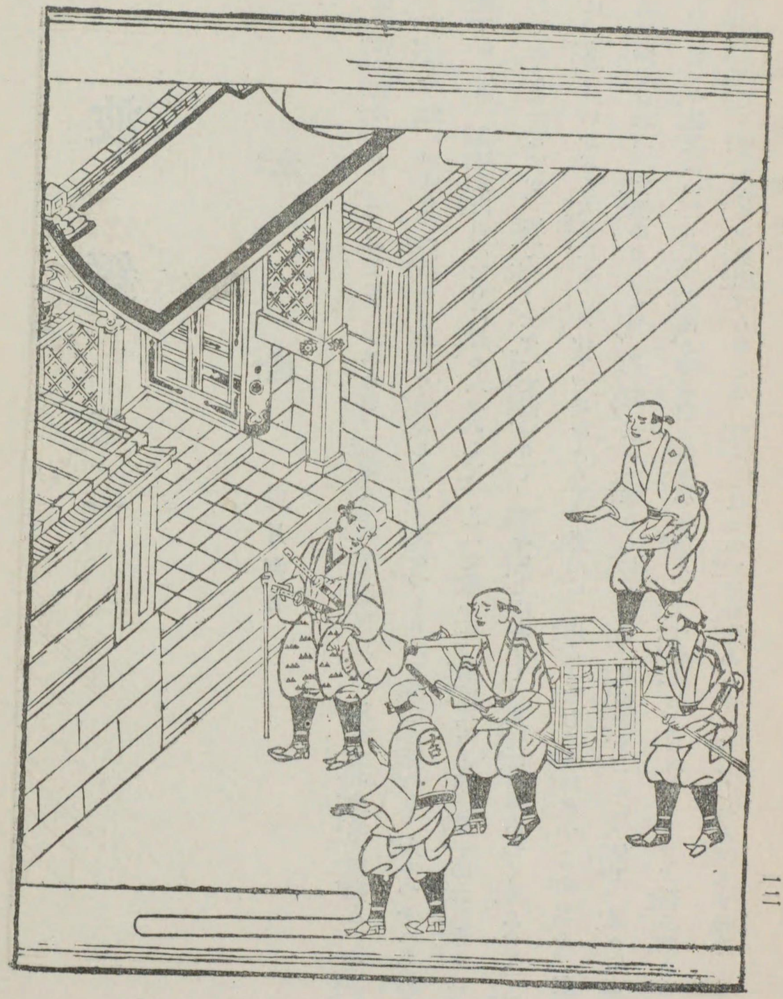
難波鑑第一

氷様

正月朔日

○難波の帝の御時より。はじめてたてまれる也。仁德天皇六十二年五月に。額田太中彦皇。闘鶏といふ所に侍しに。出行て。山にのぼり。野中を。見やり給ひしかバ。庵をつくりたる様なる所あり。人をつかハし見せ給ふに。窟なりと申。其時彼山のあたりに侍る人をめして。とハせ給ふに。氷室なりと申。皇子の云其氷をは。いか様にしておさめたるにか。答て云。土を一丈餘ほりて。草を其上にふきて。茅萱などをあつく取ふきて。凍を置たるに。氷て。いかなる大旱にも。とけす。是をとりて。熱月に。用るとなむ。其時皇子この氷を。仁德帝へ奉らせ給ひけれバ。叡感ありしと也。是則氷を。奉りしはじめ也。其後季冬ごとに。納て。國々に。氷室を。置れしと也。今朝家にいたりて。氷様と申是也。則氷の御所とて大法祕法おこなハるゝとぞ。舊冬納まる氷のあつさ。薄さにて。豐年凶年を奏聞せる事と也。様ハこほりの寸法分際あるゆへならし是を凍らす池を。氷池とも





いへり。近比ハ。石かハらのわれを。奉ると也。延喜式にも。氷池風神の祭と載たるも、此ことなりとぞ

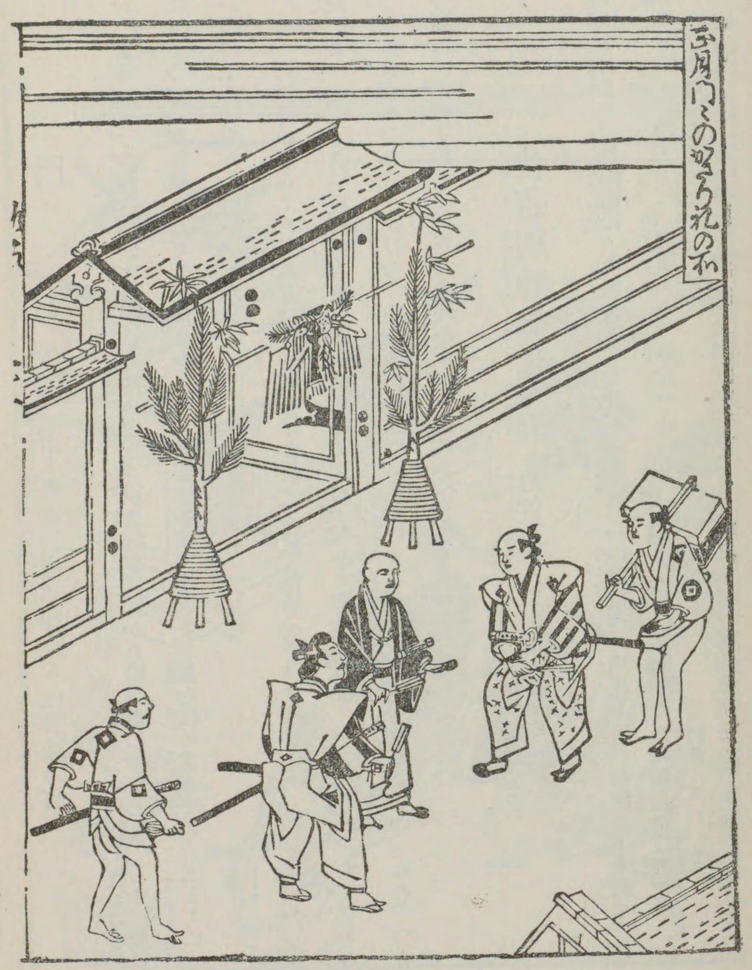
年中行事歌合　今日そしるとしはきのふにくるすの、氷池の水のふかきめくみを　入道大納言

附若水

○去年御生氣のかたの井をてんじ。ふたをして。其内くまず。立春の日むすびて。主水司内裏にたてまつれバ。朝餉にて。きこしめし給ふとなり。年中の邪氣を除くといふ本文あり。今民家に。元日のものとばかり。こゝろうるハあやまれり。春のはじめにくめバ。若水とハ。申にや

正月と云事

○夫としの初月を。正月といふハ。秦の始皇寅の月に誕生あり。されバ。降誕の月なるによりて。専政をおこなハるゝゆへに。政月といひしを。始皇の諱政なるゆへに。後改て。旁を省て。偏ばかりを用い。是ひとへに。天下を正くなすべきなりとて。正月とせり。今の正月ハ。震旦の法にて。とらの月をもちゆ夏の世の例なり。殷の代の月建ハ。丑の月。今の十二月にあたる。周の代の月建ハ。子の月。今の十一月也。冬至を。唐の正月といふハ。このゆへなるへし



門松　幷　炭薬竹齒朶ゆづりは餝縄の事

○むかし素戔烏尊。南海へ。かよひ給ひし時。宿を。巨旦將來に。かり給ひしに。かし奉らず。蘇民將來宿をかしたてまつる。其後尊いかりて。巨旦をころし。其家をほろぼさる。是を後の世までの。さるしにせんとて。巨旦が墓の上に。生たる松を。年の始に。門に立るとも也

門松をいとなミたつる其ほとや春あけかたに夜やなりぬらむ

また炭わらを。かざるハ。巨旦を火葬の心。是悪をこらし。善をすゝむる義也。かさり竹ハ。すなをなる。君子の德に。ながきよハひをことぶけり。齒朶ゆづり葉ハ。雪霜にもなやまされず。色をも。かへぬめでたきもの也。かざり縄ハ。不淨を經だて。正月の神をまつる義なるへし

住吉明神御供　幷　内侍所御供　同朔日

○神主大晦日より。神館殿に。參籠して。元日卯の刻に。一の神殿へ。出仕して。御精進供を獻す。むかしハ。堀津國司より。奉幣ありて。饗應あり。毎月一日にも。供せらるゝと也。則一の神殿ハ。底筒男命にて。天照太神宮にて。わたらせ給ふと也。是則内侍所の御供になぞらふるか。抑内侍所とハ。三種の神器のその一なり。

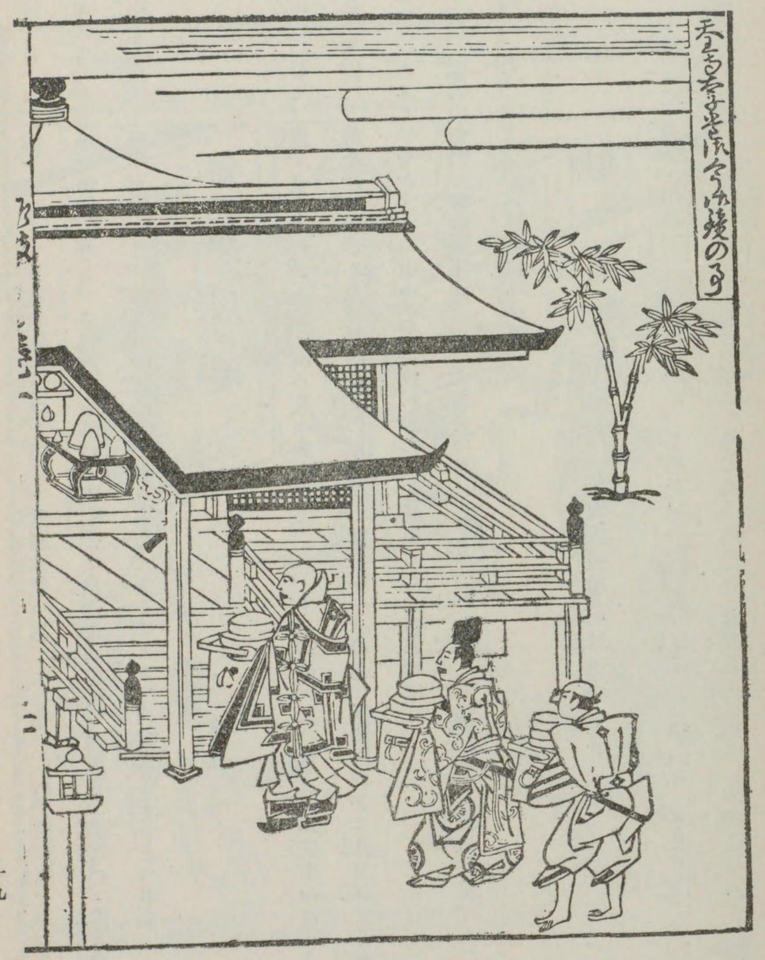
天照太神あまの岩戸を。さし籠給ふ時。鑄うつさせたまふける。日神の御かたちの鏡となり。是を八咫の鏡となづく。むかし神鏡とび出て。天にあがらんとし給ひしを。女官の衣の袖に。かけ奉りて。とめけるよりして。今に。此内侍所へ。女官の守護し奉れると也。御供へ。寛平年中にはじまる。萬治四年正月十五日禁裏炎上の時ことゆへなく。白河に移奉れへ。ゝばらく此所に。皇居をまふけさせ給ふて。還幸近衞殿に。かり殿をあらためられ。同二月十八日渡御

附　橘木之事

○むかし。神功皇后三韓を。うちゝたかへ給ひしより。後本朝に。歸伏して。三國同心して。八十餘艘の船に。數のたからをつミ。我朝に。到來せしに。橘は。是いはゐの物なれバとて。第一の船の。上積にして。奉りける と也是によりて。社内に。植をかしむるとかや。かゝるめてたき物なれへ。正月の蓬萊の組物にも。橘をかざるも。ゆへあることにや

我國にはなたち花のいろみれはこかねの鈴をならすなりけり　顯仲

聖德太子御精進供　同朔日



○正月一日より。同十一日まで。毎日御精進供を獻す。其職掌嚴重也。また元日にハ。御寶庫をひらき。靈寶を。人におがましむるを。恒例とせり。されバ。太子ハ。用明帝の皇子推古女帝の儲君也。御母ハ。閑人皇后御誕生ハ。欽明天皇三十三年正月一日。御厩戸の前にて。御誕生也。さるによりて。厩屋の王子とハ申き

餅鏡居事

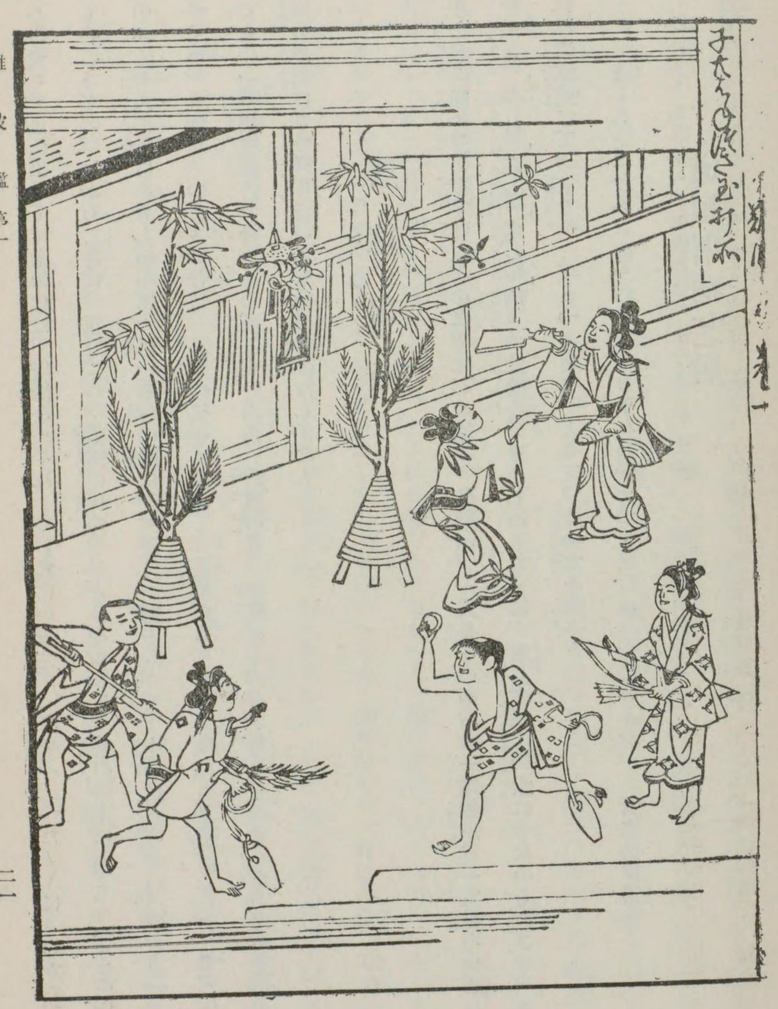
○齒固といひて。餅かゞミをむかふことハ。人ハ齒を以て。命とするがゆへに。はといふ文字をは。よはひともよむ也。齒固ハ。齡をかたむる心也。餅ハ近江の國火切の餅を用べき事也。餅鏡にむかふ時。誦する歌あり

古今集　あふミのやかゝミの山をたてたれハかねてそ見ゆる君かちとせは

此うたハ。延喜の御門の御時近江國より。大嘗會の御べたてまつりし時。大伴の黑主がよめる也。また餅ハ。蚩尤が肉と。名づけて。くふと云說もあり

毬打玉并胡鬼板破魔弓はねつく事

○むかし唐に。黃帝と申みかど。炎帝といふ。子孫をほろぼして。位につき給へり。炎帝の臣に。蚩尤といひて。惡人あり。涿鹿といふ所にて。黃帝の爲に。うたれしゆへに。其惡靈疫病といふ神になりて。國土の人民



をほろぼせり。是によつて。末の代に。疫病をおそれしめむ爲に。蚩尤が。身分を。つだ〳〵に。わかちて。ひとつものこさじの。はかりことに。正月にハ。彼眼の中の。ひとみをぬきて。毬打の玉にして。うつことにせり。彼眼のふくりん三重にありしゆへに。弓いる時の的に。三重に。繪をかきて。中のひとみをバ。のぞきたり。はねをつくハ。そのかゝのたゝかひに。惡鬼の矢をはらふて。太平ならしむる。はねハ。其矢のかたちをかたどり。ふせくものを。胡鬼板といひ。はこ板ともいふ也。破魔弓も。惡魔をやぶり。ちりぞかす心也。なをまた。千町や萬町の鳥追けさう文なといふもの。本說たしかならず

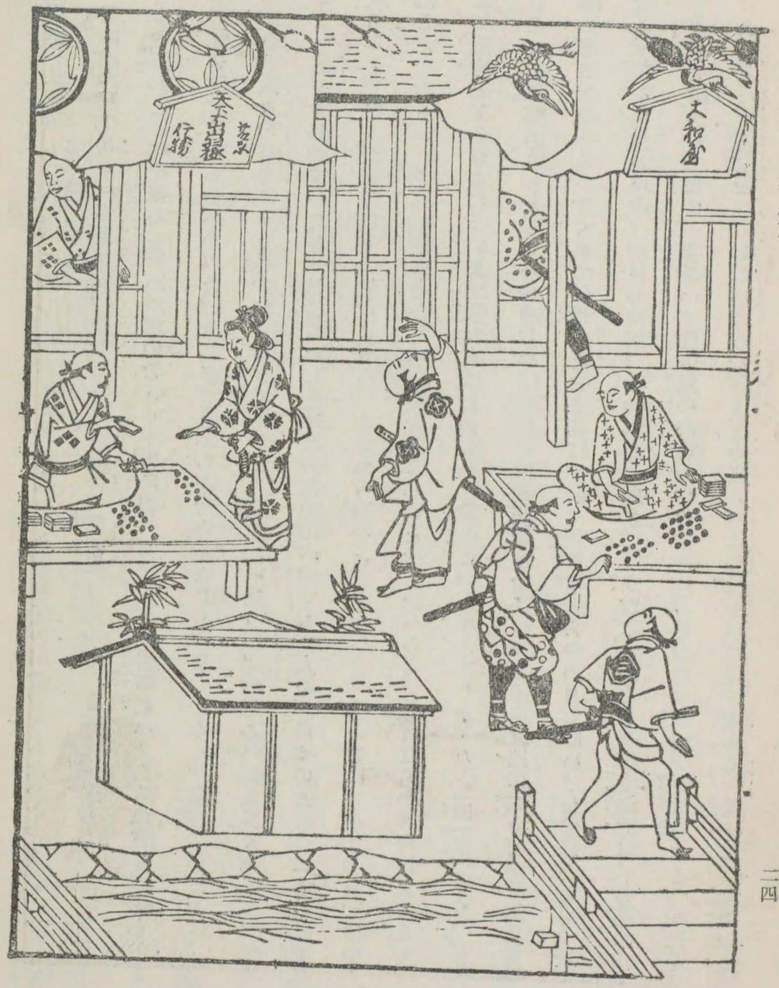
屠蘇白散

○五十二代嵯峨天皇の御宇弘仁年中に。はじめ給ふ。此藥ハ。一人是をのめバ。一家無病。一家是をのめバ。一里無病自少飲之至老無病云云此藥を。きこしめさるゝに。未嫁稚童女に。なめそめさせ。さて酒にいれ。清涼殿にて。主上へたてまつると也。よりて。此少女を藥子と云

としことにけふなめそむるくすり子ハわかえつゝ見むきみかためとか　新大納言爲秀

道頓堀初芝居

○初芝居といふよりも。其名めづらしく。心もうき立物ハ。道頓堀江の川波。うちはやす。太鼓のをと唐土ハちらす。日本橋のはしの上。老若男女。きせると。火繩に。辨當提重箱のうへに。毛氈繪むしろを。からみつけさせ。とちや遲しと。はせ來る粧ハ。雲のごとく。霞に似たり。抑役者の名ハ。ちらねども。としのうちの。貝ミせの比より。そんじやうそれと。かたりつとふるを。きくよりも。なつかしく。鼠戸のあたりに。徘徊して。こゝに來る。人々のなりふり。品かたちの。異樣なる。有さまを見るに。わがゝれる人多く。こなたよりハ。それとおもへど。予が。すがたを。見付られじと。ちのぶの山の山守も。人めのあミのゝけきにもれ。更に。とがむる人もなし。たゝ芝居の見もの見むよりハ。まされる物をと。おもへど。物の音に。心うつり。はやくも內に入らんことをおもふ。されバ樂器をとれバ。音をたてんことをといへるも。餘所ならず。內に入侍りて。こゝらの人に。案內してゐけるに。いまだ狂言もはじまらず。其中に。人々とありかゝりと。四方山のとハずがたりを。なしけるか。側なる人のいひけるをきけハ。此所を。道頓堀といふハ。人ミな此地に來りて。歌舞喜若衆の遊興に入事の頓きがゆへに。かく名づけ侍ると也。其むかし。若衆歌舞喜のありし時ハ。僧俗に。よらず貴となく。賤となく。價を以なさけを。かけしゆへ。錢あれハ。此市に。立むこと易しと。御寺法師は。布施のつゝみがねをハ。花代とさゝげ。町の一番子ハ。親の讓の巾着のかねごとに。そひねの床の。袖枕口より。かねを。すひとられ。あるひハ。家財をうしなひ。あるひハ。所を立さりて。身をほろぼす人多し。是ミな。此道の長じぬる媒



なれば。天に口なし。人を以いはせよと。誰か披露ハ。なけれども。去じ承應元年初秋の比。かぶき若衆の。額髪をとらせ。こと〳〵く。野老となし旅芝居を。かける子ともまで。さがし出させ給へハ。普天の下いづくにか。かゞまり。すむべきにあらねば。をのが生縁に立かへり。えもいはれぬことわざのミにて。落穂ひろふありさま。見るめもいと堪がたし。ゑかしより。此道すこしことさめてげり。ゑかれども。芝居のことハ。とゝめさせ給ハねば。そのゝち。能狂言と。品をかへ。右近左近が海道くだりを。舞しより。人また二人靜のまひぶりも。かくやと。もてはやして。羣集しぬと。かたるがうちに。はじめよ。〳〵と。のゝしれば。追つけはじめぬ。さてはしかゝりのかたを。見やれは。としのよハひハ。二八ばかりの粧にて。なよ〳〵と。楊柳のはるかぜに。ふたがふ風情にて。出ると。いなや。是々おでやつた。あつた物でハなひ。妙音菩薩の御來迎かとほむれハ。こなたにむかひ。袖うちかゝげて。めくばせして。一たびゑめるかほバせは。さながら李花の一枝春雨に。ほころぶるかとおもハる。また二九ばかりにも。あまりたると見えしが。つゞひて出けれバ。洞庭の秋の月是々と。ほむるもおかし。ふくるもよしといふことにや。其外色をあらそひ。品をわかち。いづれも。おとらぬ中に。霜葉ハ。二月の花よりも。くれなゐなりと。いはまほしきもあれど。其名をいはず。凡人聞百に。ミたず常に。千歳のうれひをいだく。世の中に。何ぞ男色にめでゝ。遊興を催し侍らんや。されども。狂言の其品々を見るに。ざれめきたること共にて。おさなき事ども多し。いにしへにハ。佛神の本縁をも。とりまじへ。うたひまひけれバ人もお

もしろがり。あハれがりしに。いつしか今やうハ。むかしにをとり。きのふ大坂のうちに。ありしことを。けふハはや。とりくミ。戀慕密通せしことを。狂言にして。其人の名をさして。それといひけれバ。人また是をおもしろがりぬ。されハ。大坂のうちハ。云に及バす。國々遠き縣までも。聞つたへ。其親に。恥をあたへけること。いかばかりの歎ならずや。かくつたなきことを。よしとおもひて。人のおやの娘なと引つれきたりて。物見し侍ること心得られず。けふは人の上。あすのわれらが身をゑらで。うか〳〵と役者に。はかられける。あさましさよと。ふとおもひ出るより。いざ〳〵立むとしけるを。傍なる人のまたしめよと。ひざをおさへて。尤と感じつゝ。仰のごとくさにてハ。惣じて。娘なと持たる人の心づかひあるべきハ。此見物なり。其人にハ。よるべけれとも。戀慕の手だてを見るよりも。心なきも。こゝろをつけ。我もまたしやせまし。ゑのびても。見まほし。情もかけてもやと。色のなきも。をのづから。色をつくるハ。此見物ならんと。答して。立わかれぬ。いとおかしかりけり

住吉白馬神事　同七日

○今日一の神殿へ御精進供を備へ奉る。神前にをいて。白馬の神事とて。神馬の乘初あり。此時神主一族禰宜社僧伶人以下にいたるまで出仕しけると也。抑白馬の節會といふこと。大内にをいて。今日おこなハるゝ。此節

會をかたどれるにや。是ハ天武天皇十年より。はじまれり。馬ハ陽の獸なり。青は、春也。是によりて。正月七日に。青馬をミれバ。年中の邪氣を除くといふ本文侍る也。されハ。主上紫震殿(宸)に。出御おハしまして。白馬を御覽ある也。夜に入ての事也。此時の出御をりから。地下人も玉體を拜ミたてまつる。されども。法頂ハ。今日まで、御門に入事停止。節會の義式さま〳〵ありといへども。本より。下さまのもの、。ゑることにあらねバ。あらハすへき節もなし。僻耳に。き、なし侍るは。內辨のミこゑにて。いしハ。まかりよんぬるかと。のたまへバ。いし着座といらへ。又開門なといへる事有。今のわらバへの春駒といふハ。是よりはじまり侍るにや

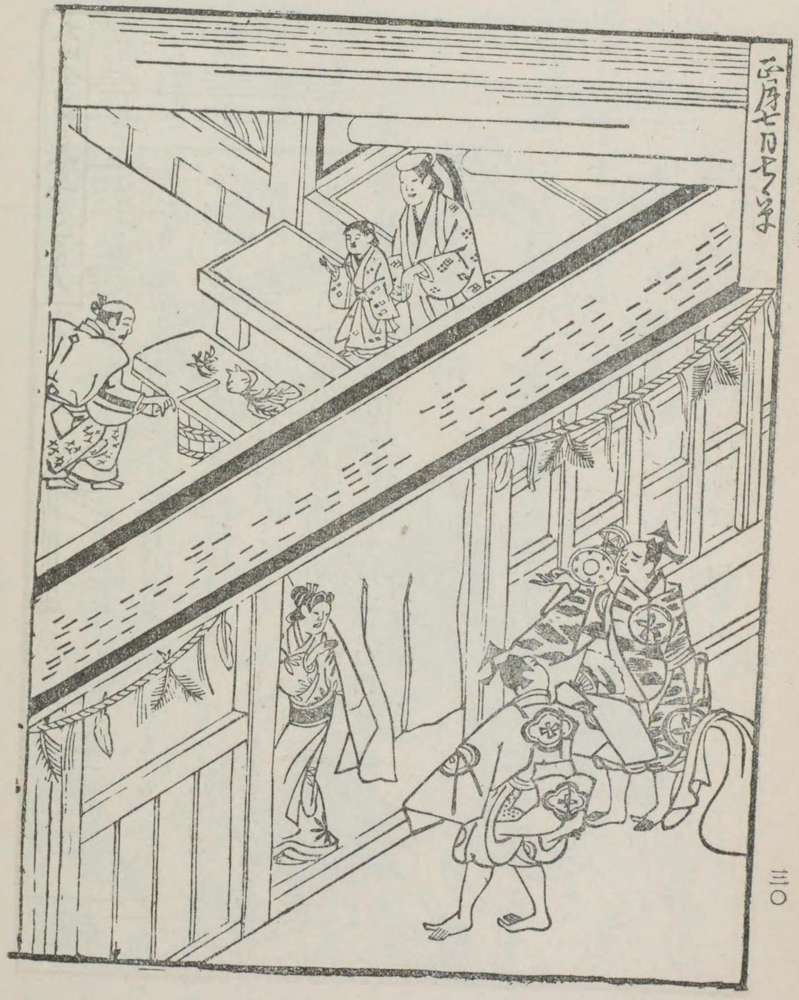
こよひある節會に馬を引ぬれはひらくといふや四つ足の門

附七草之事

○七草の若菜を羹にして。食するとハ。人に三魂七魄といふ神あり。天に七曜と現じ地に七草となる。是をとりて。服すれバ。我魂魄の氣力をまし。命を延るなり。大宋文王の時より。始る事也。七草といふハ

せりなつな五行たひらこ佛の座す、なミ、なしこれを七くさ

大融寺富之祈　幷卯杖　同七日



○正月一日より。七日まで。修正の法會辨財天女。牛玉寶印降富の執行あり。是ハ。天下太平國土安穩風雨順時五穀成就萬民豐饒の御祈禱と也。抑降富の符札ハ。其數所々不同なり。當寺にハ。七番の富有。七難卽滅。七福卽生の標主なりとぞ。凡牛玉寶印とハ。諸〳〵の惡魔をはらひ。諸の福德を集む。（辨財天女の內證を顯す謂也。此こと。いつはじまりたりといふことたしかならず。今日當國にも。所々に有。いづれか。前後なることを知らず。爰のミにもあらず。諸寺。諸山にをいて。正月にハ。修正ありて。福杖といふものを。物し給ふことあり。是ミな。此等の類に。ひとしきか。けふまた。大內にをいても。卯杖と申こと侍りき。是は。持統天皇三年正月の卯日。大學寮より。是を奉るよし。日本記に見へたり。ある人のいへるハ。卯杖と申ハ。若菜を備へける時。つく杖をいふと也。此卯杖ハ。卯のかたへ。向ひたる。椿のえだ。柳のえだ松の枝。此三のえだを。いづれも。三尺五寸つゝにきりて。けづり五色の絲にて。十二所ゆひ付て。若菜を君に備へ奉ると也。是を卯杖といふと也。猶尋へし

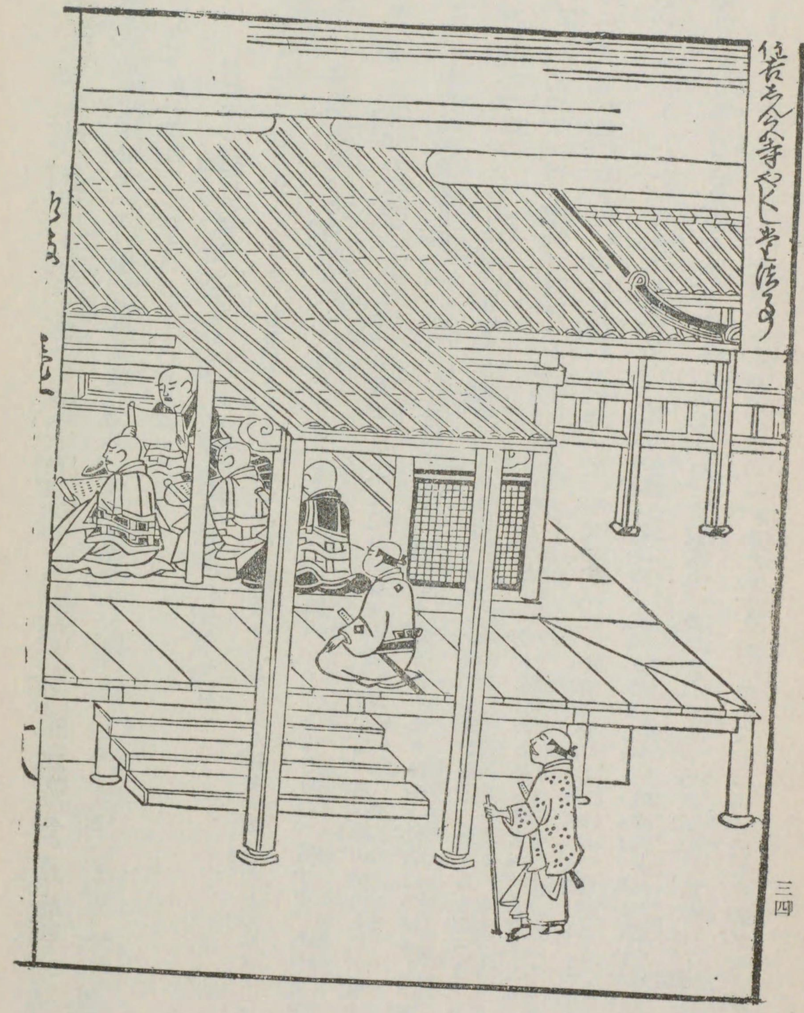
神宮寺藥師講　附富士か事　同八日

○正月八日藥師講筵義ありて。法花轉讀の後いにしへハ。管絃ありと也。むかしハ。住吉にも地給の樂人ありて。管絃の役を。つとめしと也。往古萩原院の御時大內に。七日の管絃ありしに。津の國天王寺に。淺間といふ。樂

人あり。ならびなき。太鼓の上手にてありしゆへ。禁裏にめされ。太鼓の役をつとめし也。其比當所に。富士といふ樂人あり。是もおとらぬ太鼓の上手なりしゆへ。管絃の役をつとめむと。おなしく京にのぼりしが。帝叡聞ましく〳〵て。富士淺間いづれも。おもしろき名なりうたに

信濃なる淺間か嶽ももゆるといへハ富士の煙のかひやなからむ

此こゝろなれバ。名こそうへなき。富士なりとも。あつハれ。淺間ハ。まさらん物をと勅掟ありしによりて。そのゝちハ。富士が名をよひ出すものも。なかりき。ふかるに。淺間いかゝやおもひけむ。富士を。あやまつて。うちぬ。此こと妻子ハ。夢たにもちらす。只富士がかへることのおそきを。待かね。京へ尋のぼりしに。富士ハ。淺間にうたれぬる形見の色品とりいだし。これ見よとさしいだす。妻子きくよりはや。宮古にのぼりし。夜の間のゆめ。こゝろにかゝる月の雨。身をしる袖のなミだかと。あかしかねたる折からに。かゝるものうき。かた見とや。さしも名たかき。富士ハなど。けふりとハなりぬらんと、いひかなしめるありさまハ。よ所のたもともぬれぬべし。妻ハ娘にむかひ。あれに妻のかたきあり。いさうたんといふ娘きゝて。あれハ太鼓にてこそあれ。おもひのあまりに。こゝろミだれ。すぢなきことをの給ふ物かな。あらあさましやといへば。あかてわかれし。我妻のうせにしことも。太鼓ゆへ。たゝうらめしきハ。太鼓なり。妻のかたきよ。うたんといへは。實こととハりも也。ちゝにわかれしことも。太鼓ゆへなれバ。さあらバおやのかたき。うちて。うらみをはらさむと。持たるば



ちを劍とし。ひたすら嗔恚を。はらしけるとなり。いとあハれならずや其富士か舊跡ハ今にありとそ

今宮惠比須祭　同十日

○西宮を勸請しけるゆへに。當日を。まつりとす。殊あき人の家にとしの始に。若惠比須といひて。とりわきいはゐ奉れハ。けふの參詣大かたならず。また市に。えびすを。まつることハ。聖德太子の願によりて。商をまもらせ給ふゆへと也

帳綴祝　同十一日

○けふハ。吉書とて。商人の家に。帳をとぢ上書をしていはふ日也。ふかれども近曾より。大坂の內所々に。帳を綴上書をして。うりかふ事になれり。則帳をあきなふ家にハ。門に。竹をたて。幕なとはりて。うりてのさいはひ。かふてのよろこびなとゝ祝しけるとそ。禁裏にも。吉書の奏と。申こと侍りき

住吉御弓　同十三日

○今日晝過より。神主一族禰宜出仕して。南の拜殿にをいて。饗膳しをハりて。其後的場にさがりて。二人つゝ。

十日ゑびすまつり
大福帳屋

弦巻の弓の不

かへり〳〵に。弓をいる。其義式委細也。むかしハ。大社御狩の神事とて。神子男の形となりて。弓箭を持て。狩場を。出る體の義式ありと。舊記に見へたり。是等のこと。今ハ中絶せるか尋べし

東土場左義長　大阪町中ニも有　同十四日

○東土場ハ、今の大手の上にあり。むかし大閤御所の御時。此所にて。左義長ありしゆへに。かくいふと也。抑左義長のおこりハ。漢の明帝の時はじめて。天竺より。佛法わたる。五嶽の道士是を破らんと祈るにより。其ふるしを見むと。佛經をひたりに置。道士の書を。右にをきて。火をかくるに。道士の書。燒失す。されバ。左の義長ぜりとありて。左義長といへり。また。西域義長や。東土やと。はやすハ。西域佛法の義まさりて。東土へ。流布すと。いふことなりしともいへり。又祠異經に云西方の山中に有人長一尺餘人見之則病寒熱名曰山臊以竹燒火爆炸有聲則驚去不來云々此を以て。正月に。燒爆竹說々おほし

附萬歲

○今千壽萬歲とて。門々を。うたひありくものあり。是ハ。踏哥のかたちをあらハし。萬歲樂とうたひ侍る其濫觴(しやう)解を尋ぬるに。今日年始の祝詞を作りて。うたひまふ。節會を。男踏哥といふ。則あらればしりともいふ也。

是則源氏物語にも。このことあり。高巾子綿の花をつくること。このとのかさしのわたなどゝよめり。天武天皇より。はしまる。節會にや。聖武天皇天平の比ハ。踏哥の義はてゝ。祿をたまふに。仁義禮智信の五つの題をさぐらゝめて。絹布綿などそれ〳〵の題に。よりて。たまハりし事有つる也とそ

住吉粥之御供　同十五日

〇一の神殿へ。今日粥之御供を獻ず。されバ。今日禁裏にも。御粥を獻する也。其來由を尋ぬるにむかし蚩尤といふ。惡人を。黃帝と申御門正月十五日に。ころされたり。そのゝち。天狗となり。其身は。地靈となる。是よりして。けふ亥の時小豆の粥を煮て。天狗をまつり。是を食すれは。年中の邪氣を除くとなり。其外の異說もあり。尋へし

難波鑑第二

目錄

住吉甘菜御供
新淸水觀音供　幷　仁壽殿觀音供
廿日團子
天王寺涅槃會
天王寺彼岸詣
節日草餅　幷曲水宴　附　鷄合
住吉大乘會
新御靈御弓　幷射禮
法然御忌
北野石不動參
聖德太子聖靈會
瓢簞町夜見世
住吉浦鹽干
善導忌

弘法大師御影供

難波鑑　第二

住吉甘菜御供　正月十六日

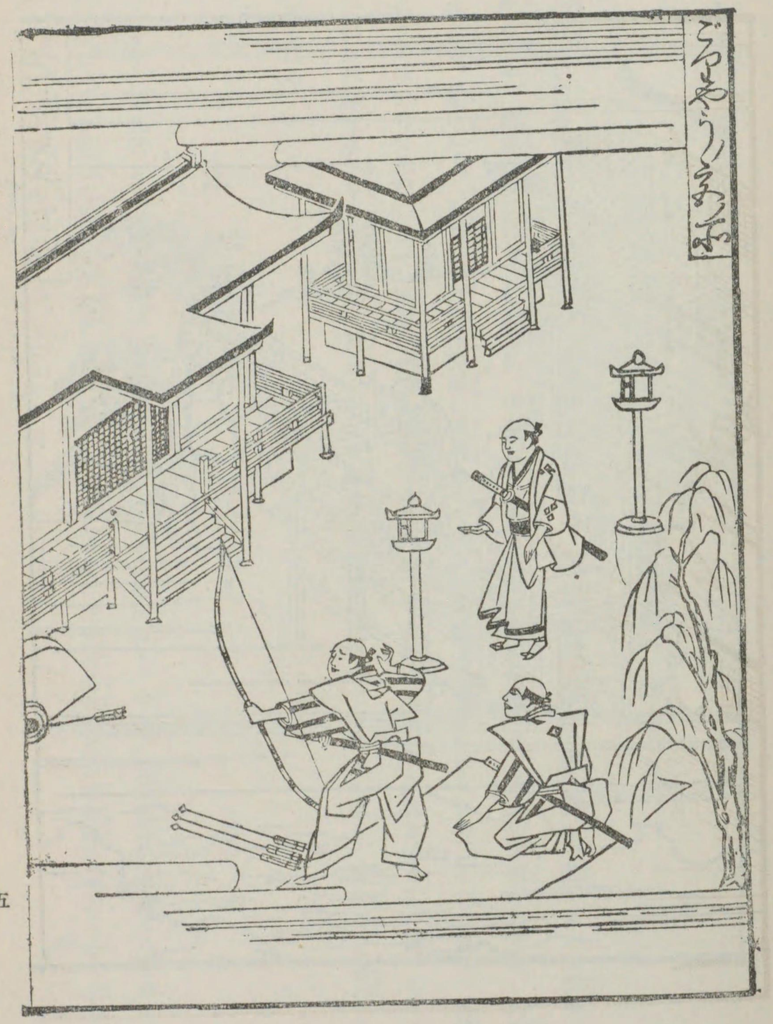
○住吉四所明神へ。今日たてまつるを。あまなの御供と申たてまつる也。一の神殿へ。御精進供也。そのほかの。三じや神へハ。魚盃也。尤鯉鮒蛸蠣等に。海草のたぐひ多し。魚御供の御神詠に

伊豫の國うハの浦半の魚までもわれこそハくへつゝすくふとて　住吉明神

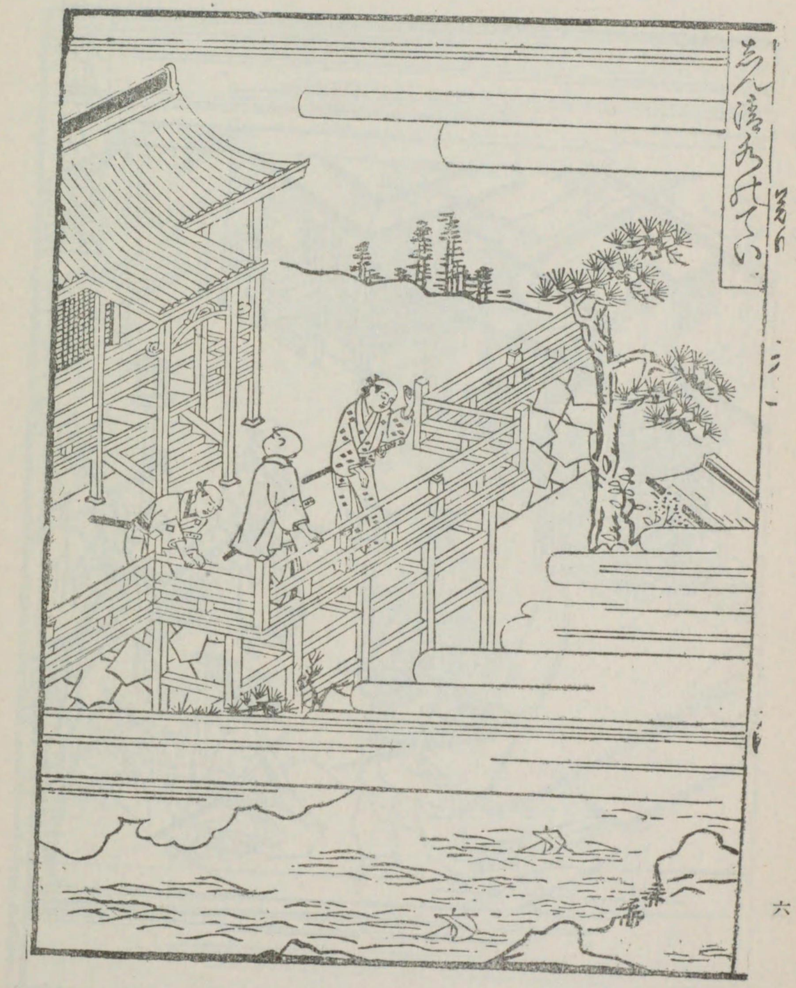
新御靈御弓　并射禮　同十七日

○當社へ。津村のうぢ神也。むかしハ。今日いろ〳〵のねりものに。つくり物を。いだすといへども。いつのころよりか。此ことも。おこたり。今ハ。わづかに。社内にをいて。的をたて。弓をいる。人これを。御弓となづく。是則。御靈宮の。門のうちに。茶屋あり。此あるじ是をつとむ。今日禁裏建禮門院にをいて。おこなハるゝ。

四



五



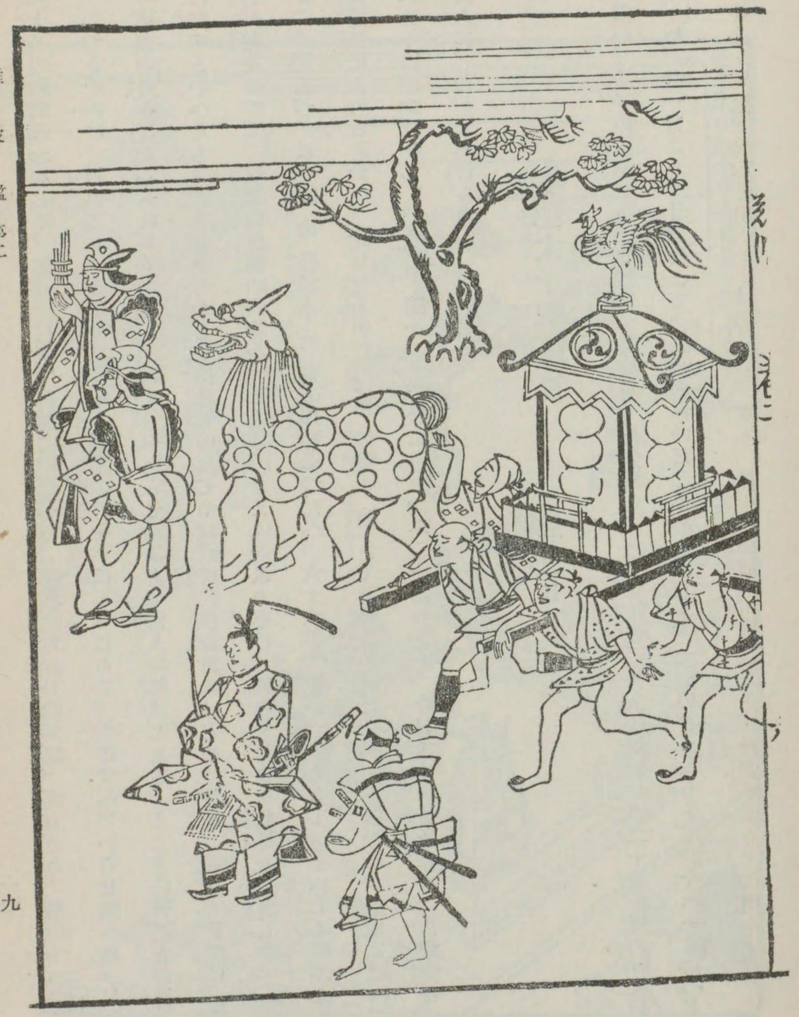
射禮を。準ずるならし

新清水觀音供　幷仁壽殿觀音供　同十八日

○今日當寺に法事等有。是ハ國土安全。當所靜謐の祈願也。是則禁裏仁壽殿の觀音供に。準ずるか。此觀音供ハ。應和年中。觀音の像二體を。仁壽殿に。安置せらる。寛空僧正開眼供養あり。天子の御祈のために。加持ある事也とぞ。當所にも。近曾より。三十三番の札所ありて。人々巡禮することにはなれり。ふかれども。此觀音ハ。わきてはやらせ給ひ。けふハ殊更。參詣の羣集袖をつらね。下寺町の道筋ハ。人はふばりて。跡へも。さきへも。ゆかれぬほと多く。長町より。野道を出る人限なく。舞臺の上にハ。ミぬ人おほく。西海を。遠見して。たゝすミけり

法然御忌　同十九日

○けふより。廿五日まて。源空上人。御迁化の御忌。とりおこなハるゝ。寺々。先智恩院の末寺。八十六ケ寺淨花院がた廿一ケ寺黑谷光明院派十九ケ寺に。をよべり。其寺々に。男女老少參詣の羣集聲をはかりに。念佛すること。十萬億土の西方極樂へも。手にとるやうに。きこゆらんと。いとたうとし



團子

廿日

○今日ハ。武家に。具足の餅ひらきいはふ日にて。だんごを。あづきにて。煮たるを。俗に廿日團子と名づく。具足もたぬ。中間足輕ばらも。けふハ。いはふ事にて。餅の代に。だんごハすることなりといふ。土民の家に。することゝおもへるハ。いぶかし

北野石不動參

廿八日

○此尊ハ。弘法大師の御作にて。靈驗あらた也。當日錦帳をかゝけ諸人に。拜見せしむ。むかしより尼の住持せし寺也

天王寺涅槃會

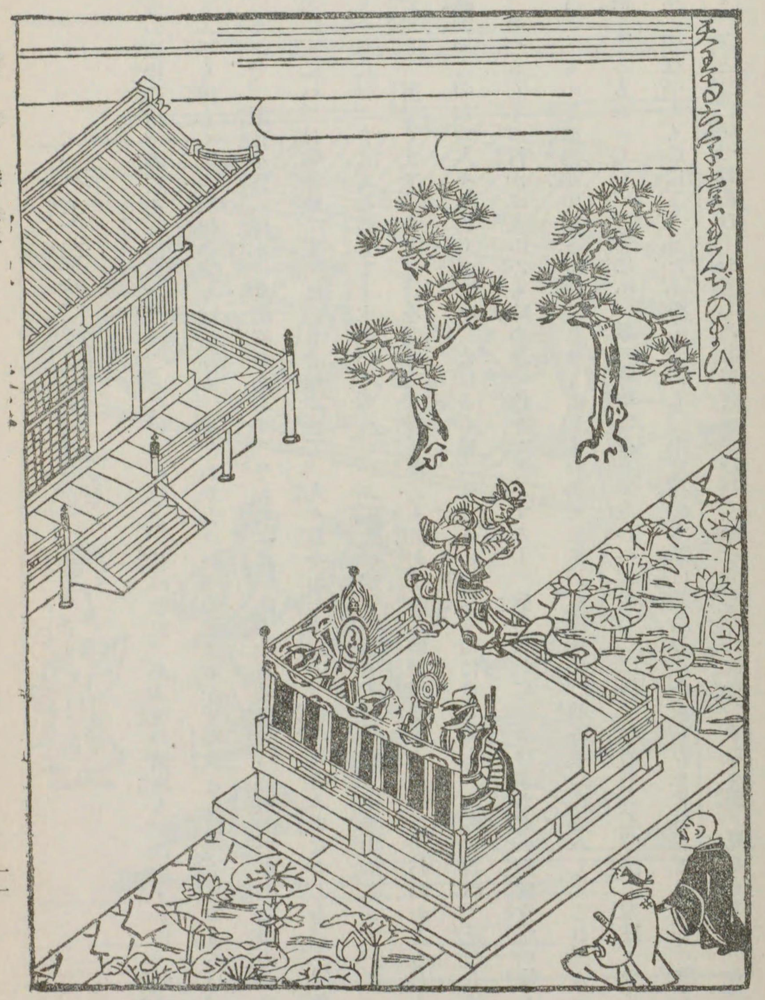
同十五日

○當日ハ。天王寺の堂塔ゝなひらけて。諸方の參詣袖をつらねて。羣集す。御葬禮の次第は。先聖德太子堂より。御輿を。ふりいだして。さきにハ。梅のずハひを持たる人。其つゞきには。獅子(釋)がしら。花笠の兒數十人。はた。面。其ほか異類。異形の出立して。管絃を。奏し。仁王門の前に出給ふ。また尺迦堂より。御輿を。ふりいだす。

行列太子の御輿におなじく。是も。仁王門の前に出給へハ。兩輿立むかひ給ふ時。兩方より。梅のずハひ持たる人。のつとをあげ。それより。太子の御輿ハ。廻廊の外を。にしへねりて。六時堂へ。いらせ給へは。尺迦(釋)の御輿ハ廻廊の外をひかしへねりて。是も。六時堂へいらせ給ふと。伶人の舞はじまる。まことに天王寺の舞樂のミ都に恥ずといへるも。實さる事ぞかし　抑此舞のはじめは。神代佛在世のはじめ。月氏。震旦。日域に。傳ハり。狂言綺語をもつて。作佛輪法輪の因緣を。まもる。まえんをありぞけ。福をまねき。此舞を。奏し給へハ。國ゆたかに。民ふづかに。壽命長遠也と。秦の川勝につたへ。六十六番の舞を。つくりて。まハしめ給ふより。于今其遺法によれるとかや。此日堂上がたには。涅槃の賭とて。尊影の前に。絹布あるひハ。墨筆なにゝても。それ〳〵に。かけをして。晩に。賭を。たがひにとりかふことありとそ。今日諸方の寺々にも。涅槃像を。かけて諸人に。おがましむる也

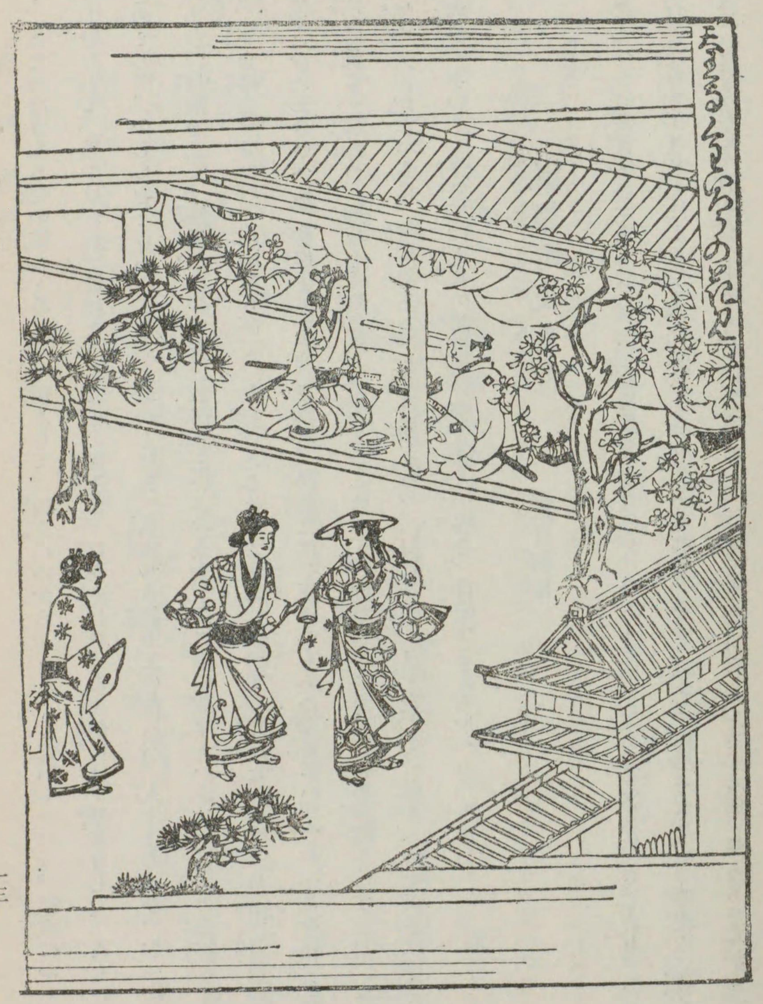
聖德太子聖靈會　同廿二日

○今日ハ。太子の御忌日也。其職掌の行列ハ。涅槃會のごとくにして。伶人の舞終日百二十番の舞ありとぞ。いにしへハ。廿一日より。廿三日まて。三日のあいだこれあるよしを。大造のことなりとて。今ハ一日につとむ



天王寺彼岸詣

○當寺の彼岸詣ハ。春こそよけれと。人ごとにいふめれど。秋ハまた。あふ坂の清水も。ひやゝかに。龜井の水をむすぶ手も涼しくて。三伏の氣をはらふも。またおかし。いつの比よりか。春秋ともに。七日のうちは。人々こゝにまふで。遊宴を催し侍る。其濫觴(ランシヤウ)をふらず。予おもふに。此寺の石の鳥井ハ。極樂の東門の中心なれバ。彼岸の時正にハ。日輪極樂の東門にいらせ給ふとて。人々是をおがまむと。歩をはごふ事なりしを。今ハ。此こともなく。身には。きよらを盡して。大坂のうちハ。いふに及バず。堺よりも。貴賤上下乘物辨當さすがに。ひろき道野邊も。所せくまでこみあひ。をし合て。幾千萬とも知がたく。綾羅錦繡のよそおひ。われおとらじと嗜て。風流をこのむ。人々のありさまハ。またさら也。まことに態ならぬたきしめし。うつり香ハ。花たちばなよりも。めづらしく。行かふ人の心も時めき。色をおもくするも。猶あハれになさけふかし。廻廊堂塔の緣も。ミちく〜こゝらの芝原池水のほとりのくま〜までも。あくまで。其家々の。紋を幕にあらハし。これ見よと云む斗に儕上するもおかしく。こゝにハ。琴三味線のをとつるれハ。かしこにハ。おどりあそび笛。太鼓。つゞみ。尺八などのはやしものにて。うたふ聲もおかし。また花の木陰に並ゐて。あからめもせず。まもりて。物くひ。酒のミ。ことうたのつけあひ。おもしろしなどゝ。ひけくひそらし。肪杖をつきたる體。見るもさながら。絶が

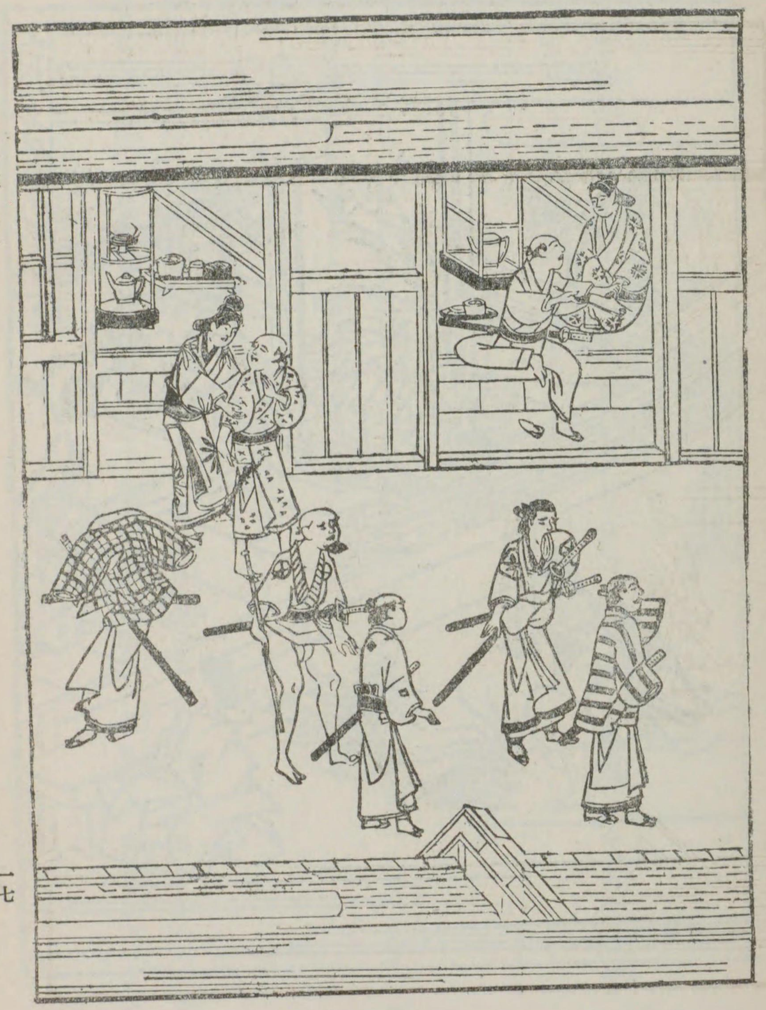


たく。またおほきなる花の枝こゝろなく。折とりて。地主にいからるゝも。かたハらいたく。池水にをりて。手足さしひたして。見つけられ。にげまハるこそ。無下に。口をしけれ。また傍には。醉なきして。えもいはれぬことのミして。かしらをとらへゐるこそ。おかしけれ。猶興つき終りての後にハ。人々よりあひ。むさぼり。つかみあひ。口論をして。法場をけがすを。彼岸詣といふべきや。抑二季の彼岸といふハ。晝夜の長短なく。相應して。正き時也。されバ。兩岸ならびて。左右ひとしきがことし。よつて。比岸といふ。又日出月沒の兩岸彼岸云云とひとしきゆへに。彼岸ともかく。されバ。佛法には。正きをもちる魔界にハ。たがへるを。用るゆへに。正直の時節に。佛法ハ。顯現し。魔界ハ。隱沒するによりて。此時にあたりて。佛事善根をなすと也。また或說に。都卒天のかたハらに。靈所臺あり。そこに樹あり。二月に花開七日七夜して。落秋八月七日果成摩醯首羅梵天帝釋等。をの〳〵集りて。七日の閒世閒の善人惡人の名を。印記するともいへり

瓢簞町夜見世　三月朔日

○いにしへハ。晝夜のわかちもなく。いとにぎやかなりしが。ひとゝせの火災の難に。かゝりしより。いははしならねど夜のちぎりも。たえ〳〵に。晝ばかりの出入となれバ。をのづから。柳のうちには。闇夜に灯を。うしなひたる心ちして。物の榮ハ。夜に入てこそあれと。行かふ人もなく。いとこゝろほそけに。なりゆきて。冬

の日のみじかきを。かなしミ。夜のながきをくるしむも。さながら寒苦鳥にひとしく。あけなば。局格子に。出むといふも。あハれなりしに。去じ延寶辰のとし。春三月の初日より。無神月の終日までハ。としこと夜見世をかざるべしとの仰をうけたまハり。阿波座瓢簞越後三筋の町よしハらまで。局々の青暖簾をとりて。燈をかゝげしハ。萬灯會にことならず。入くる人々。こみあひ。をし合て。かちよりゆく若きものハ。えもんひきつくろひ。編笠をかぶり羽織をかづきて。ふのぶすがたもいとおかし。乘物ハ。揚屋のうちに。入ることかなハねバ。西東の門口にかきすへさせ。内よりいづる面々宿の首尾ふすましたりと。うれしけに。跡につれたる。僕のなりふりまでに。こゝろをつけて。見かへる人もおかしくぞ侍る。そも〳〵。傾城傾國のことハ。漢書にも見えたれバ。今こゝにいはむもむつかし。されバ。此柳のうち。大夫をはじめて。天神かこひ。はし傾城まで。凡二千二百餘人に及べり。まことに。それ〳〵のおもハくありて。われ鍋に。とぢふたゝたがひに情をかハし。肱を曲て。枕とするたのしミも。おもひやられて。おかしく。されバ。さる人長崎の寢道具にて。京の上臈に。江戸のはりをもたせ。大坂の九軒町にて。遊びたしと。ねがひしとかや。此九軒町ほど。あそびこゝろのよき所ハ。なきと誰しも。いひけるぞかし。此うちに。あまたの門あれど。東西より。外ハ。常にあかず名づけて。蛤門といふ。やけバあくとにや。火事の時ハ。ひらきて。人をとをしけると也



一八

節日草餅　三月三日

○是ハ。周の幽王の御時より。はじまれり。むかし三月三日に。幽王ニある人この草の餅を。奉る。御感なゝめならず。それより。獻宗廟後人今日もちゆる事也

弁曲水宴　同日

○是も。周の世より。はじまりける事也。水上より。盃をながし。人々の前過ざるさきに。詩をつくりて。酒くめること也。御溝にて。ありしと。康保の御記に。見えたり

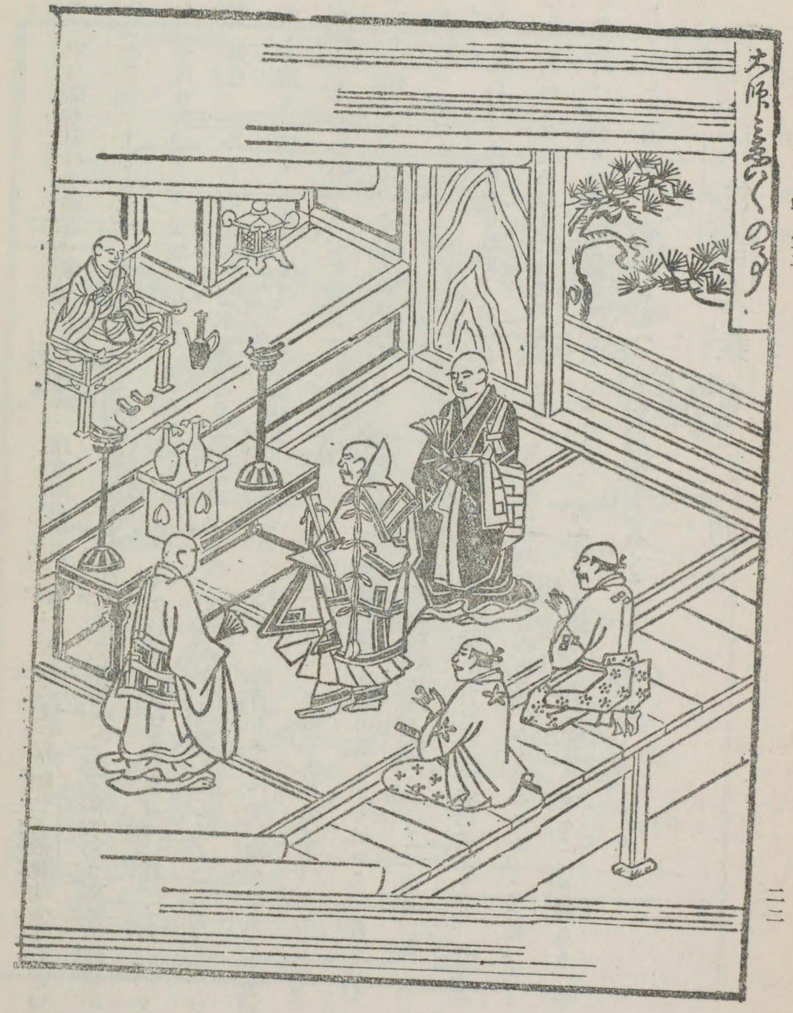
附雞合　禁中御庭にて有

○明王と申たてまつる帝。まだ宮におハしましさふらふ御時雞合をこのませたまふて。今日たゝかハしめ給ひしに。ほどなく。御位につかせたまひける。吉例にて。今も侍る事也但明王ハ乙酉のとし御誕生ありつる也

住吉浦鹽干　同三日

○時をたがへぬものハ。雞と。潮なり。されバ。西東南海にハ。日ごとに。鹽干ありて。北海にハなしといふ。けふハことさら。すミよしうらの。ひあがるゆへに。鹽干あぞひとて。大坂ハいふに及バず。京都の好事のひと〳〵も。くだりあつまり。大坂の川ふねに。幕はしらかしあるハながれの女をまねきよせ。笛。太鼓。つゞみ。三味線。鼓弓。いろ〳〵の拍子もの水主梶とりに。櫓械をさせ。とゞめきて。漕てたるすミよし浦より。さかひうらまて。濱も。磯も。沖も。陸も。人ばかりにて。どよめくほどに。物音もきこへず。堺のさもある女房ハ。鹽干小袖とて。うるハしく。こしらへて。今日を晴にと。出立たる面々。鹽の干あがるより。舟のり物を。をりたちつゝ。裙をも。かいとらず沾々としたる。濱の眞砂に。裳裙を引。眞砂の底にかくれたる。蛤をふむ。ひとつ。ふたつ。手づからとりあげて。なくさミよろこぶかくて。鹽ミちくれバ。俄に舟にこミのる。其あいたに。ミちかさなれバ。のりをくれて。おほれ。舟をのりかへらかして。水をのむ。一の谷の落あしに。平家の一門女房たち。あハてふためきて。舟にのり給ひけんも。さこそありつらめとぞ。おもひやらる。ことゆへなくのりえたる舟にハ。小歌うたひ。酒盛して。日くるゝまで。あそびて。浦々に漕わかれ。家々に。立歸るも。いとさうぐ〳〵しく。またあるべきことがらとハ。見えす。おもしろくそ侍る

住吉大乘會　同八日



○是ハ。神主前掘津守津守宿禰經國。自筆をとりて。十二箇年に。五部の大乘經二百餘軸書寫して。去じ安貞年中安居院大和尚位聖覺法印を囑して。唱道として。北白河女院の御願に準して。供養の宿望を達して。神明の法樂をなしたてまつらるゝがゆへに。于今としことの今日ハ。此會を莊嚴して。法事有とぞ、

善導忌　同十四日

○惣じて。當所にハ。西山派の寺すくなく。粟生永觀堂の末寺三ケ寺に及べり。此日善導和尚の法事等ありといへとも。さのミに。蒐集する程の事も。なかりき

弘法大師御影供　同廿一日

○此日ハ。大師御入定の日なれバ。古儀新儀のわかちなく。眞言十三ケの寺々にをいて。法事あり。ふかるに。當日大師の御影へ。三寸をたてまつりけるを。ある人見て神にこそ。三寸ハ。そなへけるに。佛に奉るハ。いぶかしといふ。予がいはく。是ハ大師御入定の後。いまだ御伯母高野山の麓に。ましく〳〵けるが。御手づから籾といふものを。一粒づゝはぎきよめて。御酒に造り。御影堂に。をくり給ひしより。其遺法により。いまに。高野山御影堂につまむきの御酒とて。奉けれハ。今寺々に。たてまつるも。是等の事に。よりてかと申き。尋へし

難波鑑第三

目録

更衣　幷青葉簾之事
天王寺灌佛
玉造稲荷御出
土塔會
住吉御田植　幷源平合戰之事
牛頭天皇祭
新御靈夏神樂
孟夏旬
住吉初卯　幷忘草
東照權現祭
五日節會　幷藥玉粽之事
勝鬘參　幷氷餅之事
嘉定喰
稲荷夏神樂

座摩御祓へ

住吉御祓へ　附堺浦と云事

天満天神御祓へ

難波鑑 第三

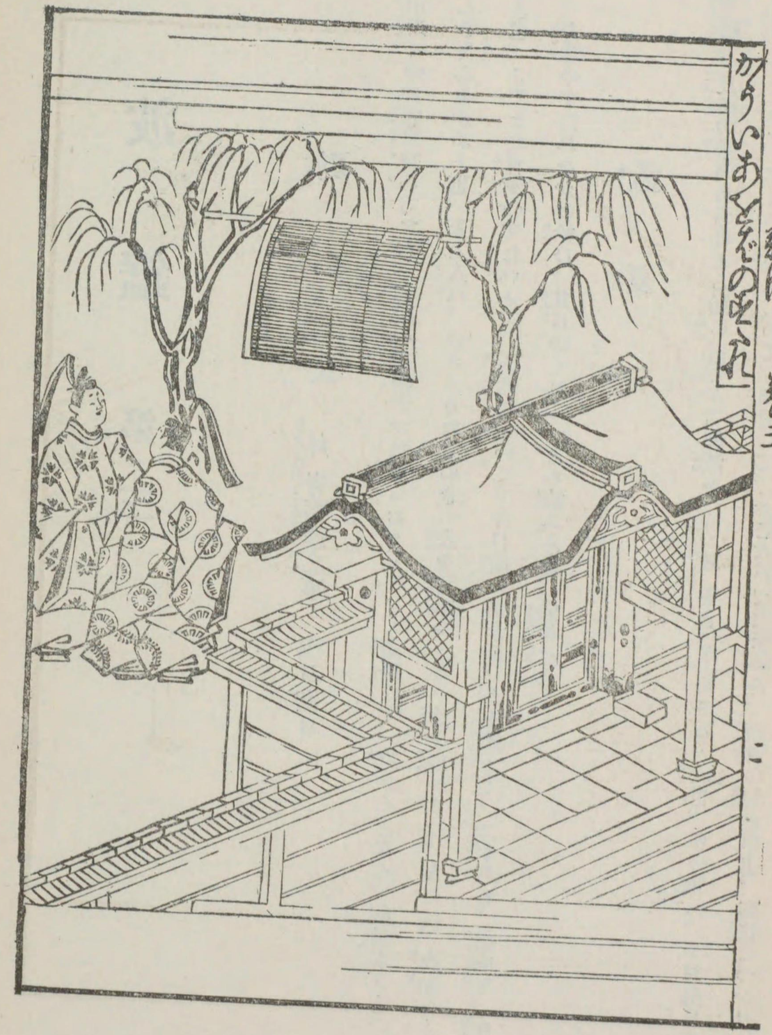
更衣

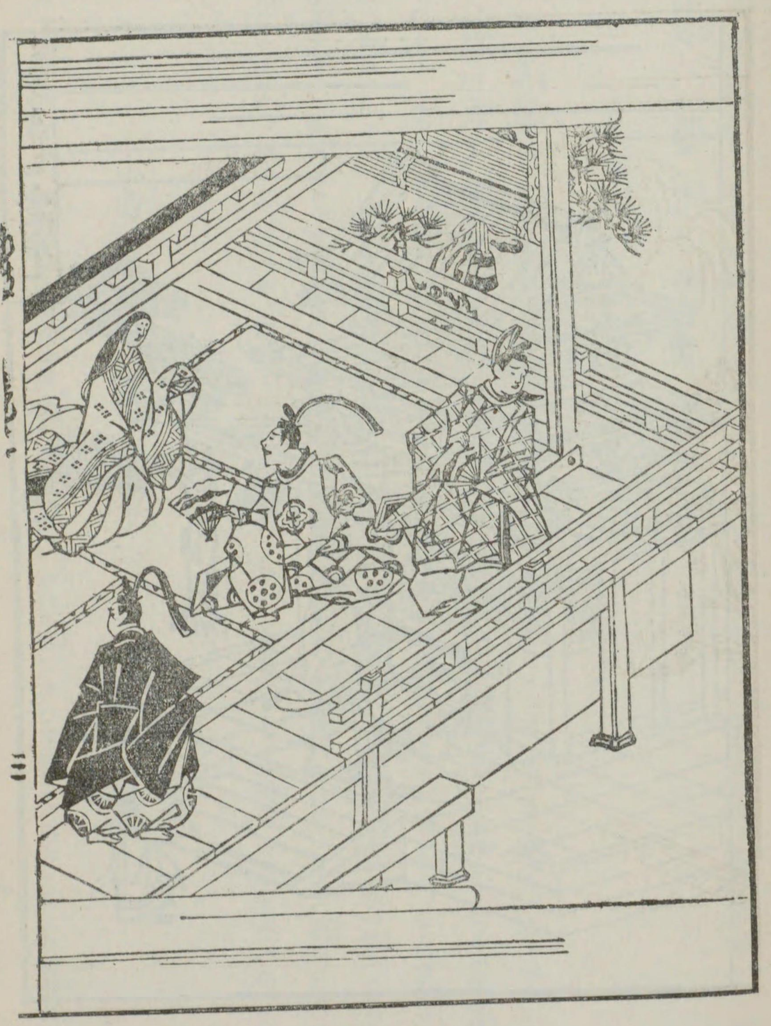
幷青葉簾之事　四月朔日

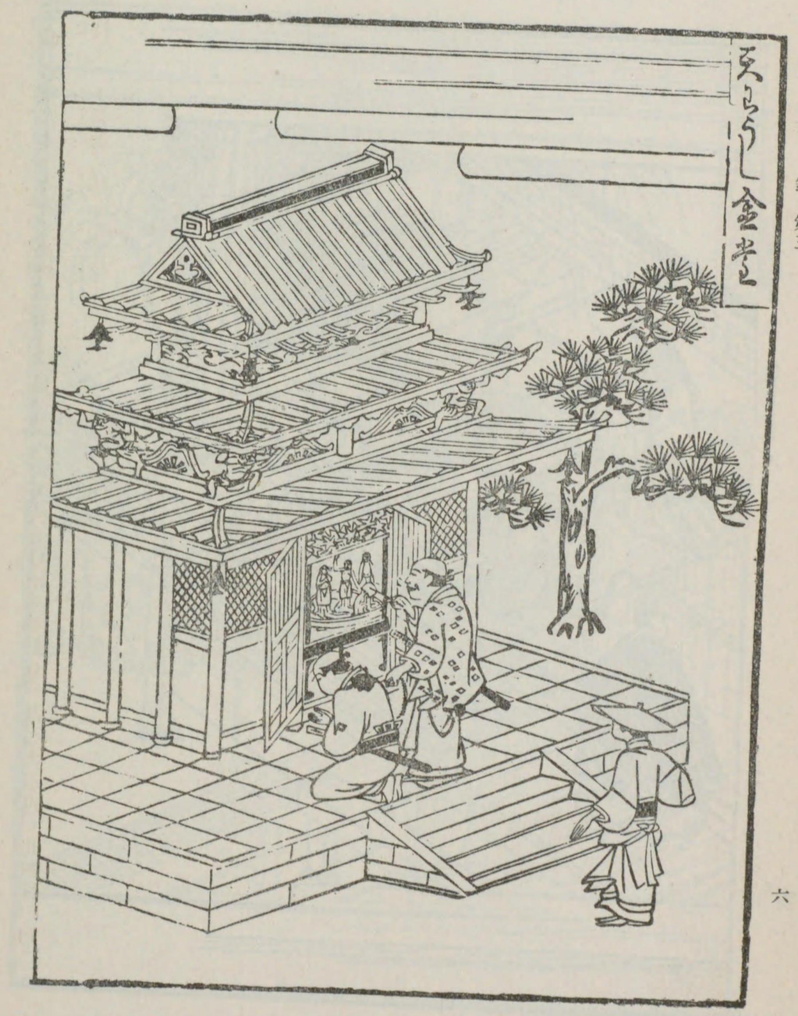
○宮中所々の御裝束寮あらたむ。御殿の御帳のかたひらおもてすゞし胡粉にて。繪かくとなん。御疊なとも。あたらしきをたきかふと也。天上人へ。けふよりねりぬきの衣を着給ふと也。是を白がさね。または。衣かへとも いふと也。さてまた青葉のすたれとて。大内にをいて。今日南のかとに。もろ柳とて。二本あり。相向て。生たるに。青葉のすたれをかけ給ひ。其日のくれに。とり給ふと也。猶尋べし

孟夏旬

○旬とハ。夏冬の季のあらたまる始に。臣下に。御酒をたび政をきこしめさるゝ義也。冬の旬ハ。十月朔日也。また内裏あたらしく作られて後はじめて。南殿にて。おこなハせたまふを。新所の旬と申也。御位につかせ給ひ


かういあくそのぜんれ





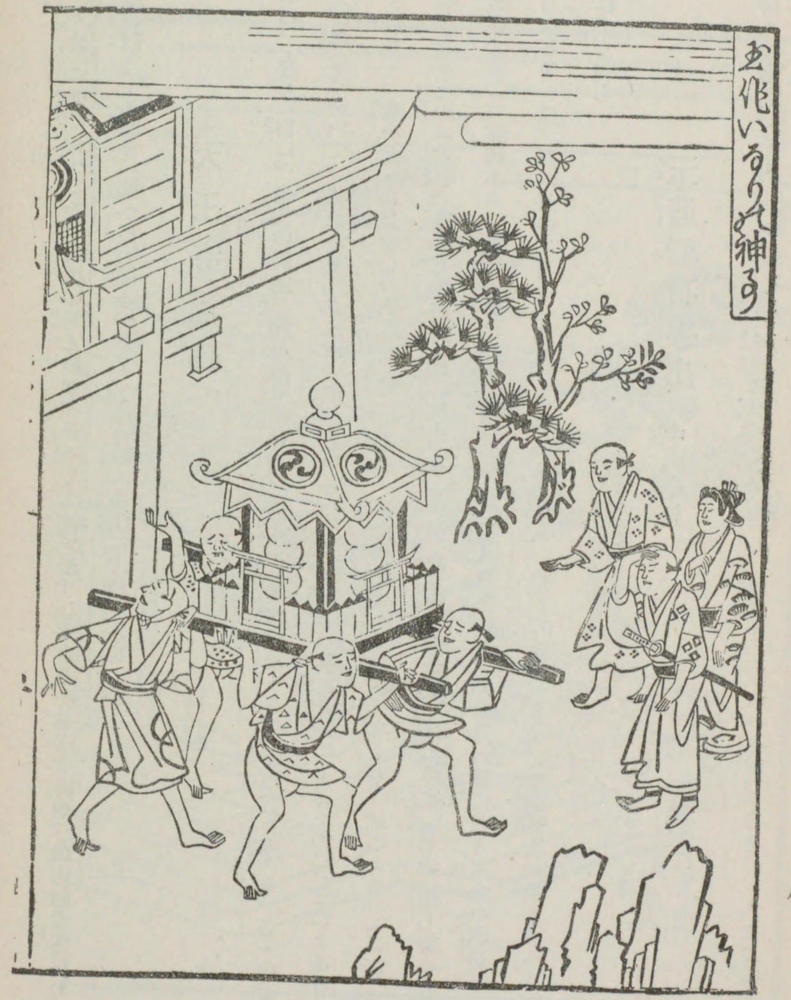
て。始て政に望たまへるを。萬機の旬と申也。是ハ。天武天皇十二年より。はじまる也。此四月の旬にハ。内侍所扇持て。上達部に賜へハ。膝をつきて。とり給ふ作法などありと也

天王寺灌佛

○今日ハ。金堂の前に。金佛の釋迦三體を出し置けバ。參詣の輩水をそゝきて。あぶせ奉る。こゝのミにもあらず。諸寺にをいて。其義あり。されバ。灌佛といふハ。尺迦如來の俱毘藍城にて。うまれさせたまふける時。天龍くたりて。水をそゝき尺尊に。あふせ奉し義也。但此佛生會ハ。推古天皇より。はじまる。また宇多天皇よりはじまるといふ說有。寛平三年四月於宮中有灌佛皇帝太子公卿百寮皆浴像し給ふと云々。また延喜十年に。灌佛あり。又古き書に。佛誕生ハ。二月八日とあり。今卯月八日におこなふハ誤也。二月ハ。卯の月なるゆへに。卯の月の二月を。四月とこゝろえぬるハ。ひがことなれとも。世間皆さかあるうへハ。あやまりにつくべし

玉造稻荷御出　中の午日

○此所を豐津といふ也。四月中の午日神輿御本社よりいだし。社内を三反まハり給ひて。そのゝちまた御本宮に。



いれまいらせ。卯の日まて。十日のあいだまつり。諸人におがましむ。そのかゝは。鉾やうのものなと。わたるといへとも。此ことも中絶して今ハなし

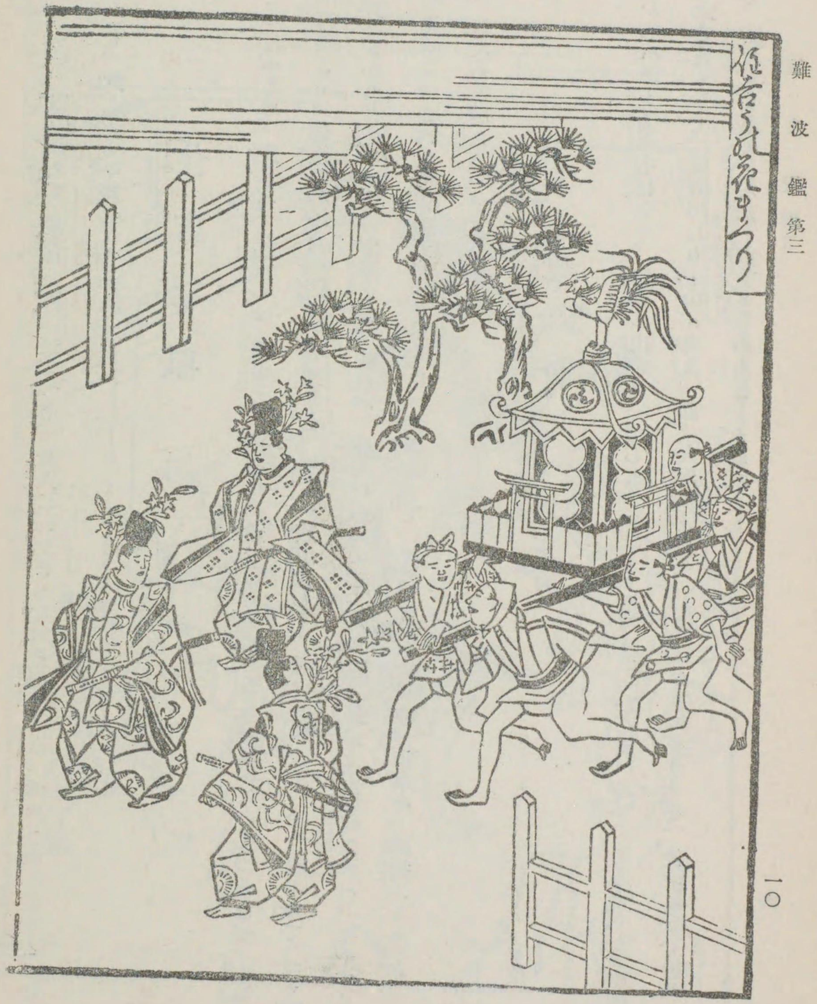
住吉初卯

○俗につたへしハ。此日ハ。住吉明神此所に。跡をたれ給ひし。最初日なるがゆへに。まつると也。則神輿一社南の拜殿より。瑞籬の外を北の門まて。遷幸し。神主一族出仕して。禰宜をの〳〵。卯の葉を持て。ねり給ふ。其義式あると也。是を住吉の忘草と云。されバ。住吉の忘草のことハ。古今集最上の極祕なれバ。たやすくゝるべきにあらす。されとも崇神天皇すゝよしに。行幸ありて。物おもひし給ふ時。忘草を。植給ふよりして。いふと也。猶ゝるて尋ゝるべきこと也

土塔會

同十五日

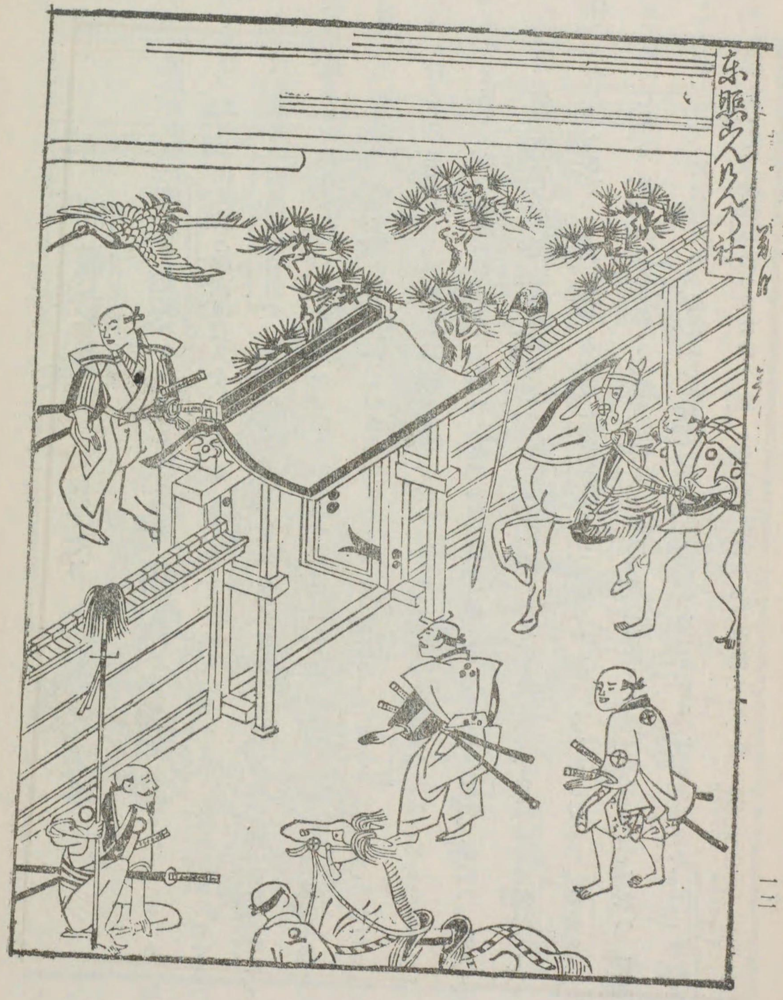
○むかしハ。天王寺七村より。當日ハ山鉾をいだしまつりけると也。ふかれども。いつのころよりか。中絶して。今ハ此こともなく。其時のねりもの、馬具。面。人形なと村々の社内におさめをきしを。けふはまいりてとりいだし。見る人もありとなん。則天王寺の内に。土塔塚として于今あり



一〇

東照權現祭　同十七日

○當日ハ。東照宮の御祭禮とて。大坂のうちはいふに及バす。近里遠村よりも。袖をつらねて。まいり。御寶前にうづくまひ。此君千代萬歳と御武運長久をいのり奉る。まことに普天の下々まで。枕を民家のやすきにをくこと。是ミな此聖君の御恩澤ならんや。されバ。此君竹千世公と申たてまつり。いまた七歳の御時三州にをいて。五月五日印地うちのありしに。人々見にまかりけるが。一方には。二百餘人また。一方にハ。纔三十餘人にハすぎじと見えしがをの〳〵。多勢のかたへむらがりあつまりしゆへ。此君を。いだきまいらせしやつこも。多勢のかたへゆかむとす。公ちば〳〵見給ひて。汝多勢のかたへゆくべからす。小勢につくべしいかむとなれバ。今多勢ハ。少勢を見て。心に油斷あり。また少勢ハ。多勢を見て。まけじといさむ心あれバ。終にハ。勝べし若まけたらん時ハ。加勢共ならんと仰給へバ奴きゝて。何ことをか仰たまふぞ人のゆくかたにまかせ給ハずして。いらざる仰ごとやと。ちゐて。つれ行奉る。既に雙方立あひ。火をちらして。うちあひけるが。少勢のかたすこしたるみて見へし所へ。後の山より。かくし勢五十餘人かけ出。彼二百餘人を悉うちちらしてけれハ。見物の人々も。こゝかしこに。にけ行たり。公此よしを御覽して。汝いはざることかと。奴かあたまを。たゝき給ふを。傍なる老人つく〳〵と。始終のありさまきゝ奉りさても我命がふたつほしきかな。此若君の天下を。ちろしめさ


東照宮ゑんりゝ社

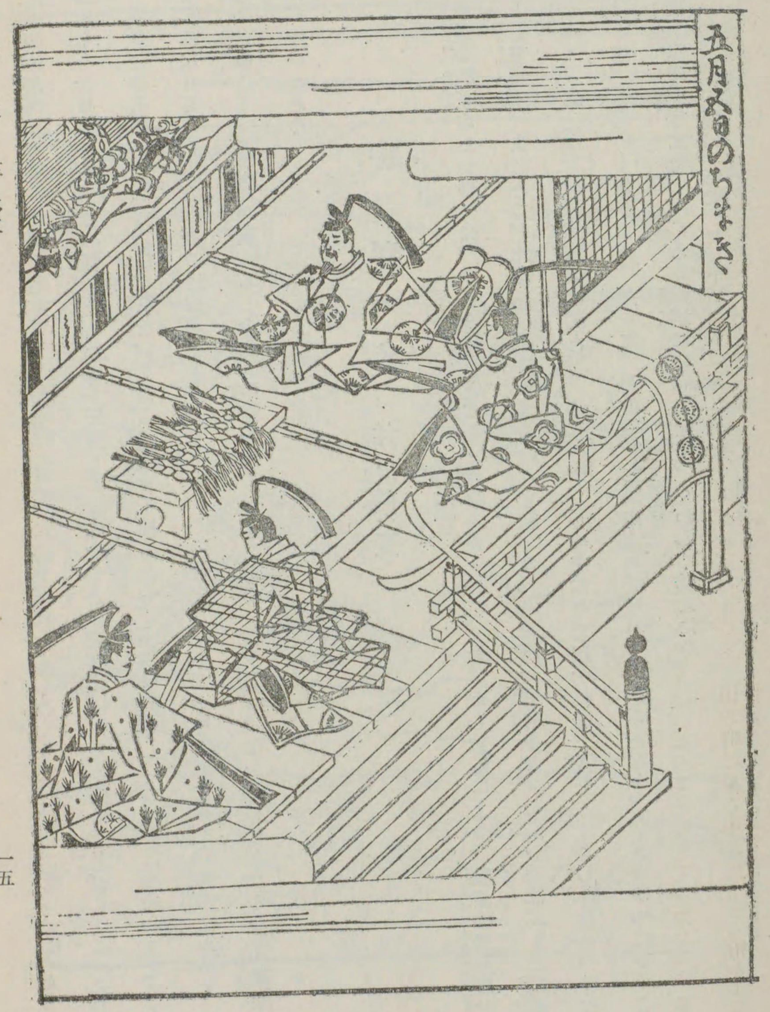
れん行末を見たしと。感涙をながしつぶやきけると也。寔淺からぬ。御こゝろざしいとも賢こく予か舌端にいひ出むも。をそれあれハ。先ハ筆をとめゝぬ

五日節會　幷藥玉粽之事

○主上武德殿に。出御ありて。宴會を。おこなハせ給ひ。羣臣に。酒をたまふと也。内辨なとも。元日の節會豐明なとに。おなしきよし。また典藥寮あやめの机をたてまつる。羣臣に。藥玉をたまふ。五色の絲をもつて。ひぢにかくれハ。惡鬼をはらふとある本文侍るにや。また今日粽を用る。こと。むかし高辛氏のあくし。五月五日に。船に乘て。海をわたりし時。俄に。難風吹て。浪にちづミけるが。水神となりて。常に人をなやます。ある人五色の絲にて。粽をして。海中に。なけ入しかバ。五色の蛟龍となる。それよりして。海神人をなやまさずこきゆく船も。災難にあハずと也。また屈原汨羅にちづミしを。まつりし時の供物ともいへり

住吉御田植　幷源平合戰之事

○いにしへハ。堺の高洲の傾城の役として。色々のかたらひに。衣裏ざしして。出たちうつくしき帶なと。手すきにかけつゝ。田面におりたち。早苗を。とりてうへたり。神主ハ車にて。田の畔に來る車をたてゝ。幣をとり。



一粒萬倍の祈念あり。社人おほく出立て。早苗をはこびわたし。田歌おもしろくうたひける。早乙女のありさま。いとおもしろかりけるを。今へ傾城ともへ。いて侍らす。人をやとひて。代にたつる程に。老ざらほへたる。婆ども。澁かたひらのやぶれたるに。軒まばらなる菅笠きて植るとや。いと見所なし。末の世になれば。なにもかも。略義になりて。上代の作法にたがふこと。上も下もかくのごとし。さてまた田植すきて。神前にをいて。源平兩家の合戰とて。赤白の籏ぞるしを立。弓箭を持て。たゝかふ。むかしへ。なかりしことなるを。中興より。ことはじめけるとそ

勝鬘參 幷氷餅之事

○御本尊愛染明王なるがゆへに。今日を緣日となし。錦帳をかゝげて。おがましむるにより。參詣の諸人所せくまでおし合羣集す。まことに。此明王へ。衆人愛敬をなし給ふなれへ。誰か信向をなさらんや。けふまた民家にて。氷餅をくふことへ。今日氷室の御調とて。帝氷をきこしめすなり。むかしは。富士と。よし野より。ひむろまいりける也。延喜のミかどより。此かた。丹波のいた田山より。今へ。あかるとなり。かゝるゆへにや。これへ。仁德天皇の御宇より。はじまる猶氷ためしの所に。くわしく見えたり。

牛頭天皇祭　同十四日

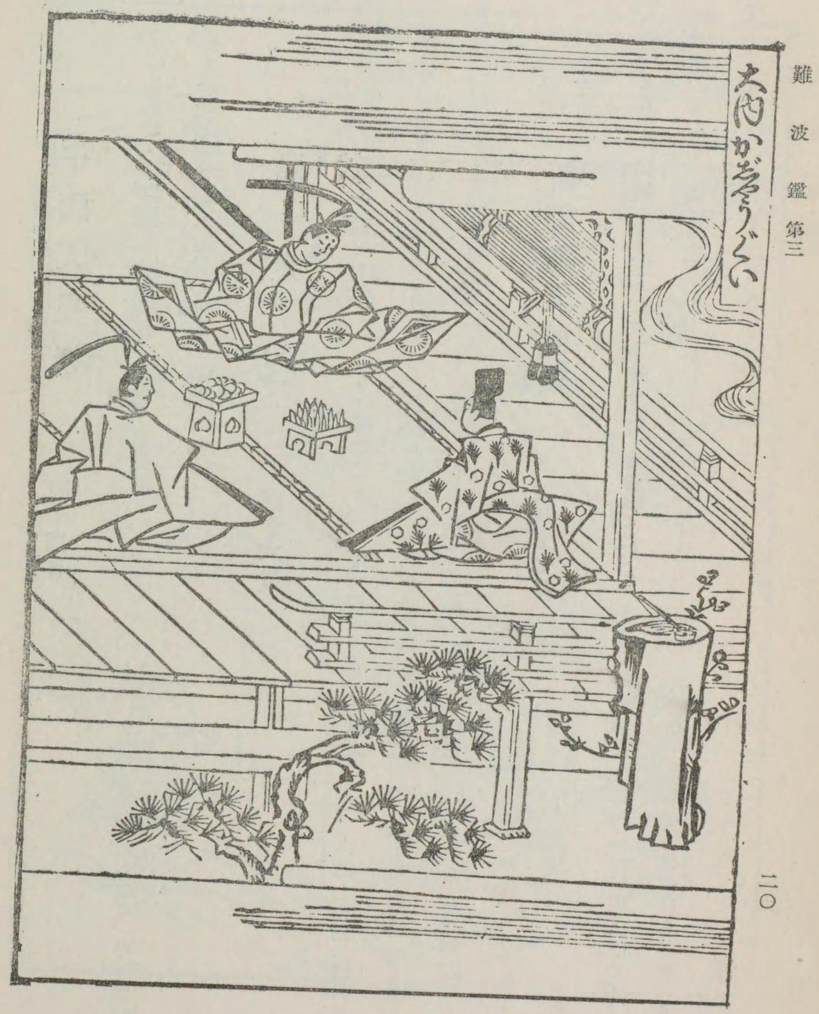
○難波の宮にまふでゝ。御湯まいらするばかり。神輿はまつらずむかしハ。平の明神を。上の宮といひ。當社をハ。下の宮といひて。さかえ給ひし時ハ。神輿をいたしまつりけるよし。今ハ神さびて。其さたもなし。

嘉定喰　同十六日

○禁中がた米をくバりて。百一口なにゝても。所望にまかせて。買もとめて。食せらる。いにしへハ。錢の文に。嘉定と書たる。是を。嘉定錢と。名づけて。食物を買もとめしを。今ハ錢も絶てなし。米にて。買侍べる其米ハ。禁中より。くださるゝ也。今日武家にも。いろ〳〵のくわしなとを。嘉定と。名づけたまハるとなん

新御靈夏神樂　同十七日

○氏人あつまりて。神樂をまいらせけるゆへに。夏神樂といふ。夜に入て。神輿を社内に。いだしまハらくありて。御本座になをす。神前より。門外にいたるまて。氏子とも。祈願のために。挑灯をとぼしけること。萬灯籠のことし

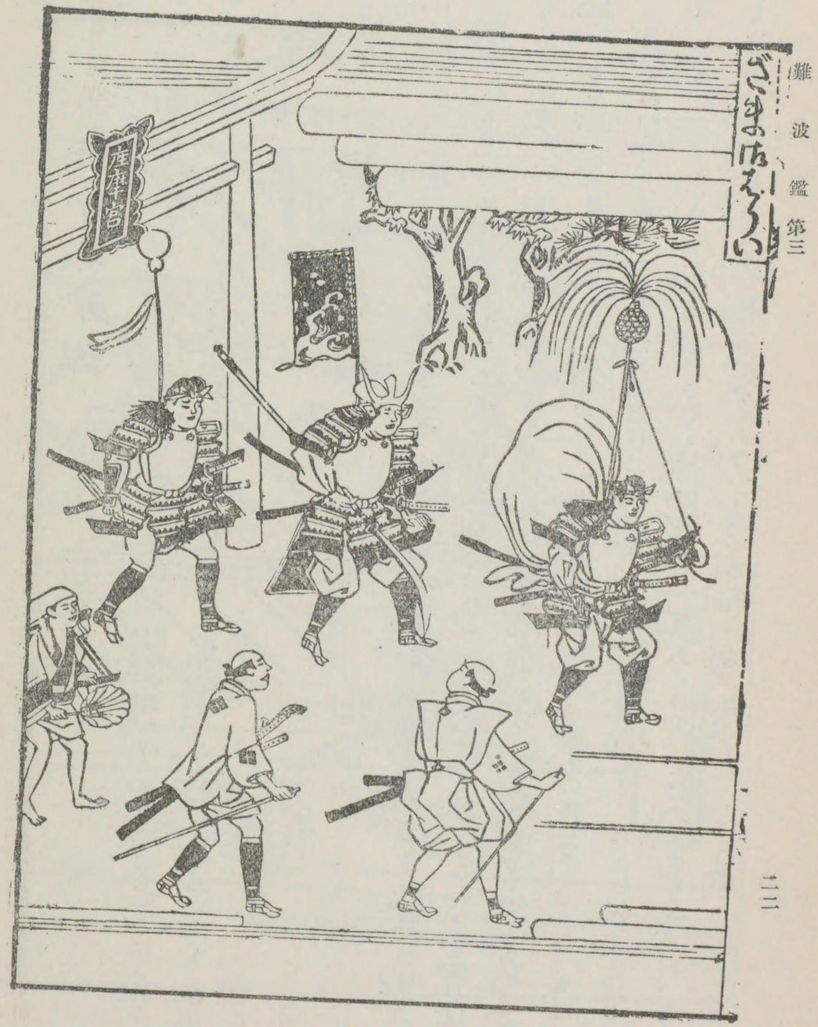


稲荷夏神樂

○是また。新御靈の宮のごとく。夜宮より。社内に。挑灯をとぼし。門前の商人へ。夜もすがら箒をたき聲をはかりに。是々味よき沙糖水とよバゝれへ。是々こゝへ。よきところてん道明寺なりとしいふもおかしく。參詣の輩集へ。野陣の夜に似たり

座摩御祓　同廿二日

○當日。御神前へ。御供にそへて。醬を奉るを。例とす。是へ神功皇后三韓御退治ありて。御歸帆の時つかれに及び渡邊といふ所に。御休息ありしに。一人の賤女きたりて。ひしほをさゝけ飢をすくひしより。其義を以て。奉ると也。此賤女へ。天朔女とて。今宮社のうちに。いはふ所也。ねりもの。母衣掛武者立花砂の物色々のつくり物に。美を盡し今の渡邊筋より。本町さかい筋へ出。高麗橋をわたり。大津町の御旅所までねる。其間三十餘丁の道筋にへやらひをゆひて。幕すたれなとはりて。祭見しさま。彼法師がいへることくに。見ごと遲し。其ほどへ。人の行かひゝるめも。恥す。酒のゝ物くひ。圍碁雙六なと。あそひて。またわたりける時にへ。をのをのきもつぶるゝやうに。あらそひ簾はり出をしあひつゝ。一事も見もらさじとする。人々の體こそおかしけれ。



まつりわたりすぎて。そのゝちに。御輿もおなし道に出させ御旅所に。御幸あれハ。神主祓なとありて。本社に。還御ある。御迎の挑灯をいだして。まつり奉ること。大形ならぬ事ども也

天満天神御祓

同廿五日

○菅丞相筑紫へ。ながされ給ひし道の次でに。ふハしおハしませし舊跡也。今の北野の天神此宮より北西へさること十餘町 其時菅丞相あまりに。飢つかれ今のゐのころ嶋といふに立より。翁嫗二人住ける家に入給ひ。小麥餅を。たてまつりしを聞めされし例により。御旅所とさだめ。小麥の御供をそなへ奉ると也御神事ねりもの。引山三方面にして。内に兒あるひハ。花笠をきたる子どもにおどらせ。あるひハ。異類異形に出立せ。さま〳〵の藝づくし。かね太鼓を。笛にあハせ。拍子ハ。都祇薗會のまつりのごとし。また引舟などあり。内にて。おもしろき小歌うたハせ。また母衣かけ武者。小具足。いろ〳〵有。天神橋通をわたりて。難波橋の邊までゆく。御輿二社難波ばしより。舟にめし。今ハ惠比須嶋に漕行御旅所に。遷幸あり。夜に入て。かへらせ給ふ。御迎の挑灯の數々浪間をかゝやかし。蒼波もからくれなるに水くゞり。神代もきかぬ。祭禮のありさま。いときら〳〵し

住吉御祓

二四

○朝まだきより。方々のねりもの母衣かけ武者。小具足いろ〳〵の飾に。手をつくしてわたる。其さま奇麗也。さて晝時分より。鼻高。鷹師馬にのりてわたる。社人もおなじく馬にのり。社僧ハ。茶臼笠を。きつれて。馬にのり。其次に。禰宣も馬にのり。一疋に。數百人長刀。鑓。なきなた。かつきつれ。一組々々引て。わたる聲よきものともハ。小哥うたひつれたり。さてそれより。神馬に。笠鉾さしかけ引てわたる。四社の神輿をまつりたてまつる。社務ハ。檳榔毛の車にて。反橋の本に立かく。神輿一社。七度の濱に出し。潮におりひたりたまふをあかるましきとの御事也とて。拍子たて、それより。宿院の御旅所へ。遷幸ある。神人のつとをあけ。ふハしありて。還御ある。御送迎の挑灯まことにおびたゞしきまつりこと。また〳〵有べきともおもハれずされバ。御祓といふことハ。今のさかい浦干輿七佛のいにしへより。物在不思議の龍宮有。今の宿院のうち也 彼砌に。如意寶珠。また壺を。埋置給ひ。住吉明神今日幸をなし。口をひらき給ふゆへに。祭禮をなし。神輿をこゝにうつし奉ると也。御誓願の文に。今此三界皆是我有乃至唯一人能爲救護是とあるも有がたし。さるによりて。此浦の潮を。浴する輩ハ。必現當二世の願成就せりと。をの〳〵。當日潮に入て。水をあひけるも。かゝるゆへにや

附 堺浦と云事

○開口一說水十三所の神明ハ。外宮金剛界三十七尊九會まんだら佛界と。衆生界と。金胎兩部陰陽不二の地也。村と云

とみ吉の神子

是によりて。堺浦と名つく。男子盧嶋。葦邊干興ともいへり。また八祖の浦ともいふと也。子細あること也

難波鑑第四

目録

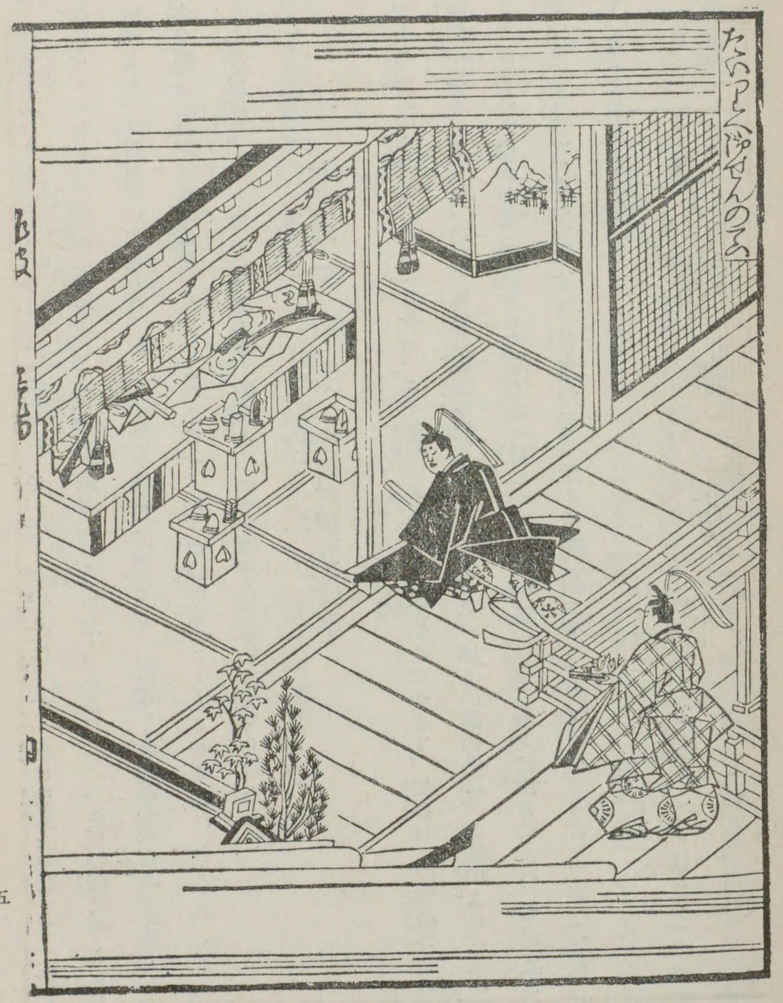
法善寺墓參
乞巧奠
天王寺千日詣
盂蘭盆　附躍之事
地藏祭
三津寺八幡祭　附放生會
安居天神芝原祭
七日御節供　索餅并仙翁花送事
天名種　并七姫名之事
御城御番代
東西本願寺燈籠
八朔　并禁中御馬
難波堀江月見　并難波御祓

難波鑑　第四

法善寺墓參　七月朔日

○千日寺のたゝきがね。諸行無常のひゞきあり。歌舞喜若衆の花のかほバせも。つゐに必衰をあらハせり。さればあしたにハ。紅顔ありて。世路にほこる人も。夕には。此墓所にきたりて。白骨となりて。朽る。まことにけふハ人の上。あすの我身をゝらず。おもへば〳〵はかなき。あだしのゝ露よりもろき世の中に。たれありて殘るべき。鳥部山の煙たちさらでのミ。住はつるならひならバ。いかに物のあハれもなからんといへることなと。おもひやられて。心ほそくそ侍る抑此法善寺と申せしハ。寛永年中のころほひより。千日の念佛をとりたてしより。人こぞりて。千日寺といへり。それよりつゞひて。今ハ不斷念佛の道場となれり。いつのころよりか。此寺の墓參とて。七月一日より。其月のくるゝまで。毎夕大坂の男女。老若貴賤によらず。此寺にまふできたるありさま。いふも中々くだ〳〵し。予も一夕殘暑のたえがたかりし折から。納涼の陰をもとめむと。こゝに來て。堂のえ

四



五

んに。端居して。人々のこゝろをうかゞひ見るに。予がごときの人おほくて。實に參人まれにして。わかき人々ハ。色にそゝあるひは。酒宴などを催し。ざれめき遊ぶ人がちにして。あるひハ。いきほひ猛にのゝしり。はてハ。喧嘩して。法場をけがす人あり。かゝることを見るにつけても。いよ〳〵我身をかへりみ。うけかたき人界に。生を得て。有がたき御法を。うくるよろこひを。わすれ後の世のくるしゝをまふけむこと。おもへバ〳〵あさましくそ侍る。かゝることをしても。物詣といふべきや。をそるべくつゝしむへし

七日御節供　索餅并仙翁花送事

○むかし高辛氏の小子七月七日に死せり。その靈鬼となり。人に瘧病をなやます。彼存日に。麥餅をこのみしゆへ。索餅を以て。是をまつれバ。年中の瘧病を除くといへり。されバけふの御節供に。内膳司より。是を調進せり。よりてする〳〵まても。索麵をもちゆるは。此ゆへ也。けふまた仙翁花を人に送ることハ。乞巧奠とて。二星をまつり。香花をそなふがゆへに。花を人にも。送るにや。仙翁花ハ。嵯峨の仙翁寺より。はじめて。出しによりて。其名とせりとかや

乞巧奠　七日

○乞巧といふことハ。もろこしよりことおこれり。七夕祭とも云也。けふハ御殿の庭に机を四脚たて。灯臺九本但をの〳〵ともし火あり。机の上火とりに。夜もすがら。たき物くゆる。また琴をたて。たらいに水を入大ぞらの星をうつせり。天平勝寶七年よりはじめて行ハせたまふと也。香花をそなへ。供具をとゝのへて。庭上にふゝを置。竿のはしに五色の絲をかけて。一事をいのるに。三年のうちにかならずかなふといへり。此ゆへに。乞巧と申也。郝隆ハ。腹中の書をさらし。阮咸ハ。竿の上の褌を。手向しためしも侍る也

年中行事歌合　七夕にけふハたむくる琴のをのたえぬや秋のちきりなるらん　爲摹朝臣

天名種并七姫名之事

○同七日萬の寶物を。舟車につミて。七夕に手向たてまつる。是を天の名種といふ

けふハとて天の名種のとり〳〵に舟と車や七夕のもの

さてまた。七夕に。七姫の名あり

さゝかに姫　薫姫　百子姫　袖かす姫　織女　梶葉姫　横姫

天王寺千日詣　同十日

○此日天王寺へまいれば。千日にむかふとて。參詣の蓙集大かたならず

御城御番代

同十二日

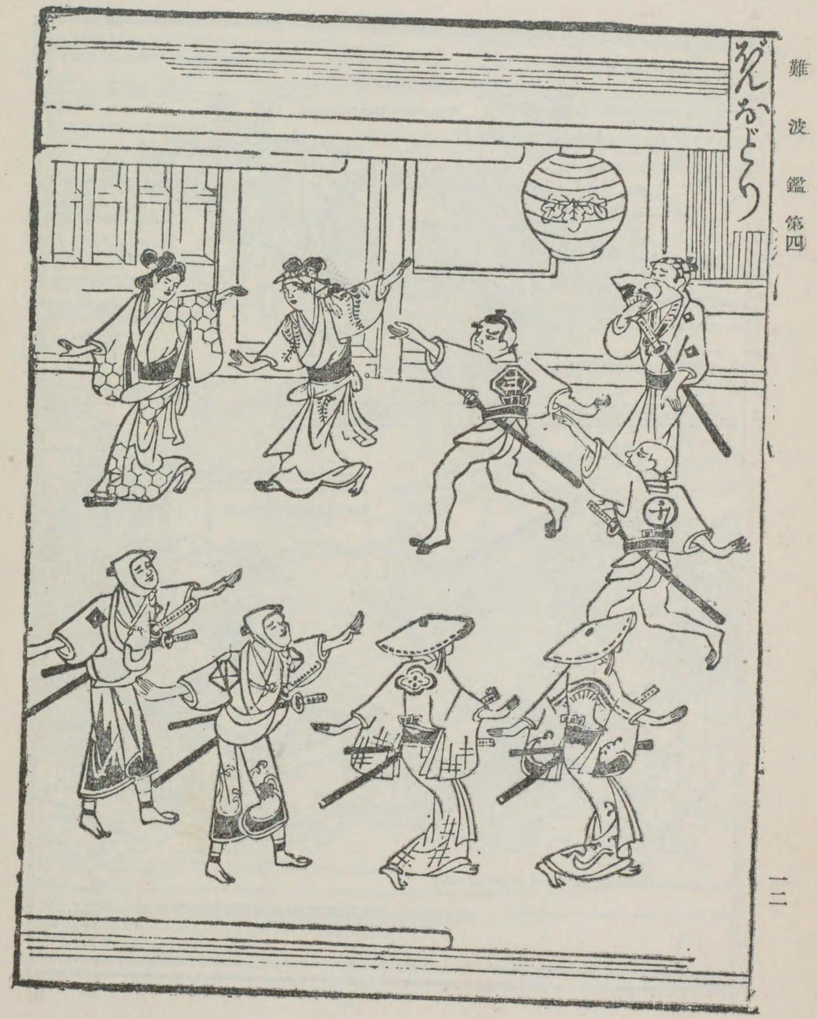
○四の海浪ちづかにして。江戸をならさぬ。時津風難波のうらも。をたやかに。民の竈も。にぎ〳〵とたかき矢倉の時の太鼓も。うちおさまれる。御城の白洲にをりし。友鶴ハ松にちとせやちきる覽。猶行末も。久堅の雲かとのミぞあやまたる。ちら浪たゝむ石垣の堀のどう龜幾世經て。萬々歳や待ぬらん。かゝるめでたき御代に。また行もかへるもあふ坂の關のひかしのあなたより。御勤番の諸士隔年に。かハらせたまふ。そのかミは。仲秋のころなりしが。ちかきよりして。今日をはじめ十六日までかハらせ給ふ。御出入の粧。かいつくろふ儀式うるハしく。まことにやんごとなき御ありさま。中々武士に越たる物あらし

人ハ武士はしらハひの木魚ハ鯛小袖は紅梅花ハミよし野　一休

盂蘭盆

同十四日

○内藏寮御盆供をそなふ。晝の御座の南の間に菅圓座一枚ふかせ主上是にて御拜あり。幼主におハしたまへる御時ハ。此義なしと也。盂蘭盆といふハ。梵語也。倒懸救器と。飜譯せり。倒懸ハ。さかさまにかくるといふ心也。



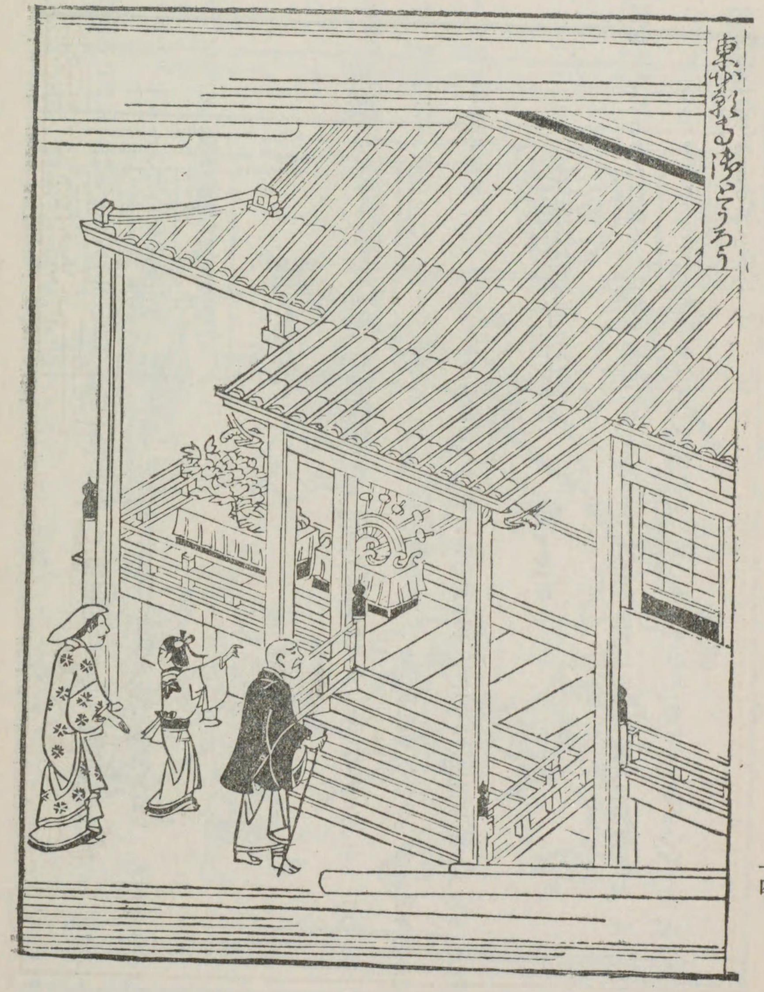
餓鬼のくるしミを。思ふにさかさまにかけたらんがごとし救器へこのがきのくるしミをすくふうつハもの也。佛弟子目蓮はじめて。六通をえて。その母の有所を見られしに。餓鬼の中にありしかバ。是なげきて釋尊にまふで。このくるしミをすくハむことをもとめられしかバ。七月十五日に。自恣の僧を供養あらバ。解脫をえられんと。説たまひしよし。盂蘭盆經に見えたり

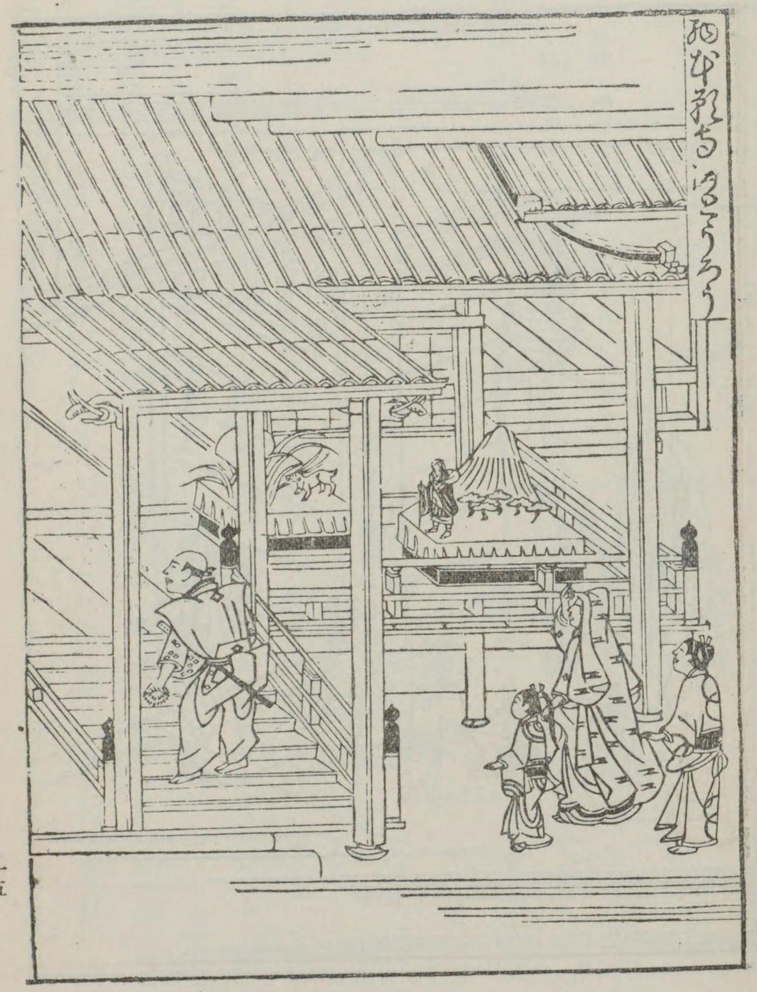
附躍之事

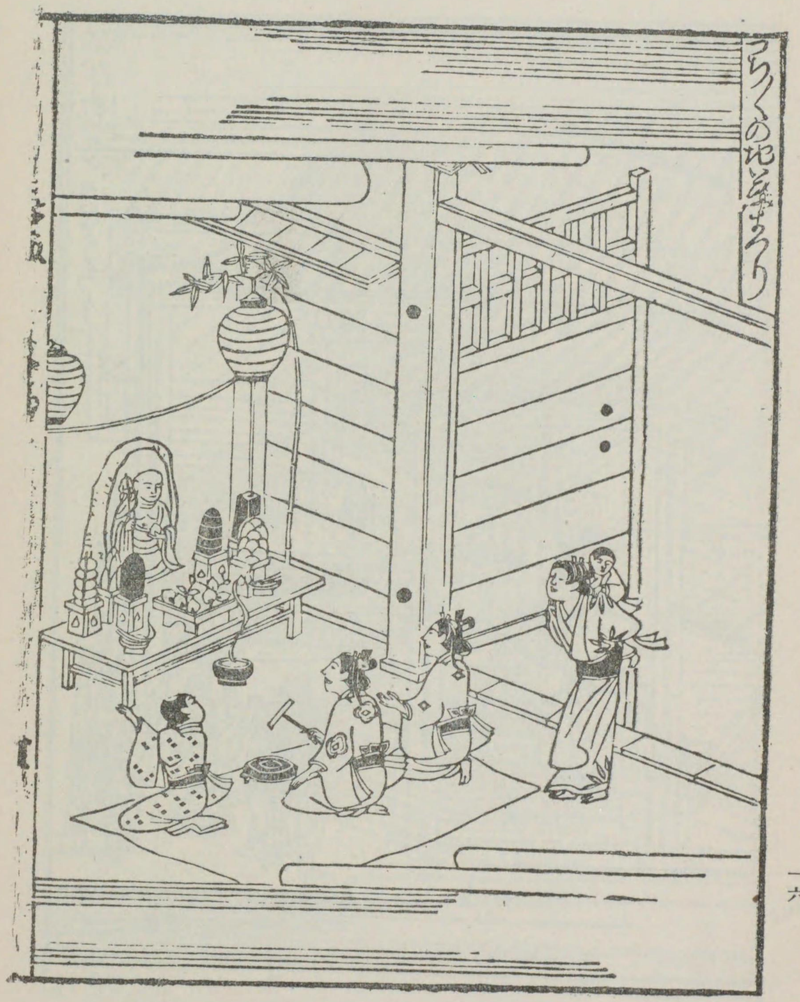
○をどりハ佛在世にもあり。すなハち。踊躍觀喜とて。法門を悟道してハ。をどりをとつて。よろこふといふことなり。儒經には。手のまひ。あしのふむところを。ふらずといへるもこのこゝろあり。いま町々のをどりハ。秋は人の氣分下陷するゆへに。殺厲の氣をはらひ。君相二火の氣分を引たてんためにをどりハありとこそ

東西本願寺灯籠　同十七日

○洛陽御本寺にありし灯籠を。大坂の御堂にうつし。十七日より十九日まで。諸人に見せしむ。まことにいろいろのつくりばな。さまくしとしくにかハり。鳥けたものゝつくりものなとにこゝろをつけて。色をあらそふこと。東西いづれかをとり侍らんや







一六

地藏祭

同廿四日

○けふハ地藏の御えん日にて。町々の辻に。わらバへとも。供物灯明をかゝげてまつる也。取分安堂寺町東堀壹丁目の門の脇に。あぶらかけの地藏とて。いにしへよりあり。此地藏よく。瘧病をなをし給ふとて。其宿願にハ。縄をかけ置。やまひ愈時ハ。かならず縄をときまいらする。寔苦勞なる地藏の體。見るもさなから堪かたくこそ侍れ

八朔

并禁中御馬

○是ハ。大やけことにてハなし。されバたしかなる本説あらず。建長の比より。祝來られると也。はじめハ。田のゝとて。土器に。米をいれて。人のもとへ送けるとかや。其後次第々々に。世人さかんにけふを以て。あつかへる事也。今わらハの行器をもて遊ひの送物とせるも。今としの米をいるゝうつハものにや。ある説に。公事也。田面の節會とて。そのかゝは。早稻の燒米を。諸國地頭の本より。禁中に奉りしと也。中手奥手田も。このころハ。穗並花咲て。科戸の風も。靜ならんことを。上下ともに。いはゐまつる節なれバ。猶武家にハ。領田地方の滿作納收の祝をなし。主君の拜禮をおもくする也ともいへり。また今日は禁中へ公方より。御馬進上あり。

たゝし昔ハ。十四日より。當月の中。國々よりたてまつると也

あふ坂の關の清水にかけ見えていまやひくらん望月の駒

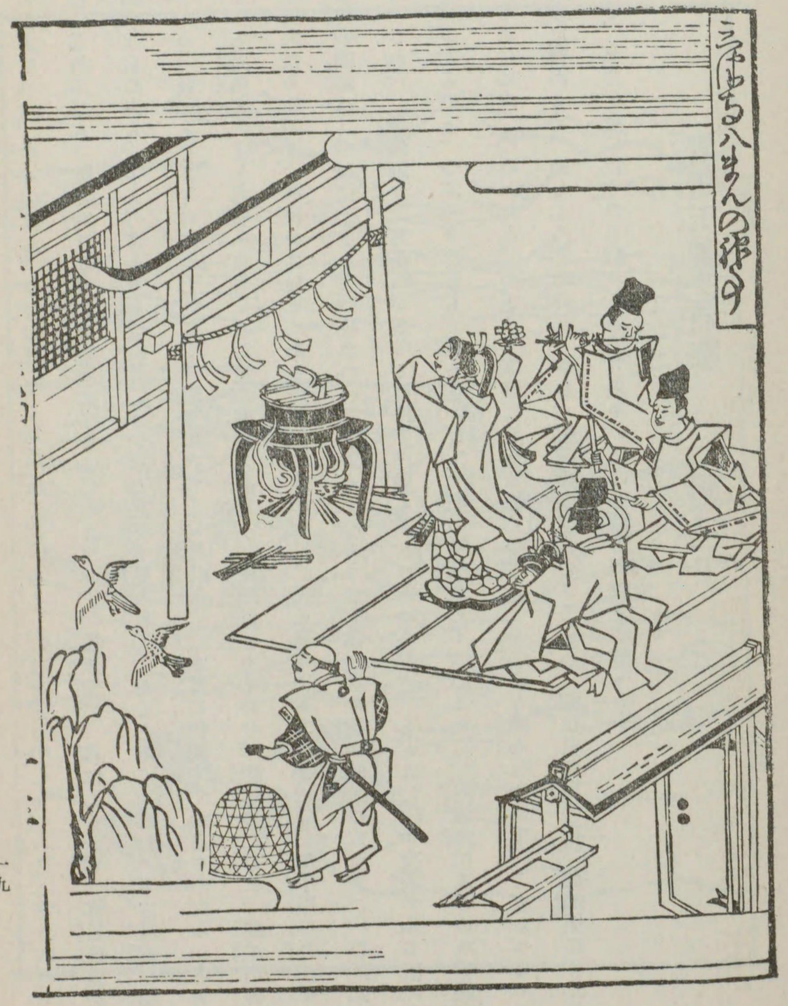
三津寺八幡祭　同十五日

○けふは當社の祭禮とて。氏人ども神樂を奏して。御輿はまつらす。居祭也。まことに神ハ。人のうやまふによりて。威光を增しめ給ふとかや。此御神ほと御種性も歷々にて。ことに。男山宇佐なとには。おびたゝしきまつりことをなし奉るに。さのミのことなきハ。よき氏子をもたせ給ハぬゆへにや。此日諸國にて。放生會をなしける。其はじめをきくに。是ハ。元正天皇の御宇養老四年九月異國襲來の時。八幡大菩薩の神力にて。たやすく。異敵をちりぞけたまふ。そのゝち大菩薩の御託宣に。合戰のあいだ。おほくの人ころされぬ。かれがために。放生會をおこなふべきなりと。ありしによりて。石清水にて。此事あり。うたにいけるを。はなつとよめり

年中行事歌　合　世にかくてつなかるゝ身をすくハなむ生るをはなつ神のめくミに　新中納言

難波堀江月見　并　難波御祓　同十五日

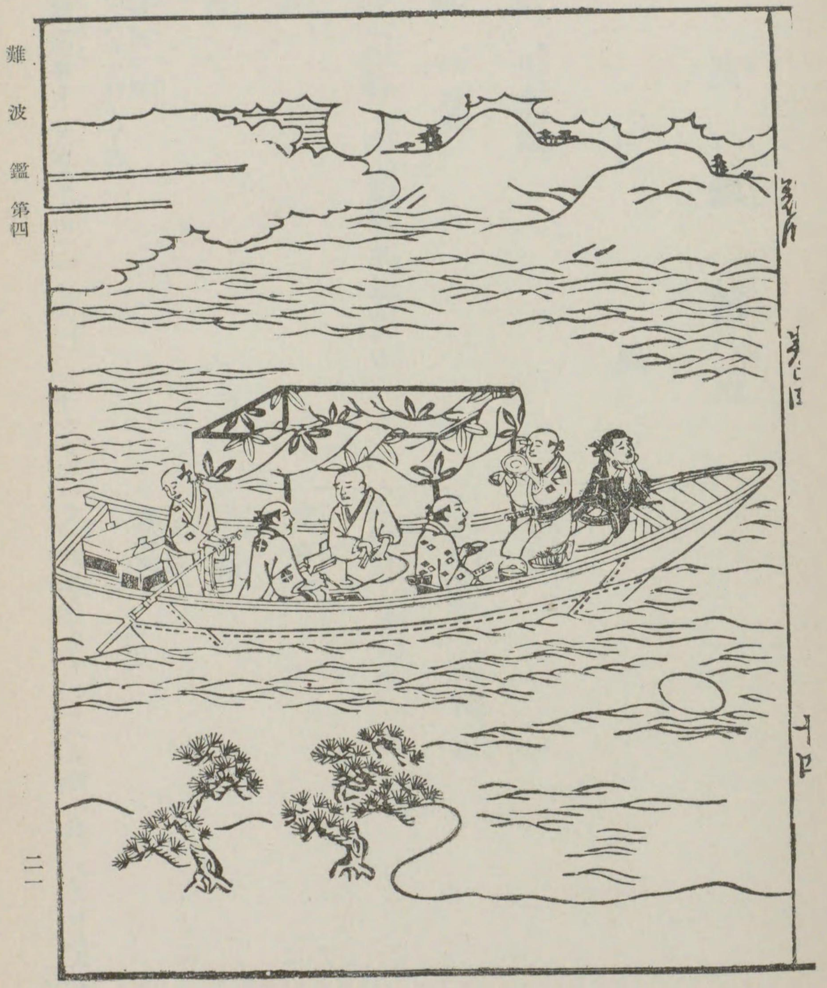
○月の名所ハ。須磨。あかしより。はじめて。更級。姨捨。田子。都は。廣澤。ちかきハ。若吹上。諸國に。名



を得しことなれバ。世々の歌人。今宵の月に。あこがれて。いろ〳〵の歌をとり出して。のこしをかれたり。こゝも名にしあふたる。難波堀江の月こそ餘所にてミるにハまされと。棚無船に。幕はしらかし。辨當提重を入させ。曲水ならねとも。手まづさえぎる盃の波にうかべし遊宴も見所有て。おもしろく。また。琴三味線。笛。太鼓。つゝみ。鼓弓とり〳〵のはやし物にて。船こぎいつる。物の音に。水底の魚鱗も。おどりあかるかとおもハる。かゝる遊興また〳〵あるへきや。また世の好事の輩ハ。硯懐紙とりもたせ。堀江つたひに。傳法あるひハ一の洲のあたりまても。櫓械をさせて。あこがれ出。水の面に。てる月なミもおづかにて。二千里の外まても。曲なき月の面影ハ。つねにまさりて。一きハいさぎよく。心もうき立物ハ。今夜の船遊ひなりと。いひけんもおかしく。されバ。彼法師か。月花ハ。さのミ目にて。見る物かハといへれど。もしまた。今夜雨のふらばいかばかり。殘多からめと。つぶやきけるも。實もといひて。酒のミ連歌して。ゐるまに。月西海におづめハ。難波寺のかねもあけぬと。つけわたる。いざ〳〵家路にかへむなんいざと。をの〳〵船をはやめて。こぎかへるありさまハ。また興ありて。おもしろくそ侍る。されバ難波の御祓といふことハ。源氏月の秋の比。此浦里にくたり給ひしとき。名月の夜にはらひし給ふことあり是をいまに難波の御祓と申傳へり

安居天神芝原祭

同廿二日



○當社の神事を。芝原祭と申て。けふハ。三寸をそなへて。神慮をすゞしめまつり給ふ也。あまり人さらねハ。

二二

參詣の人もまれ〳〵也

難波鑑第五

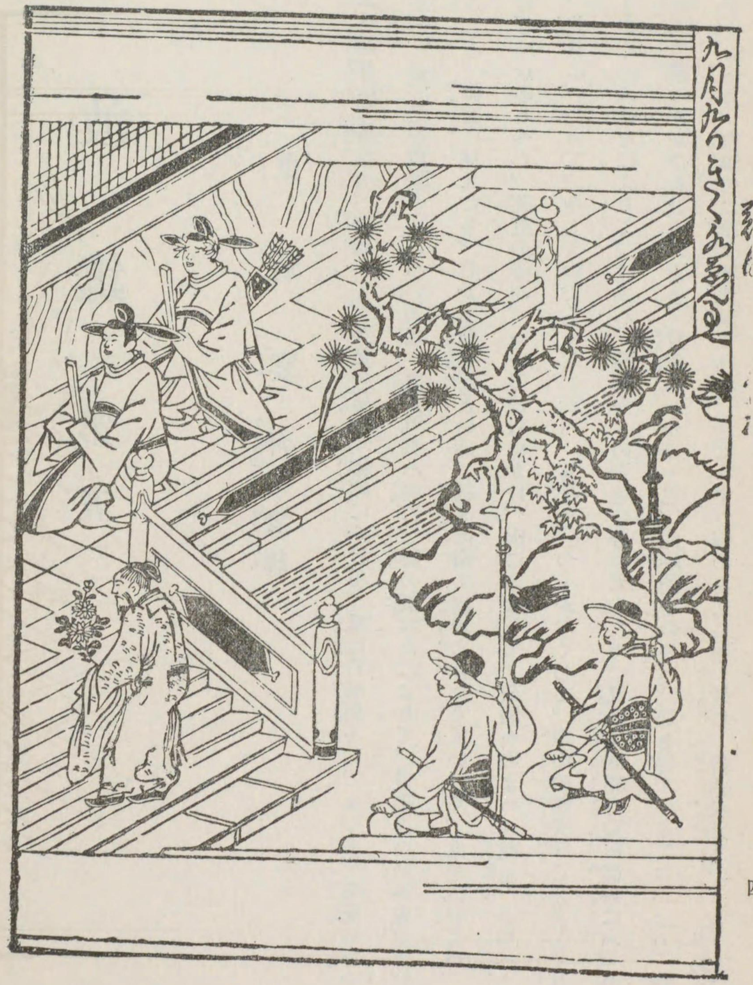
目録

重陽宴　并菊着綿
高津祭　并相撲
天王寺一乘會　并結縁灌頂御念佛始
天皇祭
稲荷祭
天滿鏑流矢馬
住吉神送
生玉祭
住吉相撲會　并寶市
神明祭　并例幣
今宮祭
座摩祭
津村祭

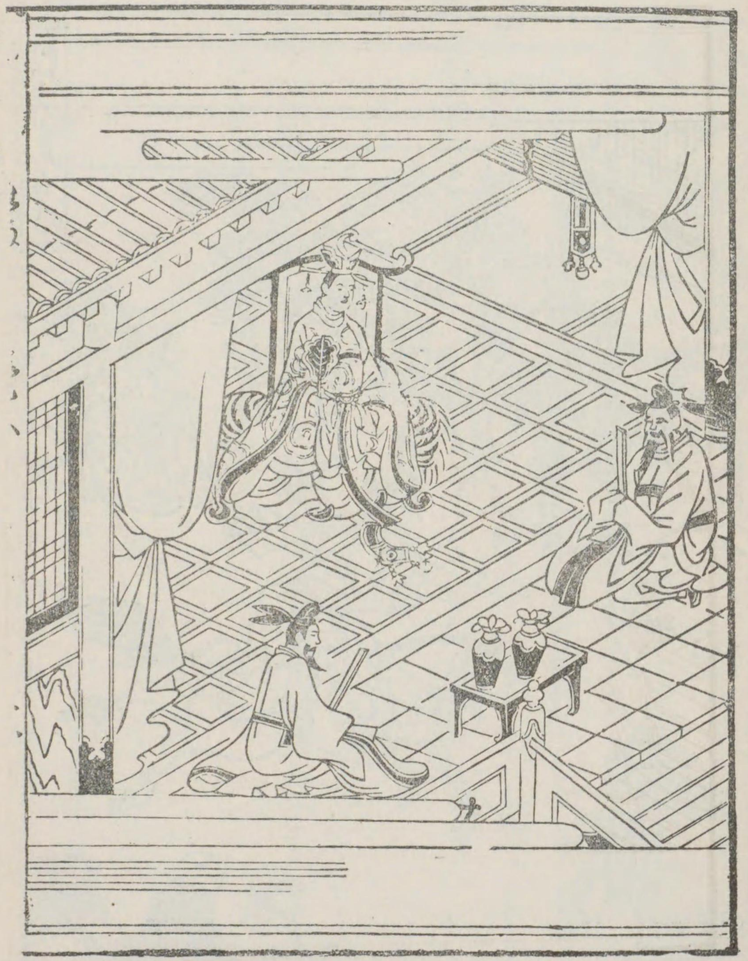
難波鑑　第五

重陽宴　幷菊着綿

○けふハ節日にて侍れハ。禁裏にて。茱萸の壺を。御帳にかけて。羣臣に菊酒をたてまつり。菊花の宴を。おこなハるゝと也。是を重陽の宴とハいふ也。九月九日ハ共に。陽の數なるによりて。重陽とハいふ也。また菊をもちゆること。諸書に見えたり。むかし費長房といふ。仙人汝南の桓景にかたりていはく。九月九日にハ。汝か家に。わざハひあるへし。茱萸の壺を。ぬいてひぢにかけ。山にのぼりて。菊酒をのまハ。此災きゆへしと申けれハ。其日にいたりて。をしえのごとくせしかハ。其身ハ。つゝかなくして。家中の雞犬羊こと〳〵く死たり。かやうのくのふ侍るによりて。けふハ。菊酒を。のむといひつたへたり。又後光明峯寺殿の御抄にハ。九月九日に。寒温二季のさかひあふとき。身肉にわかるゝ也。此時酒をのめハ。病を得ず。さてけふより。酒をハ。わかすといへり。寒温の二季大增大減すれハ。かならず。病のをこる也。故に。針治灸治も。ミな肉別をしてす



四



五

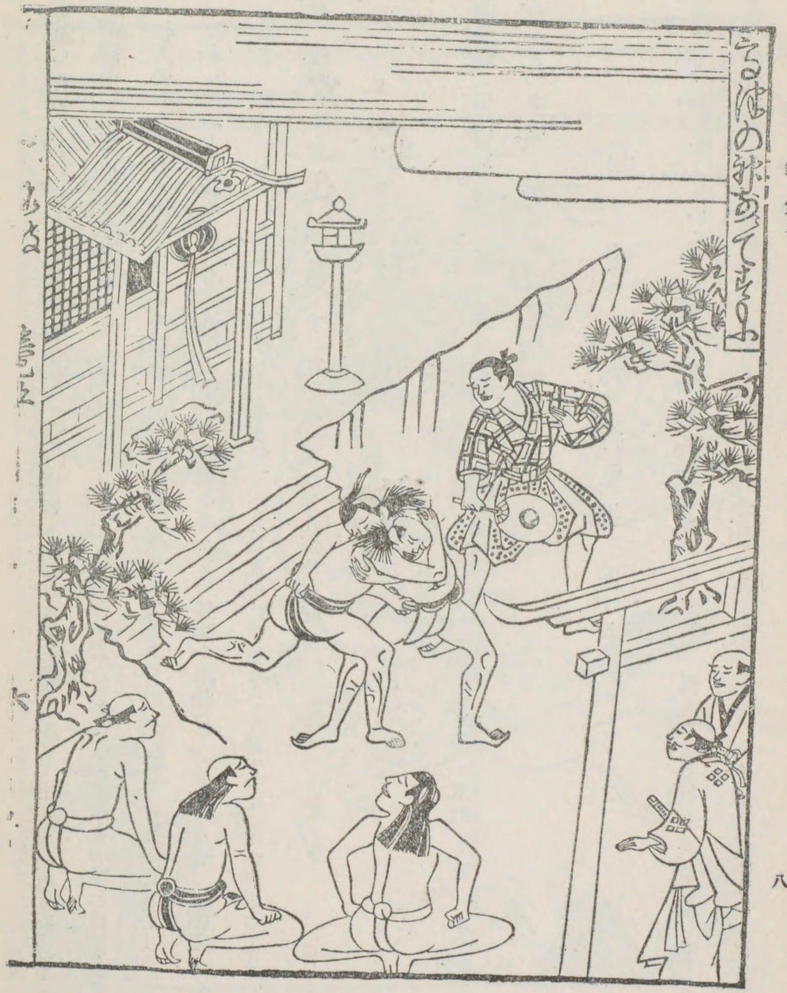
る也。また魏文帝うまれたまふ時。紫雲殿上に現して。例にも似す。はたして七歳にして。位につき給ふてけり。其時天下の壽命。十五に過きす。ことに。帝十五漸。近づく時歎きをふくして。あゆましめ給ハす。其時穀祖といふ。仙人のらきくえんの菊を。花を折て。九月九日に。持參りて奉りけれバ。帝是を服したまひて。延壽七十歳を。たもち給ふよし載られたり。漢の武帝も。菊酒をのミて。長壽を得給ひしこと侍る也。また菊のきせ綿をけふとる也。是ハ。七月一日より。菊にわたをきせて。九月九日に。花をさかせて。大内へ。かさしまいらせむか爲也。此綿きすること。別にあらす。花をとくさかせんがゆへ也

生玉祭　同九日

○當社御祭禮。引馬犀鉾母衣武者なと。そのかミは。ありといへとも。今ハ。神前の松原にて。やふさめあり。御輿一社をまつり奉る也

高津祭　并相撲　同十日

○御神前にて。御湯なとまいらせ。神樂を奏しまつる也。そのかミより。氏人立寄相撲なとはじめ神慮をすゝしめける也。抑相撲節とて。禁中にハ。七月廿五日より。廿九日まてあり。是ハ。垂仁天皇七年に。はじめ給へる

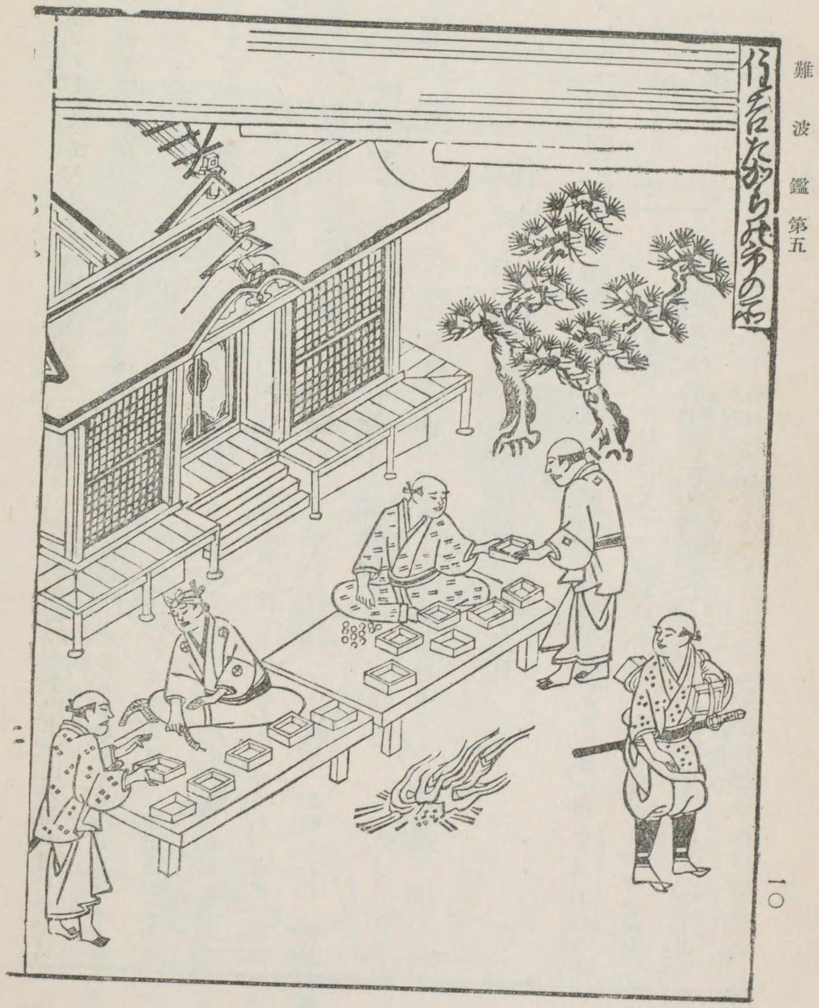


と也。諸國の供御人をめして。すまふをとらさしめ給ひ。天子御覽有事也國々より。相撲人をめさせらるゝを。萬葉に相撲使とあり。主上仁壽殿に出御なり。左右の相撲人憤鼻の上にからきぬはかまをきてすまひをとり。勝負あり。是を內取といふ廿八日に召合といふあり。天皇南殿に。出御なる。廿九日に。抜出といふあり。その中の上手をすぐりて。御覽あるゆへに。抜出しいふよし。それ相撲のおこりハ。垂仁天皇の御時。當麻のむらに。蹶速といひて。角をもさきぬるほとの。ちからつよきものあり。此よしきこしめさせられ。是につかふへき人を尋させ給ふに。出雲の國に野見の宿禰と申もの侍るよし。奏せり。則めして相撲を。御覽せられ。野見宿禰ちからまさりて。蹶速が腰をうちくじきて。踏殺し侍る。是相撲の始也

年中行事歌合　かた分てことりつかひのいそきしハけふのぬきてのみなりけり　女房

住吉相撲會　幷寶市　同十三日

〇むかしハ。當日住吉にをいて相撲競馬ありとそ是ハ神功皇后三韓御退治ありし時の例をうつしけると也。今ハ中絶してこのことも。なかりき。さてまた。今日夜に入て。神前にをいて。市を立舛をうりかふ是をたからの市といふ也。予おもふに住吉の地主神ハ。侍者御前とて。女體にて。ましまし是を市姫と申て。すミよしハ。日本國の市の立始なるがゆへに市のあるじとし侍れハ。是等のことによりてか。此市姫に。御子七人あり。すなハち



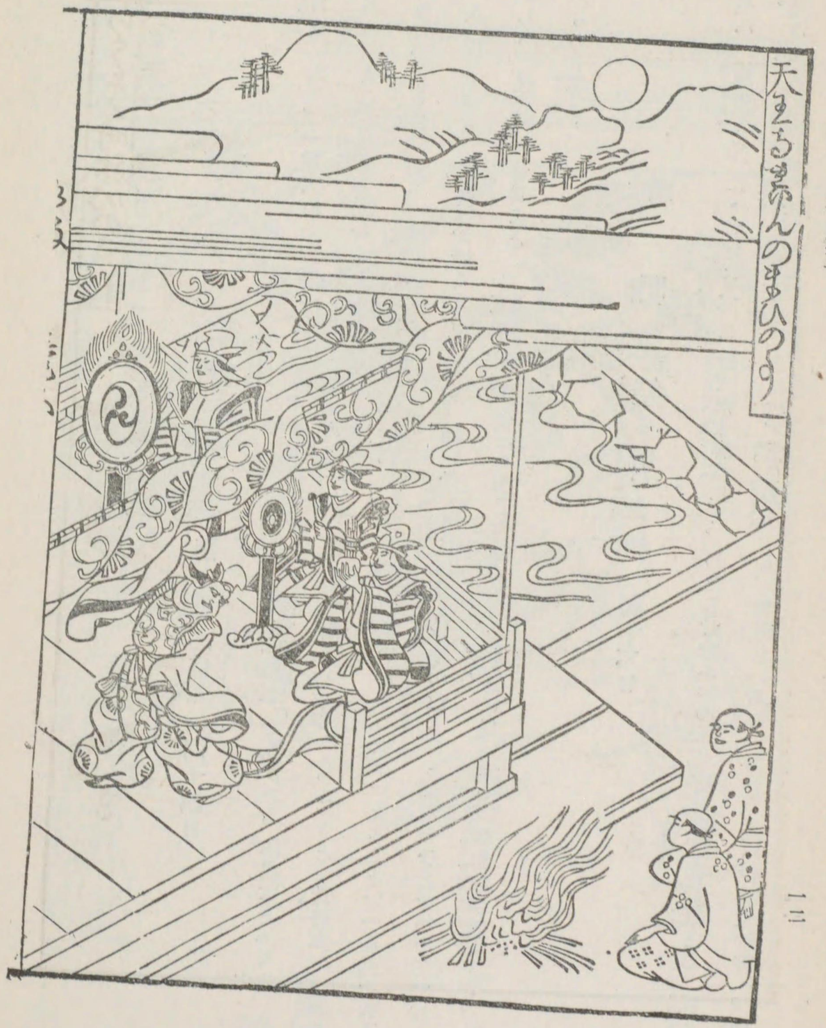
七姓を給ふて住吉の氏人となり給ふ。大領氏。板屋氏。狛氏。これらハ。今の津守氏の先祖也。そのほか。津氏大宅氏。神奴氏。高木氏なとゝてあり。いづれも神とあがめ。七所に。鎮座なり給ふ尋へし

天王寺一乘會　幷結縁灌頂御念佛始　同十四日

○當日夜に入て。一乘會をとりおこなひ給ふ。そのぎしきハ。涅槃會聖靈會におなしく。御輿なとふり出。伶人の舞あり。まことに木の間をもりくる月影ハ。舞臺にうつり。物の榮ある粧こそ。たうとく殊勝なれ。萬のものゝきらかさり色ふしも。夜のミこそめでたけれ夜はきらかに。花やかなる裝束いとよしといへる人をおもひ出。人のけしきも。夜のほかげそよきハよく。物いひたるにほひも。物のねもたゝよるぞひときハめてたけれ。むかしハ。又此月の廿日ことに。結縁灌頂をとりおこなハるゝと。舊記に見へたり。猶御念佛始なとゝ。いふこともあり尋へし

神明祭　幷例幣　同十六日

○是ハ。蠟燭町に。たゝせたまふ。一社天照太神宮にて。わたらせ給ふがゆへ。當日を。御祭禮とし。氏人御湯神樂を奏し。神慮をすゞしめ給ふ也。されバ。當日禁中にも。例幣といふことあり。是ハ伊勢大神宮へ。御幣を


天王寺まいりの事

らうそく所作のさい礼

たてまつらせ給ふ義也。としことの義なれバ。例幣とハ申と也このこと朱雀院の御時より。はじめらる。當月一日より。今日にいたるまて。僧尼重輕服の人御門にいることならす。大神事なれハ也。神風の伊勢の國に。御鎭座あることは。垂仁天皇二十五年三月に。倭姫命をしへによつて。五十鈴川上に。神宮を立。外宮は。内宮鎭座の後四百八十四年をへて。雄略天皇の御宇にあとを。たれさせたまふ。養老五年九月十一日にはじめて。官幣を。たてまつりたまへるなり。いまに。神祇官にて。これをおこなハせたまふなり

天皇祭

同十六日

○此天皇は。難波村のうぢ神也。當日を御祭禮として。御湯をさゝげ。神樂を奏して。是をまつりたてまつる

今宮祭

同十八日

○當社のまつりは。今日也。天王寺より僧侶きたりて。拜殿にをいて。法事をなし。すなハち天王寺の伶人舞學を奏し。神慮を。すゝしめたてまつり。その〻ち。神輿一社を。ふり出。天王寺の西門まで。還幸したてまつれバ。聖德太子の御輿出むかハせたまひて。その議式あること也

稲荷祭　同廿一日

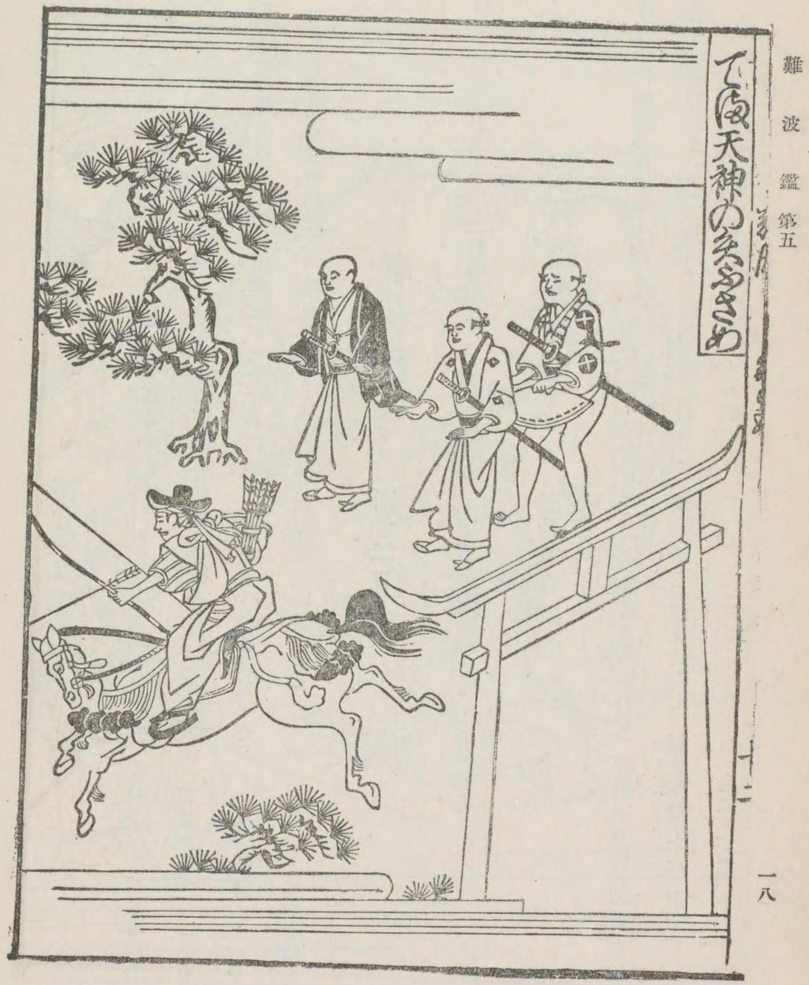
○當社へ。仁德天皇の御廟也。むかしへ。七堂伽藍の地にて。さしもはなやかに。宮殿玉をたれ。瑠璃を鏤といへとも。たびゞの回祿にかゝり。今へ。わづかの宮井にて。物ふりにたるけしき。玉かきまばらにありしを。此とし本社を再興ありて。神の威光をかゝやかしたまふ。まつりへ。當日也。そのかゝは。男舞とて。かゝ難波より。いろ〳〵ねり物をわたし。伶人の舞など。ありしがとも。いつのころよりか。このこともやゝ侍るとそ

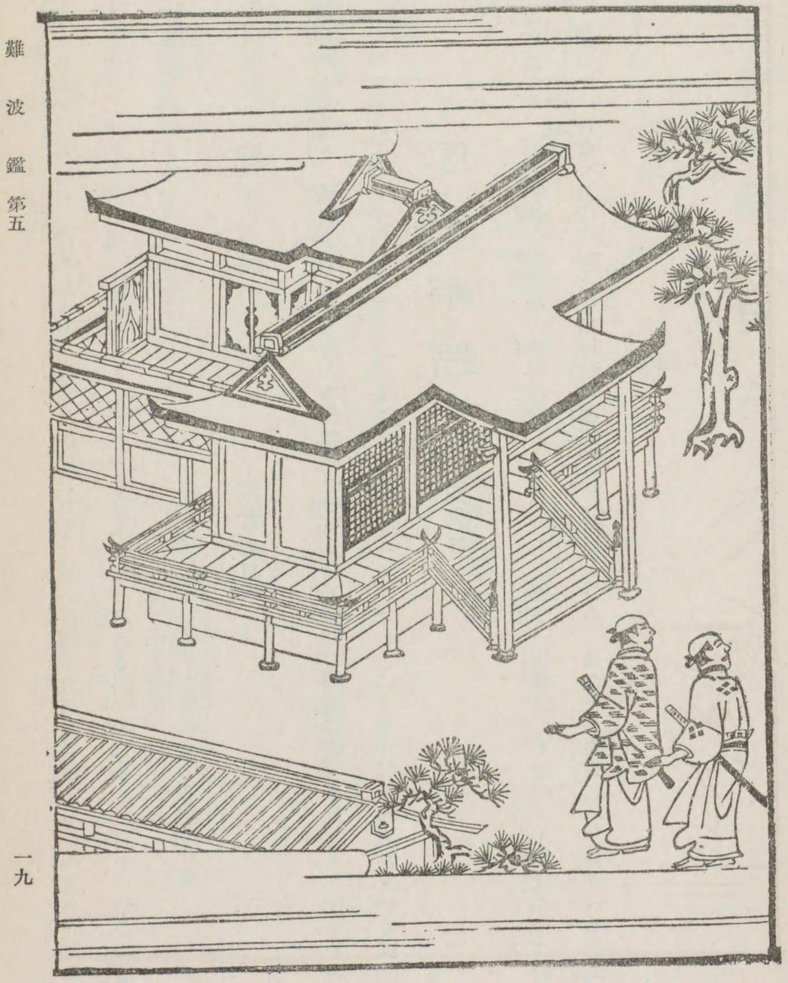
座摩祭　同廿二日

○當日を。御神事とて。十二灯の隙なく。神樂を奏し。氏人の參詣おびたゝしくそ侍る

天滿鏑流矢馬　同廿五日

○此日天神の御神事也。則やふさめあり。是へ天滿天神の門の前に。茶屋あり。茶屋のあるじの式として。とし こと是をつとむ。まづ七日以前より。拜殿にあらこもをもきて。通夜いたし。精進潔齋して。其日にいたれバ。あたらしきなをしはかまに。袖くゝりあかき鉢巻して。かさりたる馬にのり。ゆゝとかふらやを。左右の手にと


天満天神の矢ぶすま



り。社壇をのりめくること三度それより。逸散をかけいだし。宮の前濱手九町を三反のりかへすあいたに。六所に角のまとを立て。是を射る也。手綱をもとらず。手をはなちて。弓ゐる間。逸足かくる馬を。つゐに落さることハ。此天神の御はからひといとたうとし

津村祭

○津村の宮にまふでゝ。神樂まいらするばかり御輿ハまつらす。居祭にて。過る也。されども。氏子をの〳〵。夜宮まいりのためとて。ちやうちんなゝとともして。まつり奉る事。いとにぎやかに社内もかゝやくばかり也

同廿七日

住吉神送

○今日暮かたより。四社明神の御輿を。北の拜殿にふりいたし。神主一族禰宜已下をの〳〵出仕して。おこなひありて。出雲への神をくりののつとをあげ給ふ義式殊勝にそ見え侍る。また十月晦日にハ。神かへりの式此日におなしきと也

同晦日

難波鑑第六

目録

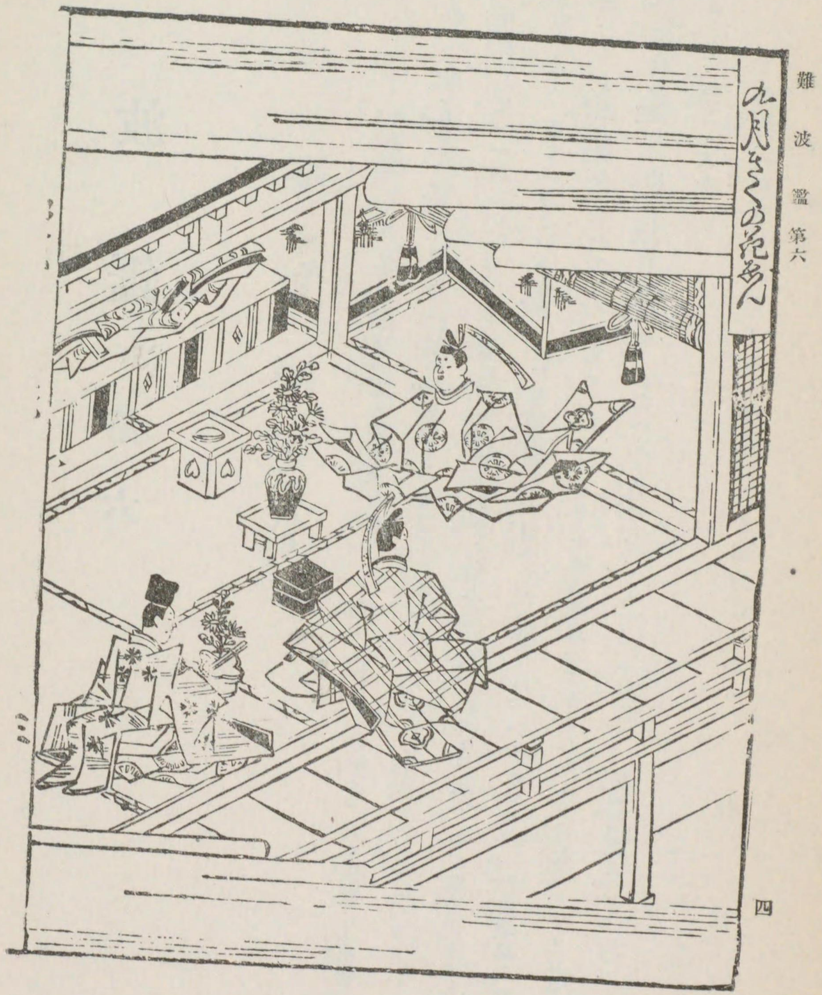
孟冬旬　并無神月
十夜始
惠比須祭
東西本願寺御佛事　并東山
天王寺道祖祭
神宮寺佛名
殘菊宴
日蓮御名講
豕子
御火燒　并内侍所御神樂
納庚申
追儺　并節分大豆鰯首大戟さす事
附白朮燒事

難波鑑　第六

孟冬旬　幷無神月

○十月一日ハ。先御衣がへあり。掃部寮。夏の御裝束を撤して。冬のにあらため給ふ。天皇南殿に。出御ありて。節會あり。是を(孟)冬の旬とハ申也。二獻の後氷魚を。羣臣にたまふとかや。また此月を。かミなづきといふこと。説々不同にして。一決しがたし。ある説に伊弉册尊。崩御し給ふ月なれバいふとにや。また四方の木末ちりすさむ比なりとて。葉ミな月といふ人有。また諸神出雲の大社へくだり給へハ。いふとにや。一曰素戔烏の尊常に軍を發して。天照太神をうちたてまつらむとし給ふにより。太神素戔烏をすかさしめんが爲汝我か子となりたらバ。一年に十月を讓り。出雲石見の兩國を。あたへんと宣ひしによりて。十月にハ。諸神出雲に行て。つかへたてまつると也。此こゝろを

出雲には神在月をいかゝして神無月とや四方にいふらむ　經信



殘菊宴　同五日

○菊花のえんハ。九月九日にて。また殘菊の宴とて。十月五日に。おこなハせ給へると也。是も羣臣詩をつくり。酒をたまふこと。重陽に。ひとしきよし

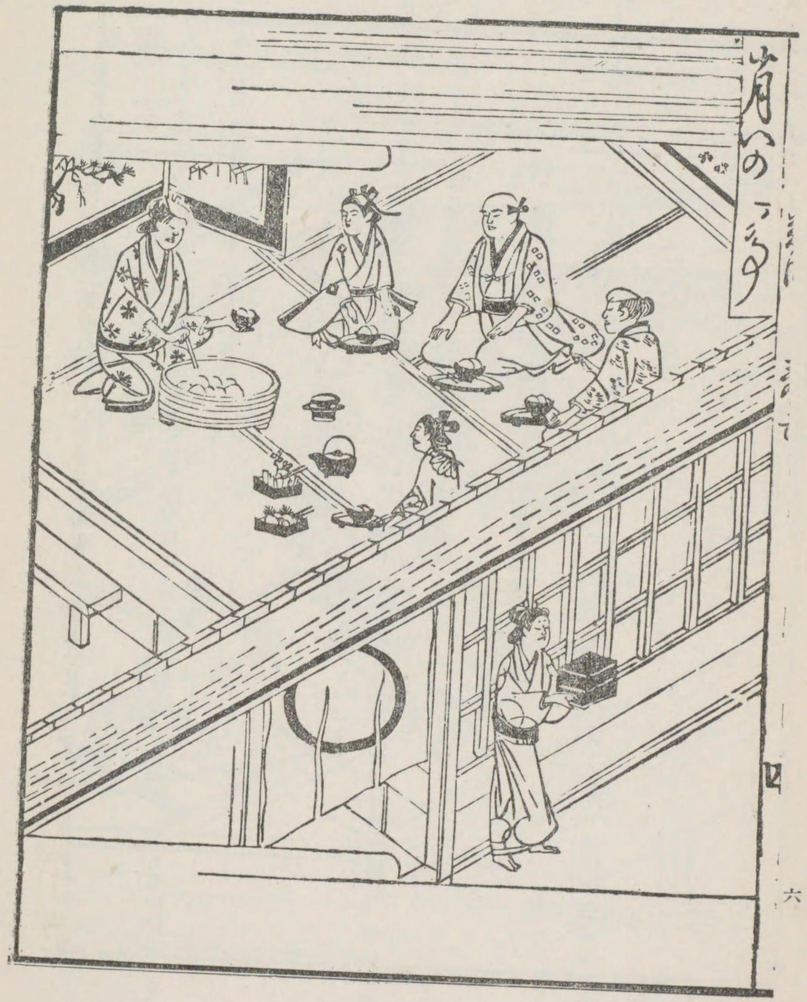
十夜始　同七日

○今日より。十五日まて。寺町の淨土宗の諸寺にをいて。談義念佛等あり。されバ。無量壽經に。千日十夜の語あり。これにもとづきけると也。また鼓音聲經にも。本文ありとそ。

日蓮御名講　同十三日

○惣じて大坂のうちに。日蓮一派の寺々。六十四ケ寺あり。此寺に。盛物。花香。灯明。讀經。談義なとありて。まいりの人多し

夷祭　同廿日



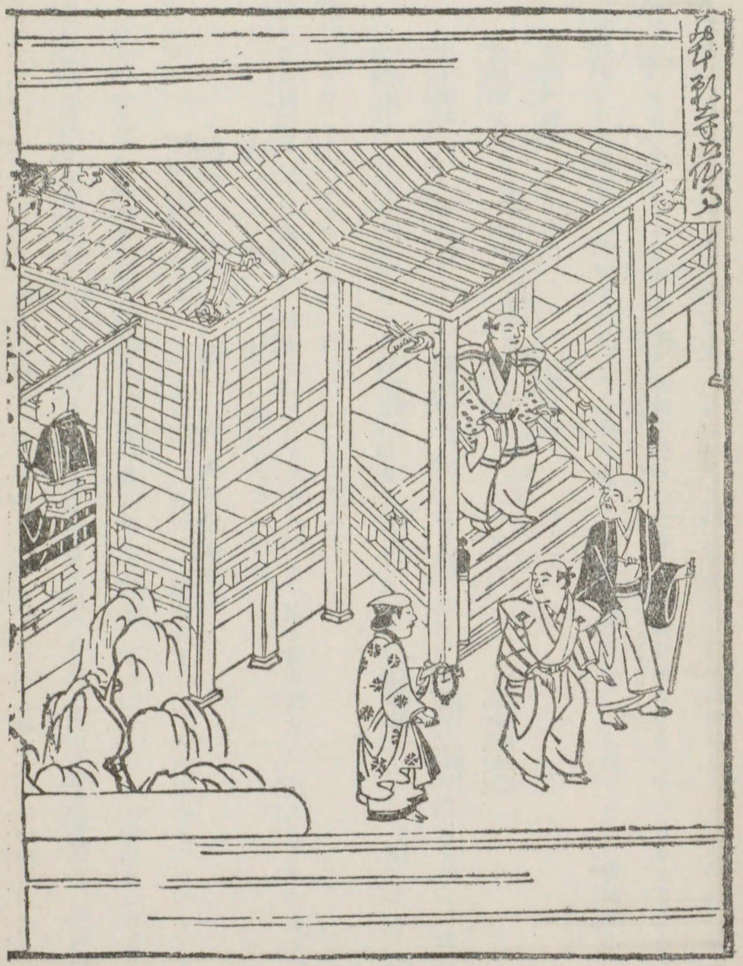
○是其所とさだめたる社なし。夷三郎殿へ。商人をまもらせ給ふ。御神とて。上下の諸商人面々の家に。して。内祭す。夷棚ある家にハ。色々の御供を備ふ。

亥の子　亥の日

○十月亥の日。餅を食すれバ。病なしといふ。されども此ことといつのころよりはじまるとも見べす。延喜式にも。侍れバ。往古より。あることならし。今日内藏寮より。餅をそなへたてまつる朝餉にて。きこしめしたまふ。また此餅を。おけんでうとて。人々にわかちたまへる也。またいのこの説ある書に。猪ハよくあまたの子を。うむなり。さるによりて。女人是をうらやミ。亥の月。亥の日にあたるゆへ。餅をいはふと也。亥はとしこと。十二の子をうむ。一年十二ケ月をかたどる。また閏年には。十三子をうむと也

東西本願寺御佛事　并東山　同廿八日

○としごと。十月兩本願寺の御門跡。大坂の御堂に來臨ありて。開山親鸞聖人の御佛事をとりおこなひ給ふ。其うち。東の御門跡ハ。隔年にくたらせたまふ。廿二日より。廿八日まで。一七日のあいだ近里遠村(歟)よりも。老若男女參詣して。御堂の内は。所せくまておし合。法談を。聽聞して。觀喜のなミだをながしよろこふ。一文不智



のともがら。他力の本願をたのゝ。行住座臥に。彌陀の御名を唱往生すへしとのすゝめの程も。たうとし。また東山佛光寺の御門主も隔年に。くだらせ是も一流の他力眞實の信心をはげゝたし佛恩報謝のためには。稱名念佛をとなへ申せとの。おほせのほともありかたし。あなかしこ〳〵

御火燒　幷內侍所御神樂

○大坂所々の宮社にをいて。當月ハ。神火を。たきてたてまつる。是を御火燒とて。氏人ともあつまりたてまつる。其社々

高津宮	八日	玉造稻荷	八日、
生玉明神	十二日	稻荷明神	十三日
座摩明神	十六日	朝日宮	十六日
神明蠟燭町	十六日	天滿天神	十八日
新御靈	十日	三津寺八幡	十三日
同聚樂町神明			

さてまた神樂とて。諸神の前にて。冬かならすし侍ること。是等をはじめとやいふべからん。抑神樂といふハ。天照太神の岩戸をさして。こもり給ひし時。諸神の祈申されけるに。鈿目命まさきのかづらをかざしとし。ひかゞを。手すきにして。うたひまひ。庭火をたきしかハ。天照太神天の岩戸を出給ひしより。諸神此ことこのゝ給

ふ。今も內侍所にて。行ハるゝ。御神樂の事にて侍る也。是ハ一條院の御時よりはしまる也。まことに神樂こそ。なまめかしくおもしろけれといへるも。實とおもひ出られ。其人もなつかし。

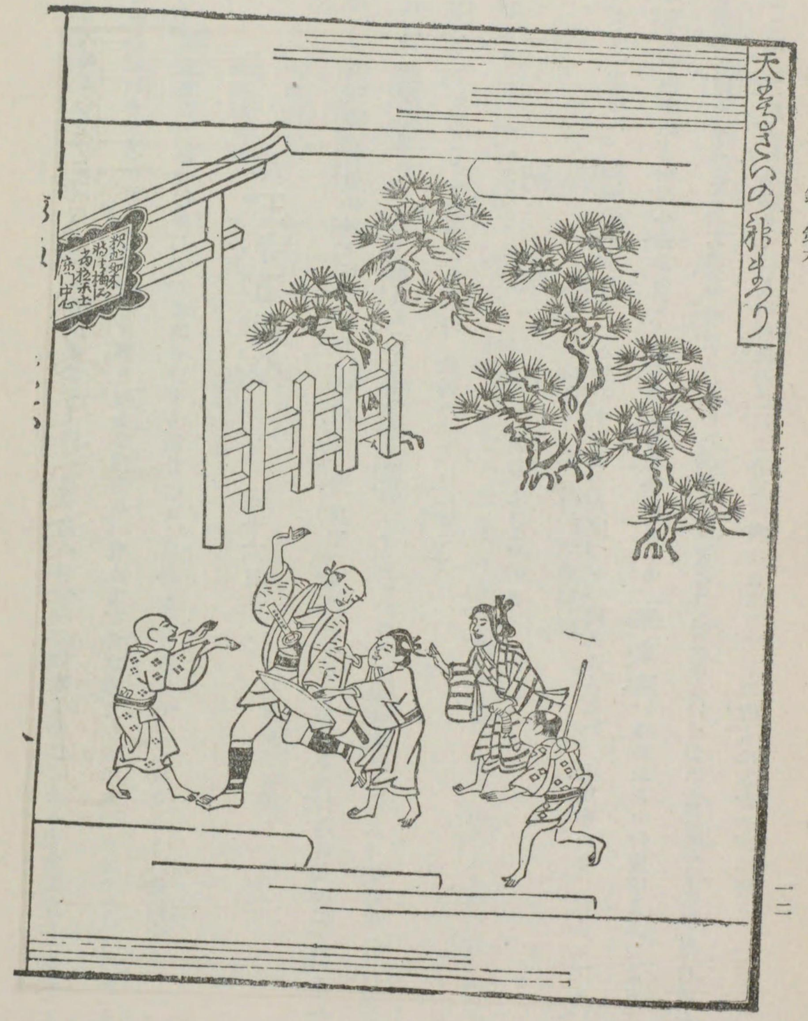
年中行事歌合　久堅のあめのむかしのかゝあそひ今も雲井にうたふなるかな　貞世

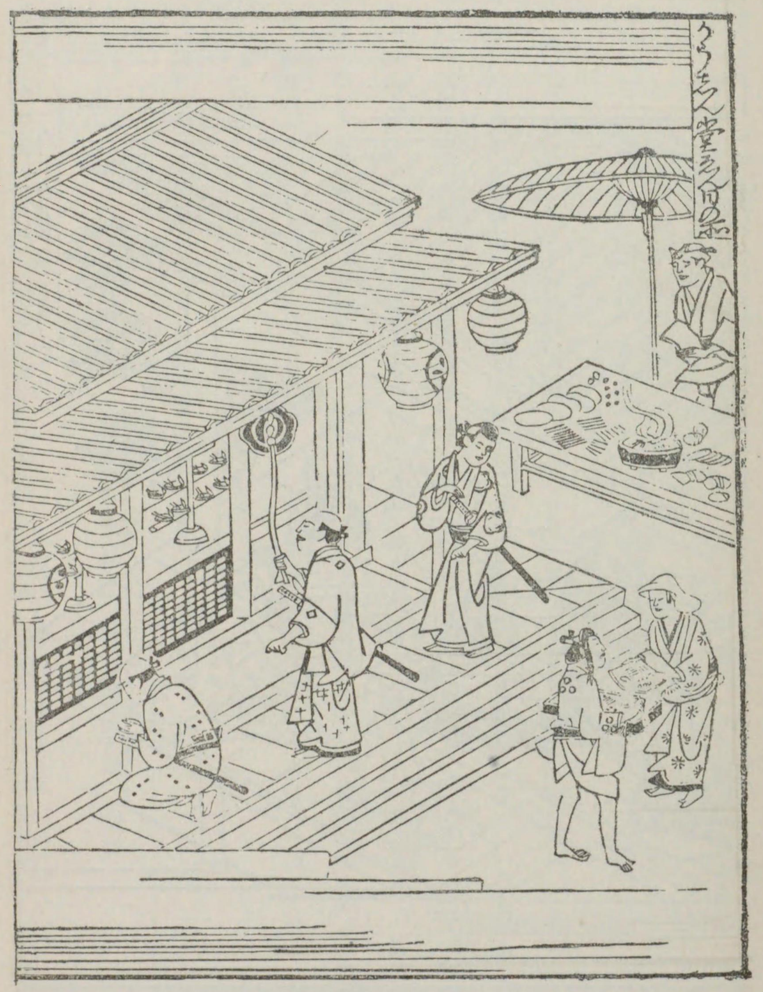
天王寺道祖祭　同十六日

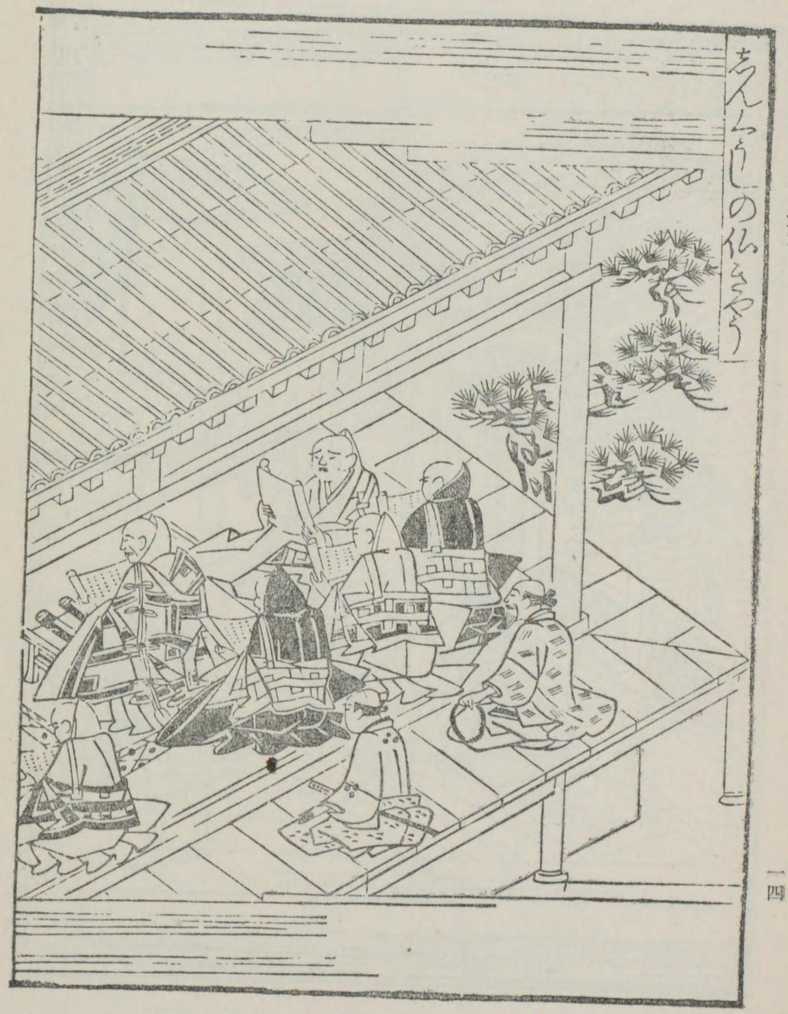
○此日ハ。天王寺の村里の辻々に。わらハべとも。集居て。塞の神をまつるとて。行還の人々に。錢をとる出ざゝれば。此所を通さずして。剩其人にとりつき。難儀させしとかや。是を道祖祭といふ。是道祖ハ。道の神まつりにや。今も此ことをゝりたる人ハ。此日ハ。こゝに來らす

納庚申　かのえさるの日

○天王寺の庚申ハ。諸國の本寺也。一とせのうちに。六度づゝ。潤あるとしハ。七庚申あり。なにゝても。所願ある人。一色をハ。かなへ給ふとて。參詣の人々初庚申よりも。願成就いはゐおさめの庚申まふでよと。羣集して。十二燈々々とよバる聲も喧く。七いろの菓子々々とうるこゑもいそがハし。さてまた。今日夜をねざることは。三尸天にあがりて。人の善惡を告によりて。夜をまもりて。ね侍らぬとかや。


天皇さまの祝ひまつり





年中行事歌合　出やらてなをそやすらふかのえさる蘆分を船こきやかぬらん　爲郡朝臣

神宮寺佛名

同十九日

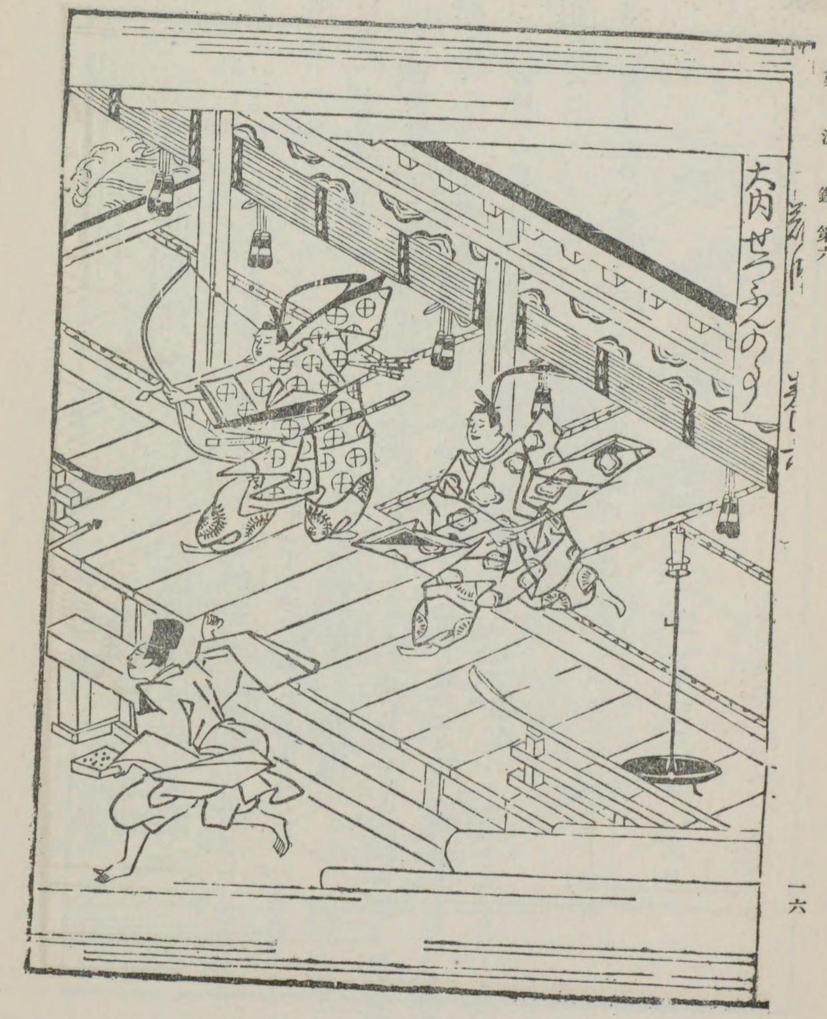
○當寺にをいて。むかしより三千佛名經を。誦し給ふとかや。是則住吉明神の御法樂の爲に。とりおこなハるゝと也。されハ。禁中の御佛名ハ。十二月十九日より。廿一日まで。三ケ日也。あるひハ。一夜も例あり。此佛名といふハ。三世諸佛の名號をとなへて六根のつミを滅する心也。まことに佛名經に。とかるゝ所の功德はかりなきにや。寶龜五年。十二月より。はじまる。承和のころハ。としごと　佛名三ケ日の間諸國にて。殺生禁斷のよし格に見へたり。また釋の靜安と申せしハ。比良の山にて。十二佛名經をよミて。禮拜修懺し給ふ。其聲帝闕にきこえ。諸國のあいたにも。きくものあり。是によつて。勅して。僧官をたまハりけると也。くわしくハ。元亨釋書に見へたり。

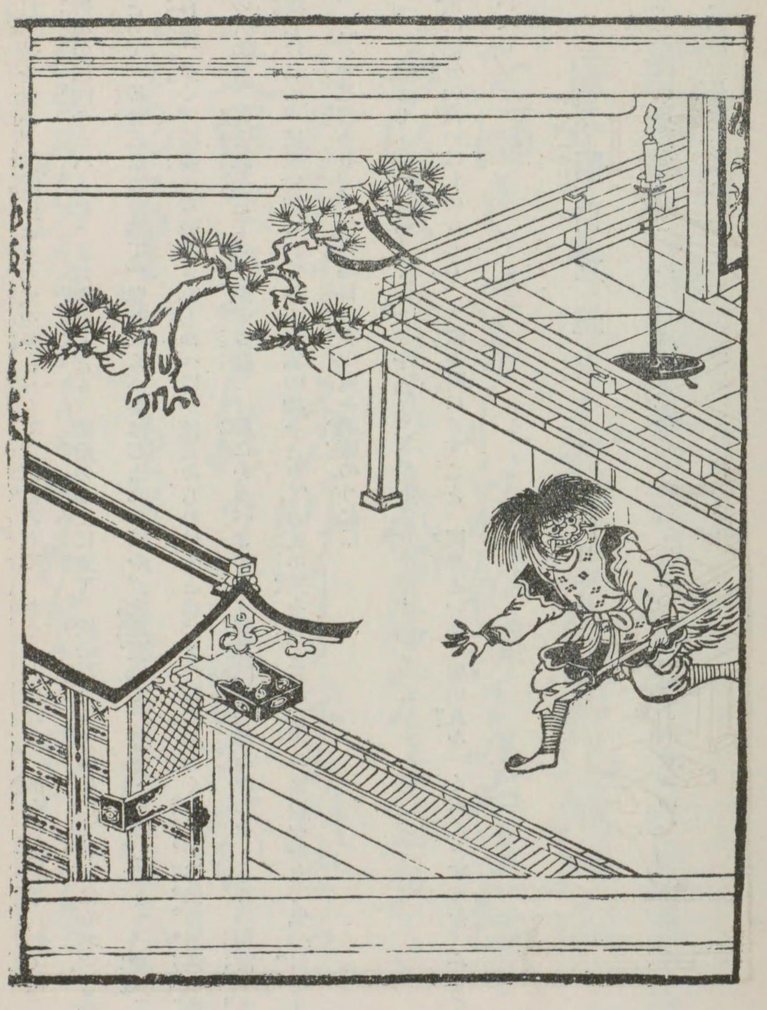
六百番　河竹のなひく葉風にとしくれて三世の佛の御名をきくかな　定家

追儺

并節分大豆鰯首大載さす事　晦日

○禁中にハ。十二月晦日に行ハる。今日ハなやらふ夜なれバ。惡鬼の夜行するゆへに。陰陽寮さいもんをよミて


大内せつふんのり



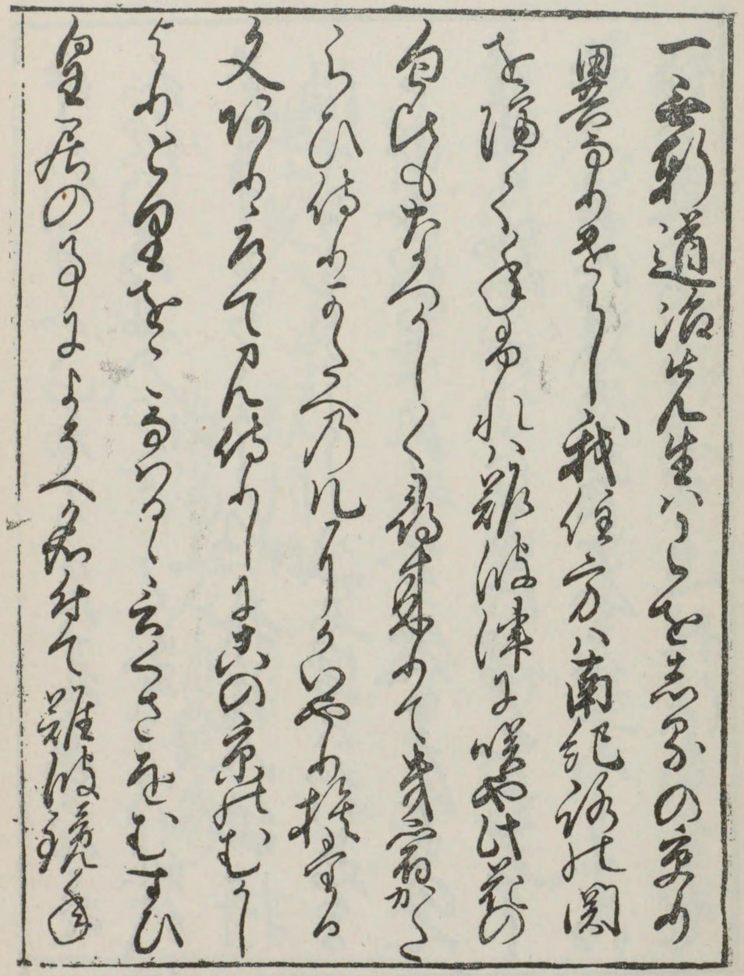
上卿以下是をおふ。御所にともし火を多ともして。四目ありて。おそろしけなる。面をきて。手にたてほこをもて。内裏の四門をまゐる也。また殿上人ども。御殿のかたに立て。桃の弓よもきの矢にて。いはらふ。これらをかたとりて。節分にまめうちて。鬼をはらふ事はじまれるにや。此内裏にて。鬼をゝれしことハ。慶雲二年十二月百性多く。疫癘になやまされしゆへに。はじめられけると也。また鞍馬のおく僧正が谷御菩薩池の邊に。方丈の穴あり。藍婆惣王とて。二頭の鬼出て。都にいるべきよし。毗沙門のつげありしをくらまの別當宇多の帝に。奏しけれハ。法家に仰られて四十九家の物をとりて方丈の穴を封じ三石三斗のまめをいりて鬼の目をうちしよし。ふるせし書あり。十二月晦日の夜の鬼を躬恒のうたに

鬼すらも都のうちとゝのかさをぬきてや今夜人にゝゆらん

今の世に節分の夜いはしのかしら。大戟を軒にさすこと。聞鼻といふ。鬼の人を。くハんとするを。ふせく術なりといへり

附白朮焼事　同晦日

○おなしく此夜白朮をたくことハ。白朮ハ風氣をさる藥にて侍るゆへ。羣薫あしきがゆへに。疫癘の神の夜行する夜なれバ。是をたきて。をそれしめむが爲にて。侍ると也



中行の中に元来家筋を
知らぬ人はなきく玉津島代
々歌道の編輯
を略して家業を修
集して知るべき人物の
なき故に生涯を閑
居を楽業とし
近世歌道中興

辞世
梅の海
婦人小倉百人歌ひ
菊四郎の
して老人業を後世
延享八申歳月日
南湯山人自菴舟

難波十二景

大坂本町五丁目御堂筋角
小濱屋七郎兵衛板
同東
近江屋次郎右衛門

解題

一　『難波十二景』は、山本洞雲の著。延寶四年丙辰（我が二三三六　西暦一六七六）の開板。稀覯本として讀書子の話頭に上る珍書です。本叢書刊行會では、夙に此の書が京都の富岡家に祕藏されてゐることを聞いてゐましたので、曩に本會顧問新村出博士を煩はして同家の快諾を得、本冊の中に收錄することゝなつたのです。殊に卷頭の第一丁には、故鐵齋畫伯が愛用の［鐵老齋］と刻した藏印のある此の珍書を、僅々數頁のうちに活字として組み上げることは、いかにも不本意と考へられ、かつは本會の旨趣として、成るべく原本の面影を傳へたい希望の下に、全部を凸版とすることにし、その製版にも及ぶかぎりの注意を拂ひました。

一　原本は天地八寸八分、左右六寸の大本です。されば、これを全文凸版に取るに際し、原本の寸法のまゝにては、菊判一頁の中に、その半丁を收容することが出來ません。やむなく十分の六の大きさに縮め、力めて原本の味ひを保存することに留意いたしました。

一　著者山本洞雲は、京都の人。夙に文筆に親しみ、二十餘歳にして『洛陽名所集』の著があり、後、浪速に來りて、家塾を開き、諸生に敎授してゐました。延寶四年、この『難波十二景』を著は

した時は、四十一二歳の頃でした。その『十二景』の巻末に、『――予客此地亦年――』と書いてゐるのを見ますと、少くも三十餘歳で浪速に來り住んだものと思はれます。そして教授の餘暇には杖を近郊にも曳き、興到れば吟咏みづから樂しんだものでせう。延寶四年といへば、新町の廓に、夕霧が全盛を唄はれてゐた頃です。その時代の大坂を、暇ある毎に、そこ、こゝと、そゞろあるいた著者は、いつのほどにか浪速に於ける十二景を選び、これに七律一首づゝを添へ、一つ一つその詩の解を、みづから試みたのが、この『難波十二景』であります。

難波十二景

波橋晩景

浪浸長橋二千弓　春陰未霽是何虹
金城卷雨吞斜日　碧殿穿雲縋太空
千店閭閻撲地列　一條周道到京通
年々眺望思無盡　南國魚塩壓洛中

難波橋ノ上三テ晩方二四方ノ躰ヲ見ルコトヲ詠ス○一二ノ句コノ橋ノ長サダケ二百ハカリモ有ラン浪ニヒタレテ横リタルハ虹ノ如ニ見ル虹ハ雨ノ晴レタル時ニ出ヘキニ陰リタル空ニ出タルハ是ハイカナル虹ソト也此両句ハ橋ヲホム阿房宮賦云後道行空不霽何虹○三四ノ句此橋ヨリミレハ金

鉄ヲノベタル如ナル城フル雨ヲ巻ハラスヤウニテタ日ノ指入タルハ其勢日ヲ呑タルヤウニ見ユ又碧殿ノ高キ一片ノ雲ヲ穿テ天ヨリ釣タル如ニ見ニ縄トハ縄ニ取付テサガルヲ云尤傳ニ絶而出ト書リ此両句ハ城墺ノ堅固ナルヲ云○五六ノ句市町ヲ見渡セハ千万ノ家不寸ノ地ヲモアニサス作リ連タリ店ハミセダナトヨム閭閻ハ人ノ住処ヲ云文選ニ閭閻且千トアリ勝王賦序ニ云閭閻撲地又一筋ノ大路是ヨリ京ニテ通レテ貴賤皆此路ヲ行更ニ二ガイナレ一條ハ一筋ト云義也此両句ハ市町ノニギワイ天下一統ニメ政道正シク遠乱ナキヲ云リ○七八ノ句年比此難波ニ住レテ此橘ノ上ニ来テミルニ見テモくアカヌ此國ノ繁昌ハ洛中ニモ一サランカト也魚塩ハ万ノ商買ノ丁艘トハ一サルコト也古人ノ梅ノ詩ニ清香艘蘭麝○此詩賊ナリ賊ノ躰ハ見タル処ヲアリノくト何ノ子細モナク作リ出ヲヨレトス残ル十一首モ皆賊也○此詩第五ノ句撲地列ノ三字下三連ナレ共是律詩ノ一躰也杜少陵ノ七言律詩ニ

見タリ先輩此格ヲ用ヲル

堂島飛雨

滿江飛雨晝濛濛　山墺入煙万景収
休釣飯來数點艇　洗翎増擊一双鴎
坐中爽氣消炎熱　村外清流報肅秋
目暮朦朧看不見　忽從漁火認汀洲

堂島ノ雨中ノ景ヲ詠スル也○一二ノ句此堂島ノ江村一面ニ雨フリ來テ晝ナレドモ一ツクロニ成レホトニ山モ里モ煙モ皆カクレテ万ノ風景見ヌナリ濛濛ハ風雨ノ負此両句ハ雨ノフリ出タル躰ヲヨメリ○三四ノ句雨フルホドニ釣スル舟ドモ皆釣ヲヤメテ歸ル又川ニ浮タル鴎ノ飛アガテユクハ雨ニテ翎ヲ洗ナリ矛盾

原賦ニ云増撃而去○五六ノ句半中モ雨ニテ炎熱ヲ忘タリ爽氣ハサハヤカナル氣ナリ又村外ニ流ル川ハハヤ秋ヲ知スル也青秋ハヤヽサムキ秋ヲ云報トハ知スルコト也○七八ノ句トカクスルホトニ日モクレヌ弥クラク成テ今ヽニテ見タル舟モ鴎モ川ノ流モ皆ウセテ何ノ分モ見ヘスヽツクロニナリレ処ニ忽ニ漁リ火見タリサテハアノ火ノアタリ汀洲ニテ有ヨト思ハカリ也認トハウレナハヌ義ナリ

長柄春陂

漠漠長堤淡淡天　麦農語泰與留連
刃鞋踏破滿蹊緑　孤帆中分両岸煙
野憤相依眠織草　春禽戯集浴清川

衆遅幸遇康歌月　一醉何妨落照前

長柄川ノ陂ニテ春遊スルヲ詠ス○一二ノ句漠々ト長クツヾキタル堤ノ上ヘ出レハ寒クモナク熱クモナキ淡々タル春ノ天氣ナリ麦ヲ作ル農人モ此堤ヲ通ル共ニ打ツレテユク此者カ云ケル今年ハ世モユタカニシテ麦モヨク出来タリ妻子ヲモ心安ク養フヘカンメ山ナト物語スル聞ツヽ行ホトニアソコ麦ニ立ヤスラフナリ留連ハ立ヤスラフコト也○三四ノ句此堤ノ蹊ヲ行ホトニ春草ノ緑ヲヨレゲモナク踏ヤブル也又此川ニ煙ノ立コメテアル其ヽヽ中ヲ帆カケ舟ノ通ルニテ煙ヲ両ノ岸ヘニツニ分タル也此両句ハ遊賢ノ躰ヲ云○五六ノ句此堤ニ野飼スル犢ハ一処ニ集テ繋ナル草ノ上ニ卧テ居也又春ノ禽ハタハフレ集テ此清キ川水ニ浴スル也織草ハ草ノ柔ニシテ織モノヽ如クウツクシキヲ云ソ盧仝ノ詩ニ陽陂草軟厚如織ト作レリ此両句ハ此

処ニスム鳥獸モ其処ヲ得タルノドカナル躰ヲ云○七八ノ句ヤウ〳〵年老タル比カヽル太平ノ御代ニ逢タルコソ幸ナレト堤ノ上ニ打ヒロゴリテ竹筒取出シ酒ノミ酔シテ日ノ暮ヲモ忘レテ遊ブ何カ苦シカルヘキ道ニサヘ背スヽハ遊バイデハ康歌ト云ハ昔堯ノ天下ヲ治玉シ時天下ノ治リタル躰ヲ知シメサントテヒソカニ康衢ニ出テ聞玉シニ童トモノ歌ニ立我丞民莫匪爾極不識不知順帝之則トウタヘリ又一人ノ老人ノ歌ニ日出而作日入而息鑿井而飲耕田而食帝力何有於我哉トウタヘリ是ニヨリテ天下ノ太平ナルヲ康歌ノ日ト云也衰運ハ年ノ老タルヲ云

淀川長流

逝者如斯一逝川　碧琉璃色洗青天
岸横南北百餘里　流潤西東幾万年

鰺鰺游鱗衝浪躍　輕輕泛鳥傍隈眠
世波更逐風波嶮　多少征帆祖狄鞭

淀川ノ水ノ流ヲ詠スル也○一二ノ句此川ハ昔ヨリ今ニ至テ流テ舍ラズ論語曰逝者如斯夫不舍晝夜上ノ逝者ノ字ハヒロク指テ云下ノ逝川ノ逝ノ字ハ川ヲ指テ云リ字ハ同ケレ𪜈心別ナリサテ此川ノ水清シテ碧琉璃ノ如ナルガ青天ノ色ト一ツニ成テ天ヲ洗フ如ナリ于謙ノ詩ニ碧琉璃滑淨無塵ト作レリ此両句ハ川ノ躰ヲホム○三四ノ句此川ノ岸ハ南北横ハリテ百里ハカリモヤ有ラン又此川ノ流ハ西國東國ノ通路ヲナシ國ヲウルヲスコト昔ヨリ允万年ト云コトモ知ヌ也此両句ハ此川國ノ用ナルコトヲ云ナリ○五六ノ句此川ニスム魚ハ浪ヲツイテ躍リアカル鰺〻ハ魚ノ尾ヒレヲフツテハタラク貝詩經云鱣鮪鰺〻又此川ニアル鳥ハ水ノ隈ニソフテカルヽト波ニ浮テ眠

ル也限ハ水ノヨドミ也此両句ハ川ニスム魚鳥モ其処ヲ得タルヲ云○七八ノ句此川ヲイクラトモ知ヌ舟我サキニト京ヘ上ルヲミレハ中々世ヲ渡ル波風ハ川ノ波風ヨリ嶮シ世ノ中ハ安クハ渡ラレヌト也太平ノ世ニ居テ嶮ヲ忘レヌハ君子ノ心也祖狄鞭ト云ハ晋ノ劉琨ト祖狄ト常ニ武勇ヲ争テ互ニ先ヲカケントハケム劉琨カ云ケル我枕戈待旦只恐祖狄先我著鞭是ヨリシテ何ゴトニテモ我ヲトラレト先ヲ争ヲ祖狄鞭ト云古人赤開ノ梅ノ詩ニ到春不発祖生鞭ト作リ

駒嶠晴雪

何處空山戦王龍　飛鱗轉盡夕陽春
風揺縞練三千丈　月照瑤華幾万重
無数林梢揔銀樹　許多丘壑委花峯

凜然一望寒於水　特地難疑在月中

生駒山ノ雪ノ晴タル景ヲ詠ス嶠ハ山也○一二ノ句イヅクトモ知ス山ノ上ニテ玉竜ノ戦ヨト是テ竜ノ鱗ヒタモノ飛ヲツル見ウチニハヤ鱗モ飛ツクレツ雲モハレテ入日ヲツル也雪ヲ玉竜ノ鱗ニタトヘ雪ノフリヤムヲ鱗ノ轉シ盡スト云ナセリ張元ノ雪ノ詩ニ戦龍玉竜三百方敗残鱗甲満天飛ト作リ生駒山ノ雪ナレトモ何レノ処ノ山ヲト云ルハ作者ノ意ナリ一ノ句ニ雪ノフル射ヲ云カケテ二ノ句ニテ其ニ雪ノ晴タル射ヲ云開合叶リタ陽春トハ米ヲウスツク杵ノ下ル如ク日ノ落ヲ云○三四ノ句サテ雪モハレツ此山ヲミレハ其高三千丈ハカリモ有ラシヲ白縑ヲ以包メルヤウニ見ルヲ風吹テ山モウコクヤウニアル也縞練ハ白キ子リキス也文選雪ノ賦ニ云万頃同縞又タ日ノ此雪ヲ照ヲミレハ光万重トモレラス降ツミタル瑤ノ華ヲカヽヤカス也瑤華ハ雪ノコト也

古人ノ詩ニ折以代瑤華ニ○五六ノ句数モシラヌ林ノ梢ハ惣テ銀樹トナリイクラトモナキ丘壑ハコトゴク花サキタル峯トナル也秦韜玉ノ詩ニ銀樹長開六出花○七八ノ句此雪ノ後ノ景ヲ詠レハ凜然トメ身ノ毛モ立ホト寒キ也サムサハサムシ何クモ二ツシロニハアリ晝ナレトモ其ニ、月夜カトウタカハル、也特地ハ即今ト云義也

剛岳朝霞

絮絮煌煌斷又連　非雲非霧也非煙
一行紅綺驅風畔　千丈金光泛旨邊
霜与公羊流筆底　飛齊孤鶩落簾前
須臾変化都無跡　猶見餘暉映遠川

金剛山ノ朝ノ霞ヲ詠ス○一二ノ句此山ノ上ヲミレハ絮々トアサヤカニ煌々トアキラカナルモノ斷カトミレハ又連ル雲モアラス霧ニモアラス煙ニモアラス是ハイカナルモノソト也霞トハ見レカ見レカヤウニ云ナスハ作者ノ意也○三四ノ句一トヲリタナビイタルヲミレハ紅ノ綺ヲ風ニサラスヤウ也畔ハホトリトヨム付字ナリ杜少陵ノ詩ニ落霞沉綠綺ト作レル綺ハヲリモノ、キヌ也又千丈ハカリ長クタナヒイテ朝日ニ映レ金ヲ流セル如クニノキニミユル李青蓮詩ニ朝霞動金光○五六ノ句此霞ノ霜ニタルハ公羊子ノ筆勢ヲアラハス也三塲文海ニ云公羊ノ傳經如暮霞朝雲霜于青空又コノ霞孤鶩ノ島ト齊ク飛テ我簾ノ前ニテモ落來ル也滕王閣序ニ云落霞与孤鶩齊飛落霞ハ虫ノ名ナリト云新說アレ𪜈古說ハカスミノユト也○七八ノ句如此ノ霞須臾ノ間ニ変化シテ跡モナリナル猶其アニリノ暉殘テハルカナル川ノ上ニ水ニ映シテアル、ニテ也高唐賦ニ云須臾之間変化無

鄭韋蘋列ノ詩ニ餘霞聚遠州

遠浦客帆

雲開遠見客船班　片々飛馳杳靄間
散似池蓮轉空水　行如朝雁度煙山
秦人帆向潮頭落　漢使槎從天際還
名利風波嶮於海　何特透破万重関

遠キ浦ノ旅ノ舟ノ湊ニ入ヲ詠ス○一二ノ句海上ニ立ツホフタル雲モヒラケテ日和ナルホトニ客ノ舟我モ〳〵ト酌ナル煙霞ノ中ヲハセ來ル也謂ハ煙霞ノ立コメタルヲ云○三四ノ句此舟ノバラ〳〵ニ來ヲミレハ池ノ蓮花ノ水ニチリ浮タルニ似タリ又ツラナリテ來ヲミレハ北ヨリ度ル雁ノツレ飛テ山ノ腰ヲ度

カ如シ韓文公詩花開十丈藕如船郡國志云舟航如鳥雁○五六ノ句秦人ハ秦ノ徐福ヲ云不死ノ藥ヲ求ト云テ蓬萊山ニ行ケルカ遂ニ歸サルコト史記ニ見タリ漢使ハ漢ノ張博望ヲ云天竺ヘ使ニ行トテ槎ニ乘テ天ノ川ニ至リシコト漢書ニ見タリ此句ノ意只今舟ノ帆潮サキニ向テ落來ルハ秦ノ徐福ニテモヤアラン又張博望カ槎ニ乘テ天際ヨリ飯ニテモヤ有ン○七八ノ句如此ノ舟万里ノ風波ヲシノキテ來ルハ名利ノ爲ナリ名利ノ風波ハ大海ノ風波ヨリ嶮シ何レノ日カ名利万重ノ関ヲ打ヤブリテ安条ノ道ニ入ヘキノト也

玉池白蓮

滿池蕖藕濯漣漪　真立亭亭自不枝
充使周郎說君子　豈將張六汗清姿

雨晴渕客珠浮淚　雲散陽臺月啓眉

適來何処問西施

彷彿鑑湖三百里

生玉ノ池ノ白蓮ヲ詠ス○一二ノ句此池ニサキミチタル蓮花ハ池ノサヽナミニテ洗出シタル也蓮花ハ蓮漪ハサヽナミナリサテ此花ノ莖ハ直ニシテ枝モナク天性スナヲナル花ニテ亨々トメキヨクヒル也愛蓮說云濯清蓮而不妖中通外直不蔓不枝亨亨淨植云云○三四ノ句周即ハ周茂叔ヲ云蓮ハ花ノ君子ナルコトヲ愛蓮說ニ說リ張六カコトハ唐書ニ見タリ双ナキ美男ニテ則天皇后ニ寵セラレシモノ也楊貴妃思張六ヲホメテ人言六即似蓮花非也正謂蓮花然矣即ト云シ美男也此句ノ意蓮ハ花ノ君子ナルニ何ト思張六ニタトヘテ蓮ノ清キ姿ヲ汚サンヤ○五六ノ句渕客ノコトハ博物志ニ見タリ海中ノ鮫魚ガ人ニ化テ絹ヲ賣テ歸サヽニ泣テ淚ニ珠ヲ出シテ主人

ニ与シ文選ニ渕客慷慨而泣珠ト書リ陽臺ノ月ノコトハ神女ノ賦ニ見タリ神女ノ賦ニ云神女婉ノ進也皎若明月ノ舒其光云々此句ノ心ハ雨ノハレタル後花ニ露ノヲキタルヲミレハ渕客ノ淚ニ珠ヲ浮タルモ角ヤラン又白キ花ノ開タルアリサマハ陽臺ノ雲ハレテ神女月ノ如ナル顔ヲアラハシ眉ヲヒラキタルヤラントモ思也○七八ノ句李太白ノ呉歌ニ鑑湖三百里蕖蓄荷花五月西施採人看隘若耶ト作レリ此池ノ蓮花ヲミレハ鑑湖三百里ノ風景ニサモ似タリサレト西施ハ見ズ何ノ処ニ向テ西施ヲ問ント也彷彿ハソレカアラヌカトヨム相似タルヲ云適來ハ即今ト云義ナリ

觀臺素月

碧天雲盡淨無埃　素月迴披金匣來

盈闕却隨人所見　晦明偏任月離開

山河影入鏡中轉　造化梳於輪上回
仰視清宵纔數次　恍然高卧玉盤臺

觀音堂ノ舞臺ニテ秋ノ月ヲ見ヲ詠セリ素月ハ秋ノ月ヲ云○一二ノ句一天雲ハレテ空ノ色ミドリニケガレヤ埃トハケカレノコトナリ此時金ノ匣ノ蓋ヲ開テ秘蔵シケルモノヲ取出ス如ク月出タリ○三四ノ句凡ソ月ハ銀丸ノ如ニメ光ナシ日ノ光ヲ受テ光トス依テ日ノウツル方ハ光アリウツラザル方ハ光ナシ毎日朔日ゴトニ日月會ス月ハ下ニ日ハ上ニ動ル依テ下界ニ月ノ光見ズ日ハ陽精ニテ早クメクル月ハ陰精ニテ遲クメクル二日三日ニ至テヤウヤク日ト月ト離開シテ月ノ光鉤ノ如クニ見ル是ハ人下界ニ在テ月ヲ横ニソバタテヽ見ル故ニ鉤ノ如シ日ノ真向ナル方ハ二日三日ニモ滿月ニ見ルサテ漸々ニ日ト月ト遠クナルニ從テ人下界ニ在テ月ヲロクニ見ル故ニ次第ク

ニ滿月ヲ見テ十五日ニ至テ日月東西ニ相望ミ人其マヽ中ニ在テ月ノ真向ヲ見ルホトニ十分ノ滿月ヲ見ナリ如鏡シテ十六日ヨリ又次第ク二横ニ見ルニ隨テ半月ホノク成テ晦日ニ至テ月ノ光尽スサテ朔日以後ハ半月ノ反ノ方西ニアリ十六日以後ハ東ニアリ日ニ向テ光ヲ受ル故也月ニ盈闕ハナシ只日ノ光ノウツリヤウト人ノ見ヤウニ隨テ盈闕アリ是沉存中ノ論スル処雲谷老人是ヲ正論トセラル此句ノ心月ハ人ノ見ヤウニ隨テ横ニミルトキハ闕真向ニ見ルトキハ盈又晦日ニハクラマリ十五日ニハ明ナル偏ニ日ノ離開ニ任スルナリ○五六ノ句月中ニ黒影ノ見ルハ山河ノ影ナリ山河ハ世界ノコト也山ト河トノコトニハアラス其空明ナル處ハ海水ノ影ナリ是漢儒ノ論スル處也雲谷老人是ヲ正論トセラル千歳ノ惑ヲ明ニストヽ云リ其外樹ノ影兎ノ説ハ皆異端妖妄ノ説ナリ此句ノ意世界ノ影月中ニウツリテ月ノ東ニアルトキハ影モ東ニアラハレ西ニアル時ハ西ニアラハル月ニ從テ轉ス鏡

中ハ月中ナリ月ヲ玉鏡ト云文陰陽造化ノ枕モ月ヤ輪ノ上ニ於テメクル月ユケハ日來リ晝來レハ夜ハ去ル畢竟月ノ去來ヲ以テ陰陽ノ造化ヲ知也○七八ノ句此臺ヨリ仰テ霄ヲミレハ纔ニ數尺ヲヘタテ手モトヽクヤウニ見ル月ノサヘタル夜ハ天近クミユル也仍テ心モウカリトナリテ思コトモ慮コトモトクウチフセリテ月ヲ詠ルニテ也怳然ハ心ノウカリトナル貞杜少陵ノ詩ニ江月去人只數尺ト作レリ玉盤臺ハ月ヲ詠ル臺ヲ云ナリ月ヲ玉盤ト云李青蓮ノ詩ニ少ノ時不知月呼爲白玉盤

南海也雲

鵬摶南溟翅未歛　洋洋瀁瀁又菜菜
粘天銀浪不風漲　撐月奇峯疊雪輕

元是無心自出岫　何胡有意造陰晴
只因過入陽臺夢　枉被人呼巫女名

南海上ニ也リタル白雲ヲ詠ス○一二ノ句大鵬北冥ヨリ南溟ニ摶テトブ其翅イマタヲサマラズ羽ヲヒロゲテ井ル也雲ト云スレテ鵬ノ翅ヲヒロゲタルト云ナス也南溟ハ南海ナリ洋々ハヒロコリタル貞瀁々ハタヽヘタル貞菜々ハ輕白ノ貞詩經ニ菜々白雲トアリ太鵬ノコトハ莊子ニ見○三四ノ句此雲ヲミレハ白浪ノ如ニシテ天ト一ツニナツテ漲ルナリ銀浪ハ白浪ノ一也常ノ浪ハ風ニヨリテヲコル此浪ハ風モフカヌニミナキル又部ニキ峯ノ如ナルガ月ヲサヽハテリソヒヘタルハ雪ヲタヽンタル如クニツ白ニ見ル常ノ雪ニカハリテ輕ク見ル也楊都賦云浪勢粘天陶淵明詩夏雲多奇峯○五六ノ句此雲ハ元來無心ナリ只天地ノ氣ニ任テ自ラ岫ヲ出來ル或ハ晴或ハクモルモ

更ニ意ナシ既去來賦云雲無心出岫○七八ノ句陽臺ノ夢ノコトハ昔楚王陽臺ニ遊テ怠テ晝イネラレケル夢ニ一人ノ女來テ我ハ巫山ノ神女ナリ朝ニハ雲トナリ暮ニハ雨トナル巫山ノ雲ノ精ナリ王ヲナクサメンタメニ來ルト云楚王夢中ニ此女ト契ラレシト云コトヲ高唐賦ニ書リ此詩ノ心雲ハ元來無心ノモノナルニ神女ト成テ陽臺ノ夢ニ入テ契リシト云コトヲ筆ニ記シテ雲ニナキ名ヲ負セテ枉テ世間ノ人ニ巫山ノ神女ノ名ヲヨハル、也雲ハ山川ノ秀氣也禮記ニモ名山大川ノヨク雲ヲ出スヲ祭ル法アリ

四天梵宮

爲詩樂土正當東　亀水猶澂千歳峒
深樹校雲金翠蓋　閑花點地爾天紅

金鉦長揭三更月　寶鐸高聲十里風
人去人來誰是主　蒲牢殷殷暮煙中

四天王寺ヲ詠ス○一二ノ句此寺ハ極条土ノ東門中心ニアタルト云也榜ニ曰釋迦如來轉法輪處當極条土東門中心亀水ノ流レハ今ニタヘスシテ峒ノ中ヨリワキ出ル也此寺ノ法ノタヘヌヲ云○三四ノ句植コメタル樹ノ梢ニ一片ノ雲カ、リタルハ畢蓋ヲサヽケ花ノ閑ニチリヲツルハ天ヨリフリ降ルカト思ナリ唐ノ太曆年中ニ僧儼雲花寺ニテ經ヲ講シケルニ天ヨリ花フリ降レリ○五六、句金ノ鏘ダル燈篭ハ八月ヨカヽゲテ常住ノ燈トセリ恒處夢中ノ闇ヲテラス寶鐸ハ高ク風ニ鳴テ十里ノ外ニテ聞ユ生死長夜ノ眠ヲサマス北魏ノ時水寧寺ヲ建テ九重ノ塔高九十丈ニ作レリ寶鐸ノ聲十里ニ聞ト書リ○七八ノ句背ヨリ今ニ此寺

ニ参ノ詣スル人此寺ニ住スル僧一人モ世ニトヾマラズ共ニ無常変化ノ世ナリ何レヲ貧トシ何ルヲ主トセン昔ニ聳ラヌモノハ殿々タル鐘ノ聲暮烟ノ中ニヒヽクニテ也世ノ無常ナルヲ云テ一篇ノ結セリ蒲牢ハ鐘ノ下也

住吉神社

住吉霊場神又神　不顯不羨德之純
千株松樹擁崖秀　万頃煙波浮宵巡
韓戎曾漂血流杵　我邦鎮敬角崩蘋
夜來圓月闢金鏡　彷彿于天岩戸春

住吉ノ社ハ四座ワタラセ玉フ○一二ノ句此住吉ノ神ハ神ノ中又神殊ニスクレ玉フ其名アキラ

カニ人皆ツカフヽツル是神德ノ純ナル故也詩清廟篇曰不顯不羨無射於人斯○三四ノ句此濱ニ生タル松ハ崖ヲカコンテ高ク秀タリ陶泉渕ノ詩冬嶺秀孤松又滄海万里ノ波ハ日ノ光ヲ浮メテ此濱ヲメクリテ穏ナリ○五六ノ句昔神功皇后三韓ヲ攻玉レ時此住吉第三座ノ神軍ノ先ヲカケ玉ヘハ三韓ノ夷賊打負テ血流レテ楯ヲタヽヨハス武成曰前徒倒戈攻于後以北血流漂杵我日本ノ人皆首ヲ地ニツケ礼拝シ長クサヽケモノヲ奉テ此神德ヲ仰ク角崩ハ額ヲ地ニ付ルコト也泰誓曰若崩厥角稽首蘋ハウキクサナリ神サヽケモノヲ云尤傳曰蘋蘩薀藻之菜可薦於鬼神○七八ノ句ヤウ〳〵日モクレ夜ニ入ヽ二東西クラクナル處ニ金鐘ヲヒラク月出テ社頭モテリカヽヤク昔天照大神天ノ岩戸ニコモラ玉シニ神糸ニメテ岩戸ヲ推ヒラキ玉ヘハトコヤミノ雲ハレシ神代ノ昔モカクヤト思ヒテ也洋々乎如在

其上ニ如在其左右ニ人意ヲ云也第十一周八天照太神ニテ渡ラセ玉也

難波十二景古來未聞有其聲也予客此地亦年吟風弄月蓋不爲不多矣於是擧其尤者十二且綴早韻以贅其後晦翁尋芳於泗濱之春程夫子學少年於前川之花柳游觀君子之所不弃耶今也非肯擬之只攄味嘆之不可已矣於戲蛙鳴蟬噪漫聒人耳爾延寶丙辰春二月甲子日散人山本洞雲記

難波十觀

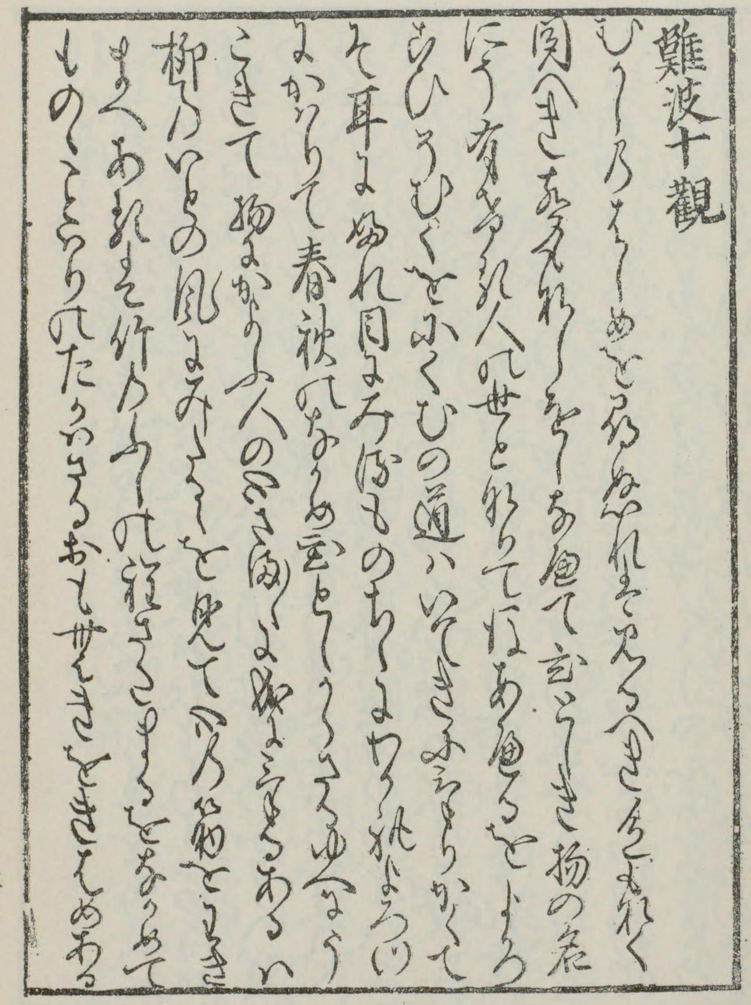
解題

一　『難波十觀』は、延寶八年庚申（我が二三四〇　西暦一六八〇）の開板。跋文の字句によりて山本洞雲の著と斷ずることが出來ます。序文の末節に『――玄かはあれど五ツの花をいつゝの友とせしためし』云々の語あるにより、この『難波十觀』の著は、明暦（我が二三一五――二三一七　西暦一六五五――一六五七）のむかし、堂島にあつた小川宗五の五花堂のことが、執筆の動機となつたものかとも推測されます。

一　堂島に五花堂のあつたことは、寛政の『攝津名所圖會』に『――近歳（キンセイ）五花堂といふ風流者あり原（モト）は洛（ミヤコ）に住みしが、浪花に移りて、庭に梅、櫻、牡丹、蓮、菊を植ゑて五花堂と號す、羅山文集に見えたり――』と書かれてゐます。『羅山文集』卷十七『五花堂記』に依りますと、五花堂の主人小川宗五は京都の人で、羅山とは永い閒の昵懇であつたが、承應（我が二三一二――四　西暦一六五二――四）の末に浪速に徙り住み、庭に梅、櫻、牡丹、蓮、菊、以上五種の花を植ゑ、年中、花を見ぬ日はないとて、五花堂と名づけたとあります。さてその五花堂は、どの邊にあつたでせうか、かの近松が『心中天網島』の妙文を生んだ蜆川、その蜆橋附近、今の大阪市北區堂島裏壹丁目に存在してゐたことは疑ふ餘地がありません。

一　五花堂の庭に榮へた五種の名花、それにもました樹木の眺めを、浪速のうちにもとめたら、どこであらうか。かういふ考へから、高津の梅、稲荷の柳、東御堂の海棠、天王寺の櫻、寶緑寺の牡丹、洞巖寺の藤、生玉の蓮、明静院の菊、妙壽寺の楓、天滿宮の松、以上の十觀を選んだ著者は、心ひそかに五花堂の眺めにも勝るとの意味から、一つ一つに、七絶一首とその詩の解釋とを添へ、やがて公にしたのが、この『難波十觀』ではないでせうか。

一　この『難波十觀』は、稀觀本として珍重すべきもの。本叢書刊行會にては、南木芳太郎氏の祕藏本を借受け、特にこの珍本の面影を傳へんがため、全文を凸版とし、その大きさを原本の十分の八に縮め、その製版にも充分の注意を拂つたつもりです。猶、この書の著者たる山本洞雲については、別に小傳を草し、本冊の末尾に添へることに致しました。



難波十觀

布

は松ノ色乃新きまさるとうたへるを
名乃高き人乃詠を見て世なれぬるまこの月ハ
梅の花乃香をとゝめてかくれ遊乃をゝへ
あらしけんハ梅と称し紅梅と称し
称するハ一説ハ春の雪ひて春ハ寿のあるべしひま
ひとして春ハへれき不ま面ゝ秋ハ秋乃深のま
ひら紅くたゝりれき方よたゝら水ま花さ紅濃
ま自へる木草乃名とかゝへ十乃品をさゝめ花
うゝれゆゝるとゝゝね雅後十訳と名つけて
称ゝゝゝゝかゝるゝたゝてゝゝをゝなゝさめ
けふまを色をひゝひゝるゝたゝひゝれる面ゝ春ゝ

六

雪乃ゝゝにやゝゝひてゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝかゝゝゝ花乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ひゝゝゝゝ 御事 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
草ゝゝゝ花の主ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

七

序

かゝきくの色もさまざまにわきまへぬ人もなくて
あるもなきおとしをもてあそぶこゝろはあれども
ふるき世のきりのあはれとよろこばぬ心なかるべし
いつきのわたれあるはんこゝろいとなれとゆめのたゝ
いりくれぬとをもてなすあるはまたしばし
ものをかたるかたらひをまはひとりきあれ
とをきかたをうらやまはひとりかたる場にをも
かしらるものをかなしびて沒ひとりきりあるかゝ
れとをあるはたゝあかしもの

二

難波十觀

高津宮臘梅

香肌玉骨本皇家　臘裡開春領歲華
千古難波詠成後　江南揔屬一枝花

此詩ハ高津宮ノ臘月ノ梅ヲ詠全備難波皇子ノ
御事ヲ以テ作レリ○一二ノ句此花香キ肌玉ノ骨
本来皇家ノ種ナリ人間ノ種ニアラス臘月ニ花ヲ
開春ヲ閲シ留テ年光ヲ領知セリ是ハ難波皇子
イマタ即位シ玉サル時天下ヲシロシメス徳ヲ備玉ヲ
云○三四ノ句昔王仁ノ難波津ニサクヤ此花冬ゴモリ

今ハ春ヘトサクヤ此花ト詠セシ後ハ江南ノ風景ハ捨テ一枝ノ梅花ニ屬ス更ニ上コス花ナシトナリ難波ハ江ヲヘタテ、帝都ノ南ニアル故ニ江南ト云ナリ昔シ陸凱ノ江南ヨリ范曄ニ梅花ヲ贈シ詩ニ江南無所有聊贈一枝春ノ

稲荷社楊柳

垂柳受風飄晩霧　湧今如汨旋如脩
年年繰出黄金縷　漏洩春光無力縫

此詩ハ博労町ノ稲荷社頭ノ柳ヲ詠○上ノ句垂々ル柳風ヲ受テ晩景ノ霧タル空ニヒルカヘル枝ノ

湧アガルトキハ水サキノアカル如ク旋ルトキハ水ノウツ、ク如シ莊子曰興脩俱入與汨偕出○三四ノ句此柳ハ年ク、ニ黄金ノ色ノ如クナル縷ヲイトクリ出セトモ春光ヲムスビトヾムルニカナクシテ春ヲモラシ出スナリ柳ヨリ春色ノ始ルコトヲ云ナリ黄金縷ト云ハホメタル辭ナリ柳ノワカメノ出ル色ヲ云ナリ唐ノ李商隱ノ新柳ヲ詠スル詩ニ已帶黄金縷仍殘白玉枝杜子美ノ詩ニ漏洩春光有柳條

東御堂海棠

一樹晨粧露未乾　堂前旭日已三竿
丹精絳蕚嬌無力　認作華清睡起看

此詩ハ東御堂ノ海堂花ヲ詠全篇楊貴妃ノ事ヲ以テ作レリ震旦國ニ云ル海堂ハ我朝ニ云ル櫻ノコトニ聞ユ又山櫻晩櫻ノ名モアリ我朝ニテハ櫻ノ外ニ別ニ一種ノ海堂アリ今ノ東御堂ノ庭ニアル花是ナリ○一二ノ句此一樹ノ花ノ晨ノ粧ハ露イマタカハカスヌレ〳〵トシタリ堂前ノ旭日ハ三竿ハカリノホリテ已ニ日タケタルナリ人ノ朝寢シタルヤウニ云ナセル也○三四ノ句此花丹キ拊絳蕚ウツクシクテカナキ有サマハ其一ハ楊貴妃ノ華清宮ノ睡起ノ姿ヲ見ルコトヲスルトナリ拊ハ花ノ坐ナリ蕚ハハナブサナリ長恨歌ニ侍兒扶起嬌無力楊妃外傳曰明皇嘗召太真妃々被酒新起帝曰此乃海棠花睡未足也

天王寺垂櫻

絲〻綴王萬條同　雖蕚粧成古梵宮
終日檻前何所見　一雙白鳳舞春風

此詩ハ天王寺ノ塔ノ前ナル糸櫻ヲ詠○一二ノ句此櫻ハ絲コトニ玉ヲツヽリツラヌキシ如ク花咲テ

万々ノ條長クモナク短クモナク同レクソロウタリ
此アサヤカナル蕚ヲリテ古キ梵宮ヲヨソヒナ
セリ○三四ノ句終日檻ノ前ニ何ヲカ見タルソト
云ニ白キ鳳凰ノ一双春風ニ舞タルヲ見タリナリ
花ノ風ニヒルカヘルヲ白鳳ノ舞ニ云ナセリ此サ
クラハ東西ニ二本ナラヒタル故ニ一双ト云リ

寶縁寺牡丹

專名獨號百花王　國色天顔自主張
萬紫千紅咸臣妾　春来頒賜御炉香

此詩ハ天滿東寺町寶縁寺ノ牡丹ヲ詠ス○一二句

牡丹ハヒトリ其名ヲホシイマヽニシテ百花ノ王
ト號ス誠ニ國中無双ノ花ノ色天顔ヲ生レウケテ
自然ノマヽニ春ヲ主張ス唐ノ李正封ノ牡丹ノ詩ニ
國色朝酣酒晖雅曰牡丹爲花王芍藥爲花相○三
四ノ句牡丹ハ花ノ王ナレハ万紫千紅モロ〳〵ノアラ
ユル花ハ皆花王ノ臣妾ナリ春ニナレハ花王ノ御炉
ノ香ヲ頒タマハリテモロ〳〵ノ花ヲカウハシカラシ
ムルナリ

洞巖寺紫藤

下攘砂磧上晴天　密葉稠花轉纏綿

剛被高風吹嫋嫋　紫山搖動落暉前

此詩ハ寺町洞岩寺ノ藤花ヲ詠ス○一二ノ句此藤下ナル枝ハ庭ノ砂ヲハラヒ上ナル枝ハ晴天ヲハラフ容キ葉稠キ花思ノ〻ニ〻トヒツラナレリ○三四ノ句剛テ空フク風ニ此花ノサキミタレタルヲ吹レタル有サマ紫色ナル山ノ落日ノ前ニウコキ出ルヤウナリ此藤ハ諸木ニ〻トヒカ〻リテ其形山ニ似タリ故ニ紫山ト作レリ杜子美ノ詩ニ雲隨白水落風振紫山悲コノ紫山ハ江陵ト云処ニアル山ノ名ナリ山ノ名ヲ取用テ藤花ノコト十二作

レリ是翻紫ノ格ナリ

生玉池白蓮

蓮塘拄杖獨遊遨　香露輕浮凝玉膏
破曉煙波緑池上　爲誰洗出水雲袍

此詩ハ生玉ノ官ノ前ナル池ノ白蓮ヲ詠ス○一二ノ句蓮花ノヒラケル池塘ニ杖ヲサ〻ヘテ只ヒトリ遊テ花ヲミル香キ露カロク花ニウカンテ玉ノアブラヲコラセリ○三四ノ句早朝ニ煙コメタル波緑ナル池水ノ上ニ此花ノヒラケタルハ誰人ニ著センタメニ此イサキヨクウルハシキ袍ヲアラヒ出セル

ソトナリ破曉ハ夜ノ明ハナレタル比ヲ云水雲ノ袍ハ白クイサキヨキ袍ナリ袍ハウエノキヌナリ白蓮ヲ水雲袍ニ見タテタルナリ李白ノ白蓮ノ詩ニ至今猶著水雲袍ト作レリ用カヘテ爲誰洗出水雲ノ袍ト作レリ是撰骨格ナリ

明静院菊花

元亮香魂散不殫　化爲秋菊性含酸
蕭然尚託驅衆想　玉蕊金英霜裏寒

此詩ハ天王寺ノ僧坊ノ中明静院ノ前ニアル園ノ菊花ヲ詠ス今ノ明静院ノ住持ハ一舍利ナリ○

此詩ハ菊ヲ陶淵明ノ事ニ作ナセリ一二ノ句昔ノ陶元亮死シテ其香キ魂散シツクサス化シテ秋菊トナル此花ノ性サビ〳〵トシタリ含酸トハタトヘハ酸キ味ヲナメタル如ノ心地ヲ云面シロゲノナキ義ナリ文選ニ謝靈運ノ惠連ニ與レ詩ニ學別山阿含酸赴修畛○三四ノ句此花ハ蕭然トモノサビシクテ尚淵明ノ飯去来セシ時ノ想ヲ託セリ玉ノシベ金ノハナブサ霜ノ中ニ寒ク立ルハ淵明ノ世ヲノカレテ隱レタル有サマヲアラハセリ愛蓮說曰菊花之隱逸者ナリ